の部分でも基壇西辺はかなり削られている模様である。

1.29　TD42～45のトレンチを東に拡張し、南北トレンチとつなげる。

1.30　TD41～45のトレンチ掘り下げ。土壇の南側および、擁壁の迂回措置に向けて土壇北方の池内にもトレンチを設定する。

2.3　土壇北方池内トレンチの掘削開始。

2.4　土壇北方池内トレンチ東端で、柱掘形らしい遺構を検出。底近くのみ残る。掘込地業西北角から北西へのびる溝を一部掘り下げ、掘込地業にともなう排水溝であることを確認する。

2.5　掘込地業排水溝を半截。また、TI43の畦沿いを基壇西辺に直交するかたちで断ち割る。TD41～45トレンチでは、掘込地業の西辺が隅欠き状に屈折することを確認。

2.6　土壇北辺部と池内トレンチの清掃と写真撮影をおこなう。TI43の基壇西辺の断ち割りや西北角の排水溝の断面から、掘込地業の底には多数の礫を入れていることが判明。

2.7　掘込地業西辺に沿う南北溝の掘り下げ。やはり底に多数の礫を入れている。その西では掘立柱柱穴を精査し、3時期にわたることを確認。

2.10　土壇南辺トレンチの掘削にかかる。写真撮影に向けて調査区の清掃開始。

2.12　調査区清掃。降雪のため写真撮影は中止。

2.13　調査区の清掃と写真撮影をおこなう。

2.14　実測用水糸の設置。土壇東辺に東西トレンチを設定し、掘削を開始する。

2.17　遺構実測開始。基壇土は土壇南辺のトレンチまでは広がらず、東西棟建物であることが確定する。金堂とみてほぼ間違いない。

2.18　実測作業。土壇南辺トレンチ掘削。

2.19　実測作業。土壇南辺トレンチの写真撮影。土壇東辺トレンチの掘削を続行する。土壇北方池内トレンチの埋め戻し開始。

2.20　実測作業。土壇東辺トレンチで、基壇土とその東に広がる砂利敷を確認する。

2.21　実測作業。土壇東辺トレンチで掘込地業の東辺を検出し、掘込地業の東西幅は36.2mと判明する。

2.22　土壇東辺トレンチの清掃と写真撮影。

2.25　報道機関によるヘリコプター空撮。

2.26　土壇東および南辺トレンチの実測開始。

2.27　記者発表および地元説明会。実測作業。

2.28　平面図への標高記入。現地説明会準備。

3.1　現地説明会。参加者約1200名。

3.2　平面図のチェックと標高補測。

3.4　土壇南辺トレンチの埋め戻し開始。土壇東辺トレンチほかの土層線引き。

3.5　土壇東辺トレンチほかの土層図作成。基壇東辺はのちに破壊されている。

3.6　土壇東辺トレンチを深掘りし、掘込地業底面を確認する。土層図の作成。

3.7　土壇上中央部のトレンチ掘削と写真撮影。土層図の作成を続行する。

3.10　空撮に向けて調査区の清掃を開始する。土層図作成続行。

3.11　ヘリコプターによる空撮。標定点測量。

3.12　吉備池越しに地上写真を撮影する。掘込地業西北角の排水溝やTD41～45トレンチ掘込地業の断ち割り。土壇東辺トレンチの埋め戻し。

3.13　土壇西方の掘立柱穴の断ち割り。掘込地業西北角の排水溝とともに写真撮影をおこなう。断面実測と平面図への加筆。

3.14　遺構面保護のため調査区全面に川砂を敷く。土壇北辺部調査区とTD41～45トレンチ・土壇上トレンチの埋め戻し開始。

3.17　範囲を広げた地形測量を実施するため、測量基準点を増設し、基準点測量をおこなう。

3.18　擁壁以北の遺構の有無を確めるため、土壇西辺の調査区を一部拡張する。遺構面は完全に削平されている。西方土壇を含む地形測量開始。

3.19　昨日拡張した部分の実測作業。

3.21　基壇西辺の調査区以外の埋め戻し終了。地形測量続行。

3.24　埋め戻し完了。

3.25　畑部分の耕起。機材撤収開始。

3.26　すべての作業を終え、本年度の調査を完了する。



Fig. 6　発掘風景（第81-14次）



Fig. 7　実測風景（第81-14次）

B　第89次調査（塔・南面回廊）　1998年1月7日～4月17日

1.7　金堂西方の土壇とその南で、探査のための測量と調査区の設定をおこなう。
1.9　土壇部分の探査。
1.13　土壇南方の水田部分の探査。
1.19　機材搬入と調査区周辺の草刈り。
1.20　土壇南東の調査区から発掘を開始する。
1.21　土壇南辺の調査区および土壇南方の南北トレンチ（以下、南トレンチ）の掘削。
1.22　土壇南辺の調査区では、明黄褐色の山土の整地土が広がる状況を確認。
1.23　南トレンチを掘り下げる。
1.26　土壇南西の調査区の掘り下げを開始する。南トレンチの掘り下げ。
1.27　土壇南西および西辺の調査区の掘り下げ。
1.28　土壇西辺の調査区では掘込地業の痕跡は認められず、基壇の西端もこの調査区までは達しないことが判明する。
1.29　地区杭打設。南トレンチの東に、東南トレンチを設定する。
2.2　土壇南東および南辺の調査区と東南トレンチで、遺構検出と掘削をおこなう。
2.3　遺構検出ならびに掘削を続行。
2.4　土壇南辺の調査区では、土壇の周囲が次第に削られていった状況が明らかとなる。
2.5　土壇南辺では、ベースとなる暗褐色土が低くなる部分に山土の整地をした状況を確認。
2.6　土壇南東の調査区の土層写真撮影。南トレンチの掘り下げ。
2.9　土壇南東調査区の土層図作成。土壇南西の調査区と南トレンチの遺構掘削。
2.10　土壇南東調査区の土層図完成。土壇西辺および南西の調査区の遺構掘削。
2.12　土壇西辺の調査区と東南トレンチの遺構掘削。写真撮影に向けての清掃。
2.13　土壇周囲の調査区の写真撮影をおこなう。
2.16　土壇上の調査にはいる。土壇の中心から西へ向かうトレンチ（以下、土壇上西トレンチ）の掘削開始。
2.17　土壇上中央から屈折しつつ南へ向かうトレンチ（以下、土壇上中央トレンチ）とそこから東へ向かうトレンチ（土壇上東トレンチ）の掘削開始。基壇土の西側の落ちを出す。土壇南東および



Fig. 8　探査風景（第89次）

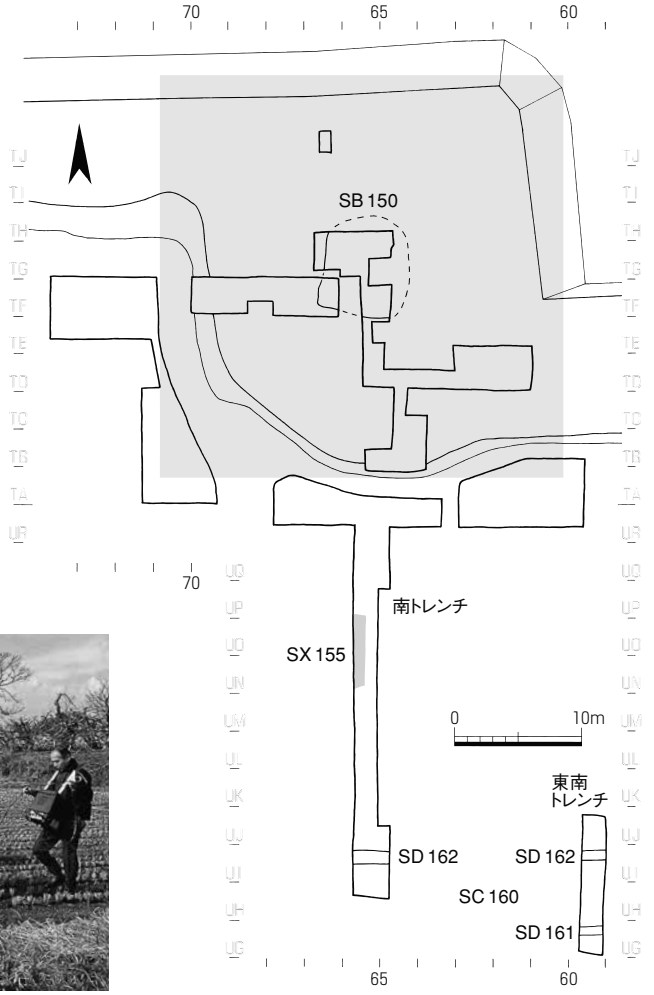


Fig. 9　第89次調査区　1:600

南辺の調査区と東南トレンチの実測。
2.18　基壇版築土には小礫が混じる。色調は上部が赤色系、下部が黄色系。
2.19　土壇上東・西トレンチの掘り下げ。土壇南トレンチの実測。
2.23　土壇上東トレンチを北へ一部拡張する。土壇上西トレンチの断ち割り開始。
2.24　土壇上中央トレンチ南端の断ち割り。基壇北端を探るため、TJ66地区に小調査区を設けるが、基壇土が続くことを確認。
2.25　土壇上西トレンチおよび中央トレンチ南部の断ち割り。
2.26　土壇上東・西トレンチの断ち割り。土壇上中央トレンチの断ち割りでは、南端のTB～TC付近まで版築が確認できる。土壇周囲の調査区の実測終了。
2.27　土壇上西トレンチの断面には、版築の途中でスロープ状を呈していたようすが明瞭に見える。掘込地業が存在しないことも確実となった。土壇中央の心礎想定位置を一部掘り下げ、拳大～半人頭大の礫群を確認する。土壇周囲の調査区の平面図に標高記入。
3.2　土壇中央の心礎想定位置および土壇東・中央トレンチ南端の掘り下げ。
3.3　土壇中央部の掘り下げは、一部版築層に達する。土壇中央トレンチ南端の断ち割り完了。
3.4 土壇上TF64～66では､大きな穴の輪郭がみえる｡心礎抜取穴か｡土壇中央トレンチ南端の土層線引き。
3.5　土壇中央部の巨大な穴は、塔（SB150）の心礎抜取穴と考えてよい。根石らしい石も認められる。土壇上西トレンチの断ち割りを延長。
3.6　土壇西寄りの版築途中にみられるスロープは、心礎を引き上げるためのもの。土壇上中央トレンチを拡張し、心礎抜取穴の西肩を確認する。
3.7　土壇中央部の土層図作成。
3.9　空撮に向けて調査区の清掃を開始する。
3.10　調査区の清掃。
3.11　ヘリコプターによる空撮と地上写真撮影。記者発表ならびに地元説明会の準備。
3.12　記者発表および地元説明会。
3.13　現地説明会準備。
3.14　現地説明会。参加者約1400名。
3.16　東南トレンチの西壁沿いを断ち割り、UG地区で東西方向の石組溝を検出する（SD161）。南面回廊（SC160）の雨落溝であろう。土壇南東および南辺調査区と南トレンチも壁沿いを断ち割る。南トレンチの北寄りでは小石敷（SX155）を確認。
3.17　土壇上中央トレンチの土層図作成。土壇南東の調査区から埋め戻しを開始する。
3.18　東南トレンチ石組溝と南トレンチ小石敷の写真撮影および実測。
3.19　東南トレンチと南トレンチのUI区で、東西方向の溝と側石の抜取痕跡を確認する（SD162）。南面回廊の北雨落溝にあたり、３日前に検出した石組溝は南雨落溝と判明した。溝の心々間距離は約６ｍである。写真撮影。
3.23　東南・南トレンチの回廊北雨落溝の精査と写真撮影をおこなう。
3.24　南面回廊の発見に関する記者発表。
3.26　埋め戻し続行。土壇上トレンチの平面実測と標高記入。土壇上西トレンチ土層図作成。
3.30　土壇上中央トレンチ南端部の土層剥ぎ取り。土壇上東トレンチの土層図を作成する。
3.31　土壇上東トレンチの断ち割りと西トレンチの土層剥ぎ取りをおこなう。
4.1　土壇上調査区の補測。埋め戻し続行。
4.2　土壇上中央トレンチの土層図作成。土壇上は西トレンチから埋め戻しを開始する。
4.3　土壇上に設けたトレンチの実測作業を完了する。埋め戻し続行。
4.7　土層図のチェック。埋め戻し続行。
4.8　水田部分の調査区埋め戻しが完了する。
4.9　土壇上トレンチの埋め戻し。
4.13　埋め戻し続行。
4.16　埋め戻し完了。機材撤収開始。
4.17　畑部分の耕起。本年度調査を完了する。



Fig. 10　現地説明会（第89次）



Fig. 11　土層転写風景（第89次）

C　第95次調査（南面回廊・西面回廊）　1999年1月7日～4月22日

1.7　機材を搬入し、中門の想定位置である主調査区（南区）から発掘調査を開始する。
1.8　南区の耕土除去（～1.12）。
1.13　東端から床土を除去し、遺構検出開始。
1.14　UG地区で東西溝とその両側の側石が顔を出す。昨年確認した南面回廊SC160の南雨落溝（SD161）の東への延長にあたる。
1.18　西へ向かって順次床土を除去し、遺構検出作業をおこなう。南区全域に地区杭打設。
1.19　遺構検出を続行する。UN51で土坑（SK193）を確認。
1.20　金堂と塔の中間点でも回廊の南雨落溝がまっすぐのび、想定位置に中門は存在しないことが明らかとなる。
1.21　西面回廊の確認を先行することとし、塔基壇西方のトレンチ（西区）の発掘にかかる。75～79地区の掘削開始。
1.25　遺構検出作業。TE・TF77で柱穴を確認（SA204）。
1.26　遺構検出と掘削を続行する。
1.27　80～85および10地区の掘削開始。
1.28　上記地区の遺構検出。
1.29　TE83で野井戸とみられる土坑を確認する（SE220）。
2.1　80～84地区の調査区を北と東に一部拡張する。
2.2　TE81とTG81で土坑（SK216・217）を検出。これに切られるかたちで、黄色の山土を埋土とする溝（SD215）が西南西にのびる。
2.3　11～18地区の掘削にかかる。
2.4　11～18地区の遺構検出作業。
2.5　EF11～13で東西に並ぶ柱穴を3つ検出する（SA227）。
2.8　11～18地区の遺構検出続行。
2.9　EE11～18の東西溝（SD226）を確認。南区の調査を再開する。
2.10　南区の遺構検出作業。
2.15　西区80～83地区を南に拡張する。EE11～18東西溝に含まれる木片の発掘。
2.16　南区の遺構検出を続行する。西区TE83の野井戸の輪郭確認。EE11～18東西溝の木質遺物を取り上げ。
2.17　南区の遺構検出と西区EE11～18東西溝の木質遺物取り上げ、80～83地区遺構検出。
2.18　南区および西区80～83地区の遺構検出。
2.19　南区の遺構検出続行。西区80～83地区の遺構と84地区以西の黄色山土の広がりを追う。
2.22　南区の西壁沿いに排水溝を掘削する。西区80～85地区の遺構検出続行。
2.23　南区の遺構掘削と西壁の土層線引き。UI地区で、南面回廊北雨落溝および側石抜取痕跡を確認する。またUG・UH地区には、南雨落溝に北接して、それより新しい東西大溝（SD180）がある。南雨落溝の掘り下げ開始。西区は、EE10で西からの東西溝の続きを確認。78地区では砂混じりの南北溝を検出。西面回廊の東雨落溝か。
2.25　南区は、南面回廊南雨落溝の掘り下げと北雨落溝側石の抜取痕跡の検出を続行する。西区84地区以西を一部拡張。回廊西南角想定位置に小調査区（西南区）を設けて掘削開始。
2.26　西区の78地区で、西面回廊（SC200）の雨落溝（SD201）を確認。側石は抜き取られている。西雨落溝は水田畦畔直下と推定。
3.1　南区は南面回廊南雨落溝の掘り下げ。西区EE10の東西溝（SD226）は、ここが東端となる。溝の北側には、EF13からつづく柱穴あり（SA227）。西南区の遺構検出。



Fig. 12　発掘風景（第95次）

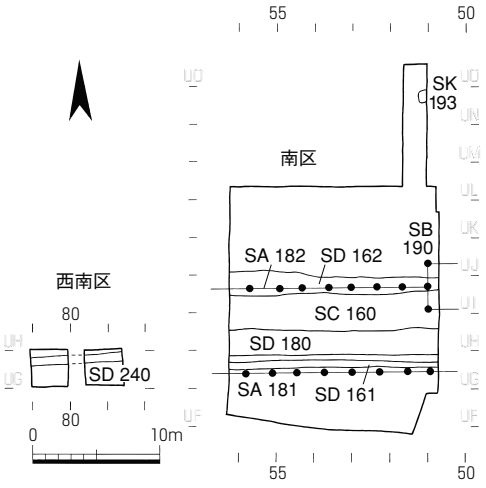


Fig. 13　第95次調査 南区・西南区　1:600

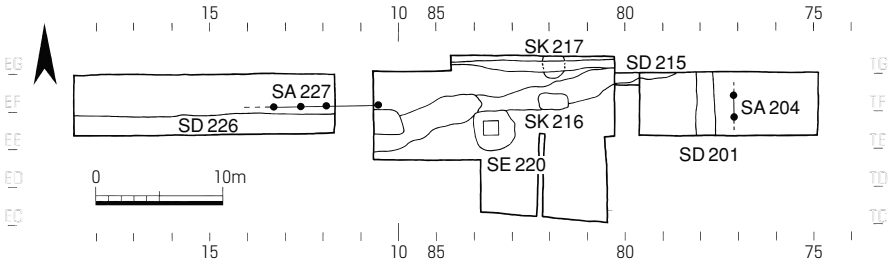


Fig. 14　第95次調査 西区　1:600

3.2　南区および西区の遺構精査。西南区では回廊南雨落にあたる石組溝は確認できない。
3.3　南区東端のUH～UJ地区で南北に並ぶ３基の柱穴を確認（SB190）。西区の清掃。
3.4　南区の遺構精査。西区は、写真撮影と土層図の作成をおこなう。
3.5　南区UG54～55では、回廊南雨落溝の南に接して、東西に並ぶ柱穴状の小穴を確認（SA181）。西区・西南区の写真撮影。
3.8　空撮に向けて、調査区の清掃と標定点の設置作業をおこなう。
3.9　ヘリコプターによる空撮。南区の地上写真撮影。
3.10　西区と西南区から平面実測開始。記者発表および現地説明会の準備にかかる。
3.11　記者発表。平面実測続行。
3.12　南区の細部写真撮影。現地説明会準備。平面実測続行。
3.13　現地説明会。参加者約360名。
3.15　西区EF11～13柱穴（SA227）断ち割り。西区の平面図作成と標高記入、土層図作成。
3.16　西区80～84地区の断ち割り。TF80から西南西へのびる溝（SD215）は、底部に大型の礫、最上部に黄色の山土を入れた一種の地業状を呈する。平面実測続行。
3.17　西区80～84地区の断ち割りを続行する。土層図作成。11地区以西は埋め戻しを開始。平面実測と標高記入続行。
3.18　西区77～84地区の断ち割りと土層図作成。
3.22　西区80～84地区の断ち割り続行。
3.23　西区80～84地区および西南区の断ち割り。
3.24　西区80～84地区の断ち割り、写真撮影。
3.25　断面実測および写真撮影。西区11地区以西と西南区の埋め戻し終了。
3.26　西区80～85および10地区の断ち割り。西面回廊西雨落溝の確認のため、水田畦畔を断ち割って調査する。
3.29　西区畦畔断ち割り部分の写真撮影と実測。石組溝自体は遺存せず、側石の抜き取りらしいくぼみは認められるが、きわめて痕跡的である。
3.30　南区のUG・UH地区東西大溝（SD180）を掘りはじめる。中層に瓦が堆積。西区80～85および10地区の埋め戻しを開始する。
3.31　南区東壁沿いの柱穴を断ち割る。西壁および北壁の土層線引き。
4.1　南区の断ち割りを続行する。UG･UH地区東西大溝の掘削と遺物取り上げ。
4.2　南区南面回廊の南雨落溝の南と北雨落溝に重複して、東西方向に並ぶ小柱穴を確認する（SA 181・182）。平面実測および断ち割り。
4.3　南区の実測作業をおこなう。
4.6　南区の実測を続行。
4.7　UG・UH地区東西大溝の掘削後、南区の埋め戻しを開始する。
4.8　南区の埋め戻し。
4.9　南区の埋め戻しを続行する。
4.12　南区の埋め戻しと西区の水田暗渠復旧。
4.13　西区の水田暗渠復旧と埋め戻し完了。
4.14～21　南区の埋め戻し。
4.22　南区の埋め戻し終了。機材を撤収し、本年度の調査を完了する。

D　第105次調査（僧房・東面回廊・金堂）　2000年1月7日～4月11日

1.7　中央区から掘削を開始する。
1.11　中央区および西区の掘削。
1.12　中央区・西区の掘削と地区杭打設。西区は橙黄褐色の地山面を出す。東区トレンチ設定。
1.13　中央区と西区の掘削および遺構検出作業。
1.14　中央区・西区の遺構検出と遺構掘削をおこなう。中央区では、平安時代の軒平瓦が出土。
1.17　中央区は、RB地区以南の瓦器を含む包含層を掘削する。西区北半部の土層写真撮影。
1.18　中央区RB地区以南の包含層掘削を続行する。西区は瓦器を含む包含層の掘削。
1.19　中央区は遺構掘削にかかる。平安時代の軒

丸瓦出土。西区では、L字状の3条の溝（SD288～290）とそれを切るコの字状の溝（SD285～287）を確認。

1.20　中央区の遺構掘削と西区包含層掘り下げ。

1.24　中央区の遺構検出と掘り下げ。西区の南端付近で自然流路を確認する。

1.25　中央区RB～RF包含層の掘り下げ。西区は、3条の自然流路（SD291～293）を掘削。

1.26　中央区の遺構検出作業。RB～RF間で柱穴を確認する。

1.27　中央区の遺構検出を続行する。東区北トレンチの掘削開始。地山上に粗砂と粘土の互層が堆積する。ある時期の自然流路か。

1.31　中央区はRB地区以北の遺構検出続行。東区北トレンチの25～26地区に瓦礫の堆積あり。

2.1　中央区全体の遺構検出作業。大型の柱穴が見え始める。東区南トレンチの掘削開始。

2.2　中央区のRD・RF地区に南北の側柱列をおく東西棟掘立柱建物（SB260）を検出。柱掘形の一辺1.5～1.8mと大きい。東区の壁削りと排水溝掘削をおこなう。

2.3　池内調査区（東端のトレンチ）の掘削にとりかかる。赤褐色の積み土らしい土層を確認するが、以南は池により削平されている。

2.4　中央区の掘立柱建物部分を拡張する。西区南半の包含層および遺構掘り下げ。

2.7　中央区拡張部分の掘削。池内調査区を東西に細長く拡張する。

2.8　中央区と池内調査区の拡張部分の掘削をおこなう。西区遺構精査。

2.9　中央区の掘立柱建物SB260が東へ1間分のびることが判明し、トレンチを再拡張する。東区北トレンチの掘削。

2.10　中央区の拡張部分と東区北トレンチの掘り下げ。

2.14　中央区拡張部分の掘り下げを続行する。池内調査区の清掃。

2.15　中央区の掘立柱建物の東妻を確認する。西区と池内調査区の写真撮影。

2.16　中央区掘立柱建物の東妻柱を検出する。東区南トレンチの掘り下げ。

2.17　東区南トレンチの掘り下げ。帯金具や軒丸瓦などが出土。

2.18　東区南トレンチの西端近くで、金堂基壇外周をめぐる溝（SD250）を検出する。25地区南北溝（SD306）の掘り下げ。瓦器出土。

2.21　東区南トレンチの西端で金堂基壇の掘込地業を確認。北トレンチは、SD306およびそれから分岐する東西溝（SD307）の掘削。

2.22　東区北トレンチの遺構検出。池内調査区（東端のトレンチ）を断ち割り、地山の落ちこみを確認する。赤褐色の積み土の下から土師器高杯（飛鳥Ⅰ）が出土。

2.23　池内に5m間隔で設定した6ヵ所のトレンチを順次掘削し、写真撮影をおこなう。赤褐色の積み土は中軸線から西へ40m以上のび、基壇土ではなく、整地にかかわるものとみてよい。

2.24　池内調査区の土層図を作成し、埋め戻しを開始する。中央区は写真撮影に向けて清掃。

2.25　中央区写真撮影。東区南トレンチ遺構検出。

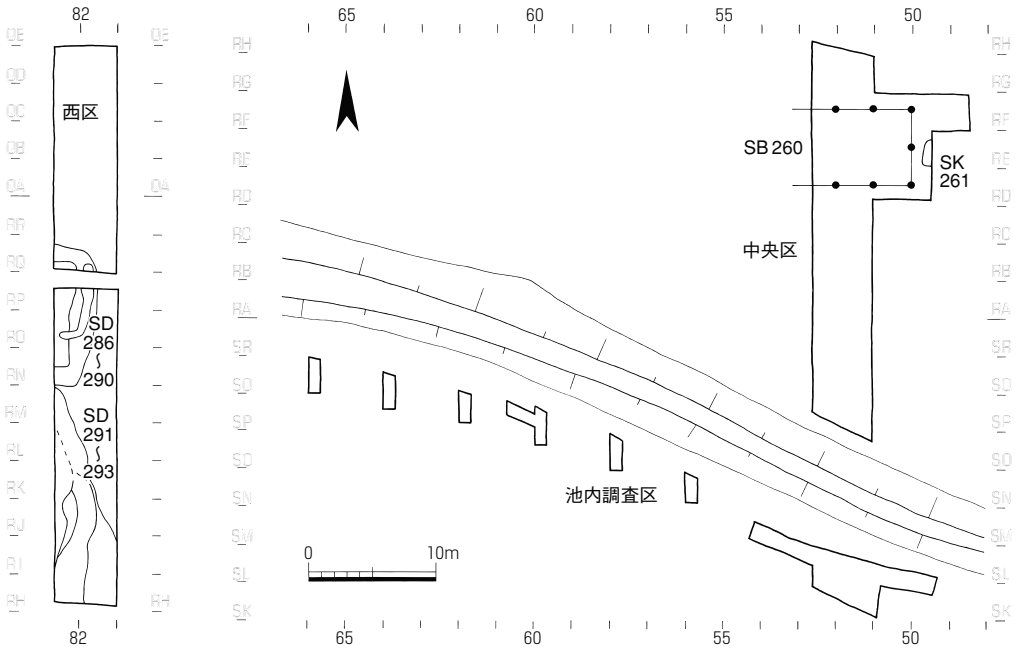


Fig. 15　第105次調査 西区・中央区・池内調査区　1:600

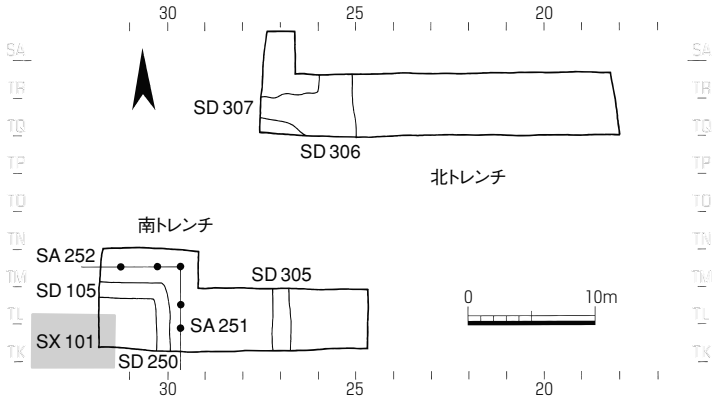


Fig. 16　第105次調査 東区　1:600

2.28　東区南トレンチでは、東面回廊SC300の西雨落溝（SD305）を検出する。池内調査区の埋め戻し終了。

2.29　東区南トレンチの西雨落溝を掘削し、埋土中の瓦を露出させる。

3.1　東区南トレンチの西雨落溝と瓦出土状況を写真撮影。回廊部分を精査するが、礎石の痕跡や足場穴は認められない。西区清掃。

3.2　東区北および南トレンチを拡張する。

3.3　東区北および南トレンチの掘削。東面回廊西雨落溝の土層を再検討し、本来は石組溝であったことを確認する。

3.6　東区北トレンチ写真撮影。南トレンチ拡張部分で、金堂基壇をめぐる溝とそれに沿う柱穴（SA 251・252）を検出する。

3.7　東区南トレンチ西壁の写真撮影と実測。空撮に向けて調査区の清掃をおこなう。

3.8　ヘリコプターによる空撮と東区南トレンチの写真撮影。記者発表準備。

3.9　記者発表および地元説明会。並行して実測用水糸を設置する。

3.10　中央区の平面実測。現地説明会準備。

3.11　現地説明会。参加者約600名。
央区の平面実測。現地説明会準備。

3.13　西区の断ち割り調査と土層図のチェック。

3.14　中央区平面実測完了。西区の埋め戻しを開始する。

3.15　中央区土層図作成。東区平面実測開始。

3.17　中央区掘立柱建物（SB260）柱穴の断ち割り。柱掘形の底に石をおくものあり。

3.21　中央区の断ち割りを続行する。東区の平面実測と標高記入。西区の埋め戻し終了。

3.22　中央区の埋め戻しを開始する。東区の平面実測と標高記入、土層図作成。

3.23　東区南トレンチの金堂基壇周溝を断ち割る。礫が３～４段積み上げられている。北トレンチ標高記入と土層図作成。

3.24　東区南トレンチの柱穴（SA251・252）の断ち割りと実測をおこなう。

3.27　東区南トレンチの金堂基壇周溝断ち割り続行。底面の標高は、第81-14次調査の西北隅部分にくらべて約50㎝高い。

3.28　東区南トレンチ北壁の土層区分。

3.29　東区南トレンチ北壁の土層図作成。

3.30　東区南トレンチの回廊部分の断ち割りと精査をおこなう。

3.31　東区南トレンチ回廊の断ち割り続行。足場穴は確認できない。中央区の埋め戻し終了。

4.3　東区の埋め戻しにかかる。

4.4　機材撤収。

4.5～10　東区の埋め戻し続行。

4.11　水田部分の耕起。本年度の調査完了。



Fig. 17　現地説明会（第105次）



Fig. 18　現地説明会（第105次）

E　第111次調査（中門・僧房）　2001年1月9日～4月24日

1.9　南区の掘削を開始する。
1.10　地区杭の打設。
1.11　南区の掘削。
1.12　掘削続行。
1.15　南区の東北角から南西に向かって、旧流路の砂礫層が堆積する。
1.16　南区の掘削を続行。
1.17　西壁沿い排水溝に玉石がかかる。回廊基壇の南雨落溝か。
1.18　UG42で南北に並ぶ２列の玉石を確認。昨日の玉石が回廊南雨落溝とすれば、それから折れる中門基壇の西雨落溝となる可能性あり。
北壁の土層図作成。
1.19　UH地区で東西溝を検出。第95次調査の藤原宮期の溝SD180の延長にあたる。
1.22　南区北端より素掘小溝の掘り下げと遺構精査を開始。
1.23　UI38～42で、７尺間隔で東西に並ぶ柱穴を確認する（SA325）。足場か。
1.24　UG地区に石の抜取痕跡らしいものあり。中門基壇の南雨落溝か。
1.26　土層線引き。
1.29　南区東壁と西壁の土層図作成。北区の掘削を開始（南北39m×東西５mのトレンチ）。
1.31　南区の精査をおこなうが、依然、中門基壇の北雨落溝は認識できない。UI36～37で、柱列（SA325）の延長を検出する。
2.2　南区西壁の土層図作成。北区の排水溝を掘削し、地区杭を打設する。
2.5　南区南壁の土層図作成。北区掘り下げ。
2.7　南区土層図作成。北区の掘り下げ。
2.8　南区土層図作成。北区掘り下げ続行。
2.9　北区の掘り下げを続行する。
2.13　北区掘り下げ。北壁寄りでは整地土が厚く、地表から地山まで１m以上ある。
2.14　SI地区で東西溝（SD350）を検出。
2.15　北区遺構精査。東西溝SD350を完掘する。奈良時代の遺物が出土。
2.16　北区遺構精査。SN地区以北は、地山が急激に下がり、舌状丘陵の縁辺部にあたる。
2.19　北区の清掃と写真撮影をおこなう。実測用水糸の設置と土層線引き。
2.20　北区の平面図および土層図作成。
2.21　北区の平面図標高記入と土層図作成。SN地区以北の整地土を掘り下げる。
2.22　北区のSP・SR地区で大型の柱穴を確認する（SB340）。北側の隣接地で桜井市文化財協会が発掘した僧房とみられる建物（SB400）とほぼ同規模。北側の柱穴の北と南側の柱穴の南には東西溝が走る。溝には造り替えがある。
2.23　建物の規模を明らかにすべく、東西に大きく拡張した調査区を設定。SQ30柱穴より吉備池廃寺の軒丸瓦出土。SG～SH31では、東西棟掘立柱建物（SB348）の東妻を検出する。
2.24　北区東拡張部分の掘削。
2.26　北区東・西拡張部分の掘削。SO28～29で石敷を検出。
2.27　北区東・西拡張部分の掘削と地区杭打設。
2.28　北区拡張部分の掘削。東拡張部分は柱穴が見えないため、整地土をはずす。
3.1　北区拡張部分の掘削。東拡張部分の整地土下で柱掘形の輪郭をようやく確認する。整地土には土師器高杯（飛鳥Ⅰ）と焼土が含まれる。『大安寺縁起』が伝える火災に関わるか。
3.2　北区の東拡張部分の焼土と高杯の写真撮影。西拡張部分も、整地土上で抜取穴は見えるが、柱掘形は見えない。SQ34～35で別の掘立柱建物（SB345）の柱穴を検出。
3.3　南区の精査。南面回廊の両側の雨落溝が中門部分で屈折することを確認し、３×２間程度の中



Fig. 19　発掘風景（第111次）

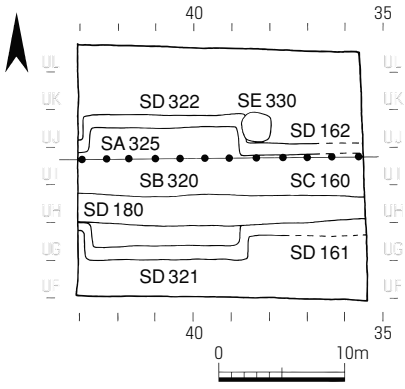


Fig. 20　第111次調査 南区　1:600

門の存在が明らかとなる。回廊の礎石抜取穴らしい土質の違う部分（SX324）も検出。UI地区の東西柱列（SA325）は、第95次調査のSA182の延長にあたるが、中門の北雨落溝ないし側石抜取痕跡の埋土の上から見える。

3.5　南区の中門および回廊の雨落溝の精査を続行する。北区は、西拡張部分の遺構検出。西壁にはSB340の柱掘形がかからない模様。東西10間か。建物の周囲をめぐる溝は上下２層あり。

3.6　南区の中門・回廊北雨落溝の精査。北区西拡張部分の建物外周溝の掘削。建物部分をいったん掘りくぼめて柱掘形を掘り、柱を立てたのちに整地を施しているらしい。

3.7　南区は中門基壇東北角付近の精査と遺構掘削をおこなう。北区も遺構検出を続行。SP32以北に設定した南北畦の土層図を作成する。

3.8　南区は中門東北角付近の雨落溝の精査。南面回廊北雨落溝は削平のためか途中でとぎれ、東壁まで続かない。北区は遺構検出とSB340柱穴の掘り下げ。抜取穴に瓦などが含まれる一方、掘形には炭や焼土が混じり、建築前に近くで火災があったことをうかがわせる。なお、これと埋土の状況を異にするSB345は、４×２間の規模で妻柱をもたない構造となる模様。

3.9　南区の中門北雨落溝を検出する。北区はSB340柱穴の検出と掘り下げ続行。

3.10　南区の南北畦を除去。

3.11　南区の中門・回廊北雨落溝を掘り下げる。中門の礎石痕跡を探すが、見つからない。

3.12　南区は清掃と中門柱想定位置の精査。南側柱筋にそれらしい土質の違いが認められるが、きわめて痕跡的である。北区はSB340柱穴の検出と掘り下げ。西の妻柱を確認する。

3.13　南区写真撮影。北区は東拡張部分を精査し、東壁際でSB340の柱掘形を検出する。柱間は、桁行が約2.5m、梁行は約2.7m。

3.14　北区の東壁際でSB340の東妻柱を検出し、建物規模は11×２間と確定。清掃後、北区の写真撮影をおこなう。

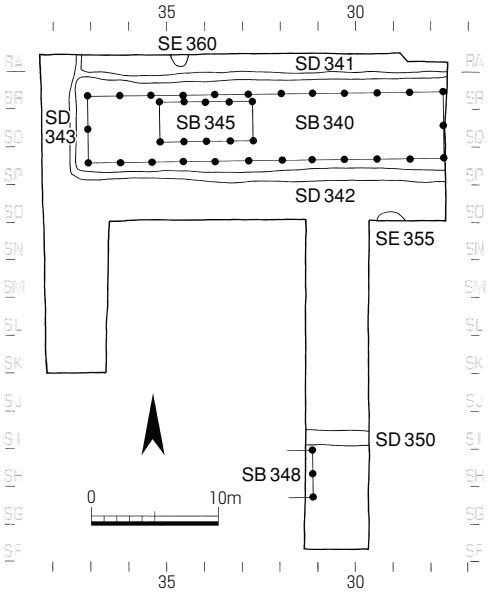


Fig. 21　**第111次調査 北区**　1:600

3.15　記者発表準備。

3.16　ヘリコプターによる空撮。北区写真撮影（補足）。記者発表と地元説明会。

3.19　調査区の清掃と現地説明会準備。

3.20　現地説明会。参加者約1000名。

3.21　南区と北区の平面実測。

3.22　南区は中門雨落溝の精査と藤原宮期東西溝（SD180）・UJ38大土坑（SE330）の掘り下げ。中門の雨落溝は直角に屈折せず、ややカーブを描く。北区平面実測。

3.23　南区のSD180・SE330の掘削を続行する。北区は平面実測および標高記入。

3.26　南区のSD180・SE330の掘削と清掃。

3.27　南区写真撮影。

3.28　南区の断ち割り調査。あわせて、第95次で検出した東西方向の柱列SA181の延長を精査するが、確認できない。

3.29　南区の断ち割りと図面チェックをおこない、埋め戻しを開始する。北区土層線引き。

3.30　北区の土層線引きと土層図作成。



Fig. 22　**現地説明会**（第111次）



Fig. 23　**現地説明会**（第111次）



Fig. 24　撮影風景（第111次）



Fig. 25　土層転写風景（第111次）

4.2　北区土層図作成。
4.3　北区東壁にかかるSB340東南隅柱は、別の先行する柱穴（整地以前のものと判断）を切っているらしい。土層図作成続行。
4.4　北区SO28～29で井戸状の落ち込み（SE355）を確認。2.26に検出した石敷はこれにともなうものだろう。清掃後、写真撮影。SB340柱穴の断ち割りを開始する。
4.5　北区SB340の断ち割りと断面図作成。
4.6　北区の写真撮影と断面図作成。RA34の土坑は井戸か。南区の埋め戻し終了。
4.9　北区のSB340以外の柱穴その他を断ち割る。断面図・土層図作成。図面チェック。
4.10　北区の断ち割りと断面図作成、図面チェック。RA34土坑は曲物を据えた井戸らしい（SE360）。北区の埋め戻しにかかる。
4.11　北区東壁でSB340東北隅柱穴を含めた土層剥ぎ取りをおこなうため、調査区を一部再拡張する。あわせて東壁際を掘り下げ。
4.13　北区SB340東北隅柱穴の平面検出と実測後、断ち割り。かなり深い。
4.16　北区東壁の土層線引きと実測、写真。
4.17　北区東壁の土層剥ぎ取り。平面の補測と図面チェック。
4.18～23　北区の埋め戻し。
4.24　北区埋め戻し終了。機材を撤収し、本年度を含めて5年間にわたる共同調査を完了する。

F　桜井市第9次調査（僧房）　1998年10月9日～12月11日

10.9　調査機材を現地へ搬入し、調査区の設定をおこなう。
10.12　重機で表土を掘削し、遺構面を出す。調査区の東半では遺構が確認されるが、西半は削平のため確認できない。
10.13　遺構面の精査と遺構検出作業。藤原宮期の土器片少量と、吉備池廃寺創建軒丸瓦が1点出土した。並行して素掘小溝や小柱穴の掘削にとりかかる。これらには13世紀以降の瓦器椀の細片が含まれている。
10.14　素掘小溝と中世の小柱穴の掘り下げを続行し、素掘小溝はすべて完掘する。藤原宮期のものとみられる柱穴も数基確認。また、2.3×1.6mと大型の掘立柱掘形を確認したが、あまりの大きさに最初は井戸と考える。
10.19　中世の小柱穴の断面図を作成し、写真を撮って完掘する。継続して藤原宮期の柱穴の掘削。調査区の東端は谷へと落ち込む地形のため、整地土を入れて造成した模様。
10.20　南北溝SD402の掘削を開始する。藤原宮期の遺物が集中して出土。藤原宮期の柱穴群の調査を継続。
10.22　ひきつづき、藤原宮期の柱穴群の調査をおこなう。
10.23　調査区東半を南へ一部拡張し、藤原宮期の柱穴と南北溝SD402の延長を確認する。また、測量用基準杭を打設して、平面実測を開始。あわせて個別遺構の写真撮影をおこなう。
10.26　藤原宮期の柱穴群の掘削を継続する。これらに切られるかたちで、先に井戸と考えたものを含む6基の大型の柱掘形が規則的に並ぶことが明らかとなる。
10.28～29　重機で調査区を北へ拡張するとともに、南側も人力で拡張。さらに5基の大型柱掘形を確認する。これらが東西棟建物SB400としてまとまることが判明。
10.30　拡張部分の中世遺構および藤原宮期の溝と柱穴群の調査をおこなう。測量用基準杭を追加して打設する。
11.2　SB400の柱穴の掘削を開始。柱掘形はいずれも南北方向に長い長方形を呈し、抜取穴の上部は地山に類した土で埋まっている。出土遺物は飛鳥時代に限られており、吉備池廃寺に関連する建物と判断した。寺域内における位置などから、僧

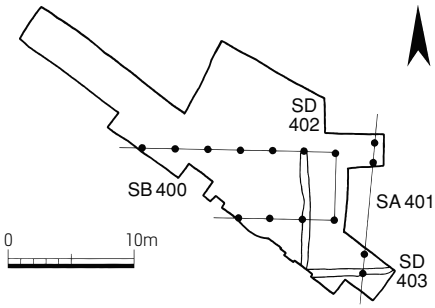


Fig. 26　桜井市第９次調査区　1:600



Fig. 27　発掘風景（桜井市第９次）

房の可能性が推定される。

11.4～10　SB400の柱穴の調査続行。柱はすべて抜き取られているが、遺物はさほど多くない。また、底に径30㎝程度の柱根や柱痕跡を残すものが多い。柱掘形の規模に比べるとやや貧弱か。

11.11　SB400柱穴群の調査を継続する。重機で北側の拡張区を東へ再拡張する。

11.12　大福地内における大藤原京関連遺跡第24次調査のため、作業を一時中断。

11.18～25　調査を再開する。ひきつづきSB400柱穴の掘削をおこない、ほぼ完掘する。

11.26　断ち割り作業ののち、写真撮影へむけて調査区全体の清掃をおこなう。

11.27　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影ならびに地上写真の撮影をおこなう。その後、実測作業。

11.30～12.3　実測作業。

12.4　調査区東側のベースと整地土の断ち割り。掘立柱南北塀SA401を確認する。

12.7　南北塀SA401の調査。実測と写真撮影をおこなう。記者発表にむけて調査区全体を清掃。

12.8　記者発表。

12.9～11　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

G　桜井市第11次調査（北外周部）　2000年12月4日～2001年3月20日

12.4　調査機材を搬入し、東北東～西南西方向に、平行する２本の調査区を設定。北側のトレンチから人力で掘削を開始する。

12.5～7　北側のトレンチの掘削続行。東半部は近世に大きく切り崩されている。

12.8　北側のトレンチの西半部には比較的厚い中世の整地土があり、この下で幅3.8ｍの溝状の遺構を確認した。南側のトレンチの掘削を開始する。東半部はやはり大きく切り崩されているが、西半部は覆土が浅く、中世の整地土は認められない。地山面で柱穴らしき遺構を確認。

12.11～13　南側のトレンチの掘削続行。

12.14　遺構が多数確認されたため、重機を投入して調査区を拡張することにする。

12.15　重機による調査区の拡張と遺構面の精査をおこなう。柱穴多数と溝・竪穴住居などを検出する。

12.18　柱穴と切り通しSX421、南北溝SD422の掘削を開始する。

12.19　測量用基準杭を打設する。柱穴と切り通しSX421、南北溝SD422の掘削続行。切り通しは完掘する。柱穴は、重複関係から大きく３時期に分けることができる。

12.20～22　ひきつづき柱穴の調査をおこなう。土器片などの出土遺物はすべて藤原宮期より古く、吉備池廃寺に関連する建物を含む。

12.25　柱穴の調査続行。竪穴住居SB426の調査を開始する。

12.26～27　柱穴と竪穴住居SB426の調査。

12.28　柱穴と竪穴住居SB426の調査続行。平面実測を開始する。

1.4　竪穴住居SB426の調査完了。

1.5　柱穴の調査を完了する。

1.9　調査区の清掃後、産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影をおこなう。その後、地上写真の撮影と実測作業。

1.10　実測作業。

1.11　発掘機材撤収。

1.12　実測作業。本日で現地調査は終了。遺構の保存協議のために記者発表や埋め戻しは先送りと

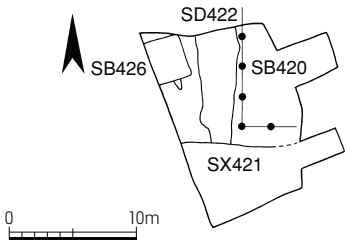


Fig. 28　桜井市第11次調査区　1:600



Fig. 29　現地説明会（桜井市第11次）

なり、調査区の養生をおこなう。
3.14　保存協議の完了により、現地の清掃後、桜井市立埋蔵文化財センターで記者発表。その後、報道機関は現地撮影。
3.20　奈良国立文化財研究所の飛鳥藤原第111次調査と現地説明会を共催する。参加者約1000名。
3.22〜24　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

H　桜井市第12次調査（南外周部）　2001年7月11日〜2001年7月24日

7.11　機材搬入。重機で盛土を除去し、調査区を設定する。現地表下約1.2mで、遺構面を覆う包含層に達する。
7.12　重機掘削続行。包含層以下は人力で掘り下げ、遺構面を出す。調査区の北寄りでは石組東西溝SD441の石列を検出したが、途中でとぎれている。この石組溝の南には、わずかなベースの高まり（SX443）があり、その部分は包含層が覆っていない。瓦片や土器片が少量出土。
7.13　石組溝SD441の延長を確認するため、調査区を東へ一部拡張する。
7.17　拡張部では溝自体は存在するものの、石は残っていない。調査区南半の包含層を掘り下げる。測量用基準杭を打設し、実測を開始する。
7.18　調査区南半の包含層の掘削完了。湧水が激しく、遺構検出に困難をともなう。
7.19　調査区南半を精査し、東西溝２条を検出する。それぞれ包含層上面とベース面から掘り込んでおり、ベース面より切り込む溝SD442は、溝内に多数の石が落ち込んだ状態で確認された。先に検出した石組溝SD441とともに、建物にともなう雨落溝か。その場合、両者の間のベースの高まり（SX443）は基壇の痕跡となる可能性がある。調査区全体の精査と写真撮影。
7.20　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を予定していたが、機器の不調により延期。実測作業を継続する。
7.21　産業用ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影。その後、実測作業に移り、完了。
7.23　機材の撤収と調査区の排水作業。
7.24　調査区の埋め戻しをおこない、すべての作業を完了する。

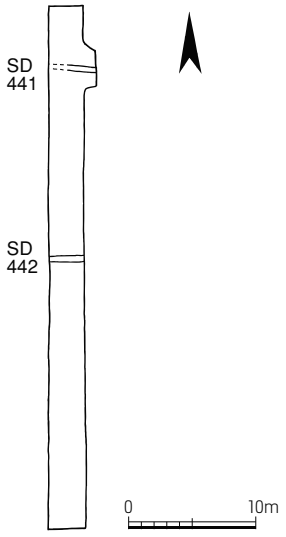


Fig. 30　桜井市第12次調査区　1:600

第Ⅲ章　遺　　構

1　遺跡の立地と地形

地形の概況　吉備池廃寺は、奈良盆地の南東に広がる竜門山地の北西の縁辺部に位置する。竜門山地は、中生代末期頃に形成された花崗閃緑岩および石英閃緑岩を基盤岩とし[1)]、大和川（初瀬川）の支流である寺川および米川の源となっている。竜門山地における両河川の沿岸には開析谷が発達しており、一方、それが盆地に流出する部分にあたる沖積地との境界付近は、これらの浸食を免れた低い丘陵が点在する。

吉備池廃寺の北側に残る高まり（字「高部」）もそのひとつである。吉備池廃寺は、北西～西北西へ流れる寺川と米川にはさまれた部分の米川寄りに位置するが、この小丘陵をとりこみ、その南側に広がる沖積地に伽藍が展開していた。なお、こうした小丘陵は、すでに失われたも

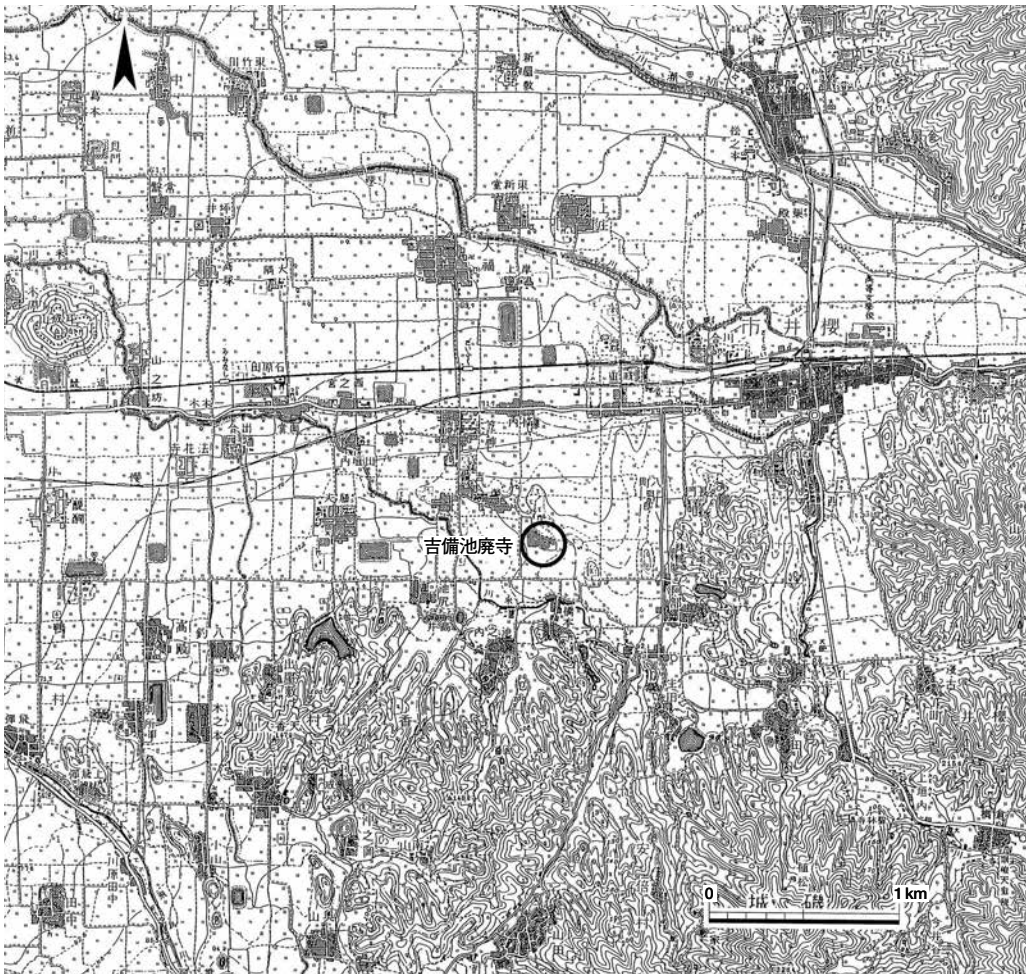


Fig. 31　吉備池廃寺周辺地形図　1:40000（1/25000 地形図「櫻井」(1957年)、「畝傍山」(1950年）に加筆）

のもあるけれども、ほぼ米川の流路の方向に沿って、そこから南東方向へとぎれとぎれに存在した。現在の地形図では確認できないものが多いが、古い地形図には、これらの地形がよく示されている（Fig. 31）。

河川の侵食

上記の小丘陵を浸食した営力は、米川および寺川の分流（桜井市上之宮の南端あたりで寺川の現流路から分岐して、メスリ山古墳の南側を北西方向に下る谷筋）であったと推定される。おそらく、丘陵の南西側は米川、北東側は主として寺川の分流の浸食を受けたのであろう。丘陵北東側の地形が、南西側にくらべて一段低くなっているのは、今と同様に、寺川の下刻作用が米川にくらべて活発であったことによるものとみられる。そうした丘陵北東側の浸食のようすは、丘陵の東側に位置する桜井市第９次調査区の水田や、その下段（北東）に位置する水田の形状と段差からもうかがうことができる。

もっとも、寺域の大部分が丘陵の南方におかれた吉備池廃寺の場合、地形の形成には、寺川よりも米川が大きく関わっていた。ちなみに、吉備池廃寺の寺域は、現在の米川から北へ200ｍほど隔たっているが、「第Ⅱ章１　調査地域」でも述べたように、この流路は、奈良盆地のほぼ全域に条里地割が施工されたのちに付け替えられたものである可能性が高い。近年の調査事

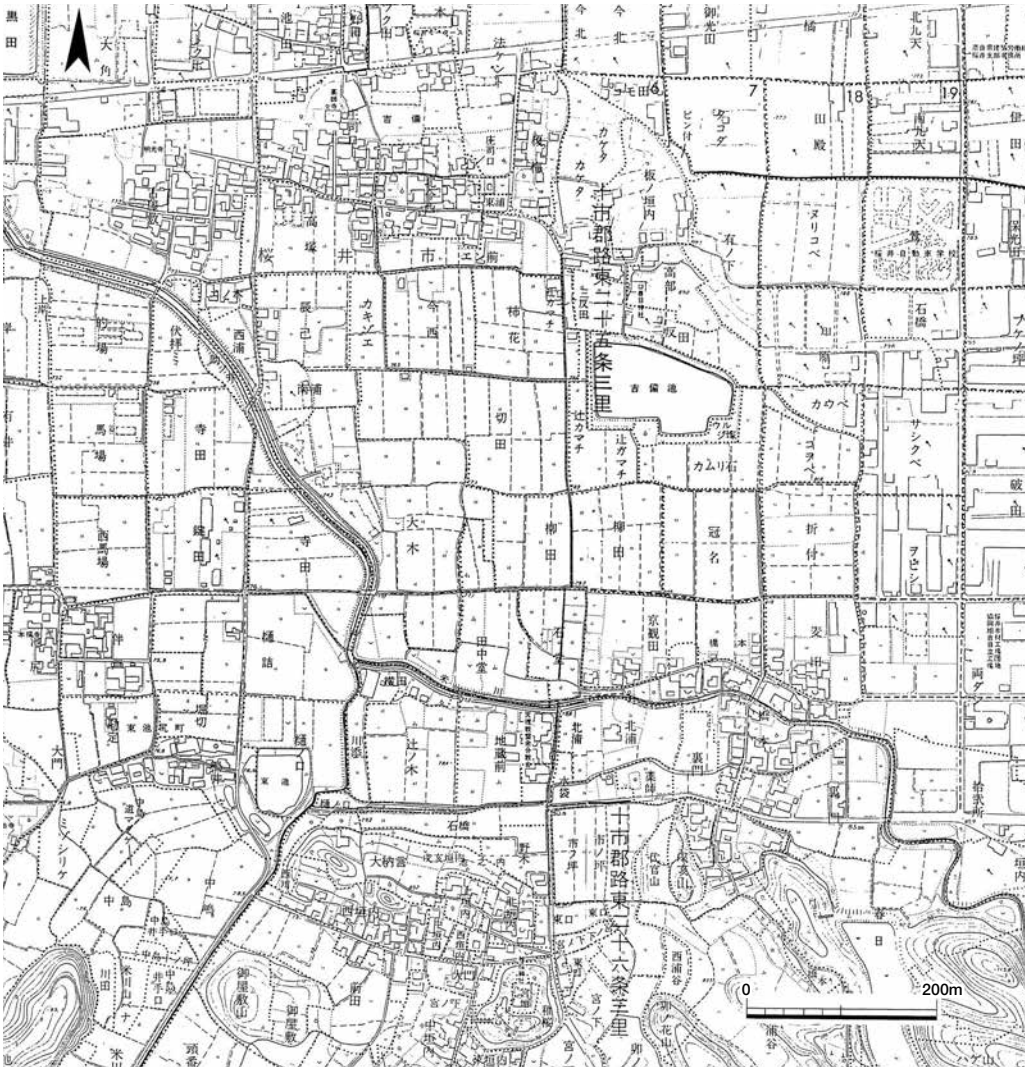


Fig. 32　吉備池廃寺周辺の地形と条里　1:8000（『大和国条里復原図』より）

例によると、そうした条里にあわせるかたちで河道の付け替えがおこなわれたのは、10世紀頃と推定されており[2)]、おそらく、それ以前の米川は、もう少し吉備池廃寺に近い位置を北西方向へと流れていたのであろう。米川の現流路の北岸には、字「石堂」ほかに屈曲した斜行畦畔や水田の段差が残るが、これらは、その痕跡とみることができる（Fig.32）。また、こうした条里の施工によって、本来、緩傾斜面をなしていた吉備池廃寺の一帯は、水田の連続する現在に近い景観へと変化することとなった。

旧河道痕跡

吉備池廃寺の立地　ここで、発掘調査の成果とあわせて、伽藍周辺のもう少し詳細な立地を検討しておくことにしよう（Fig.33）。

まず、上述のように、伽藍の北方には、浸食がおよばなかった基盤岩の残丘があるが、これに近接して設けた第105次調査中央区・西区と東区北トレンチ、第111次調査北区、桜井市第９次調査区では、いずれも花崗岩風化土の地山を確認している。基盤岩を構成する岩石が明瞭なモザイク状をなす部分もあり、基盤岩が原位置で風化したものであることがわかる。本来、この部分は、東南東に残る別の高まりへとつづく一連の丘陵であったことになる。

風化基盤岩

一方、そうした丘陵の南西の縁辺部にあたる第81−14次調査土壇東辺トレンチ、第105次調査の池内調査区と東区南トレンチでは、灰黒色～灰色粘土の堆積を確認している。また、そこから南西にかけての広い範囲では、青灰色ないし暗褐色～黄褐色を呈する微砂～粗砂・砂礫の堆積が認められる。これらは、現在、南方を流れる米川に由来するものであり、金堂や塔をはじめとする主要伽藍の大半は、そうした河川堆積物の上に立地している。

また、発掘調査で確認した自然堆積層上面（地山面）の標高を仔細に検討すると、第81−14次調査の対象とした金堂土壇の南から、第89次調査の対象となった塔土壇および第95次調査西区にかけて、東南東から西北西へ向かう等高線の張り出しがあり、舌状にのびる微高地の存在を知ることができる。これは、先述したように、微砂～粗砂・砂礫の堆積からなるが、これと北方の丘陵との間は、浅い谷状となって上記の灰黒色～灰色粘土が堆積し、反対の南側は、現在の米川の流路に向かってなだらかに傾斜する地形を示している。したがって、この微高地は、米川の旧流路の右岸（北岸）に沿って形成された自然堤防とみてよく、そこから北方の丘陵にかけての間が、狭い後背湿地となっていたものと推定される。一方、微高地の南側は、米川の旧流路に相当することになる。ただし、発掘調査の成果が示すように、この旧流路は、吉備池廃寺創建時には完全に埋没していた。

自然堤防と後背湿地

伽藍造営に伴う地形改変　さて、以上のような地形は、吉備池廃寺の伽藍造営にともなって改変を受ける。それらがもっともよく窺えるのは、第89次調査の塔基壇周辺と第105次調査の池内調査区で確認した整地である。

まず、塔基壇周辺では、旧表土の上に厚さ20～40㎝の明黄褐色の山土による整地がおこなわれ、その上から基壇の版築が開始されている。こうした整地は、金堂基壇では認められないが、これは金堂基壇が丁寧な掘込地業をおこなっていることと無関係ではないだろう。金堂の位置は後背湿地にかかることから、より堅固な掘込地業が必要とされ、塔は、地形的により安定した自然堤防上に位置するため、掘込地業を伴わない整地で充分と考えられたのではないか。

山土の整地

一方、第105次調査の池内調査区では、古墳時代の終わりから飛鳥時代にかけての流路ないし低湿地を灰色～灰黒色粘質土で埋め、さらに赤褐色砂質土と暗灰色～黄灰色砂質土の互層か

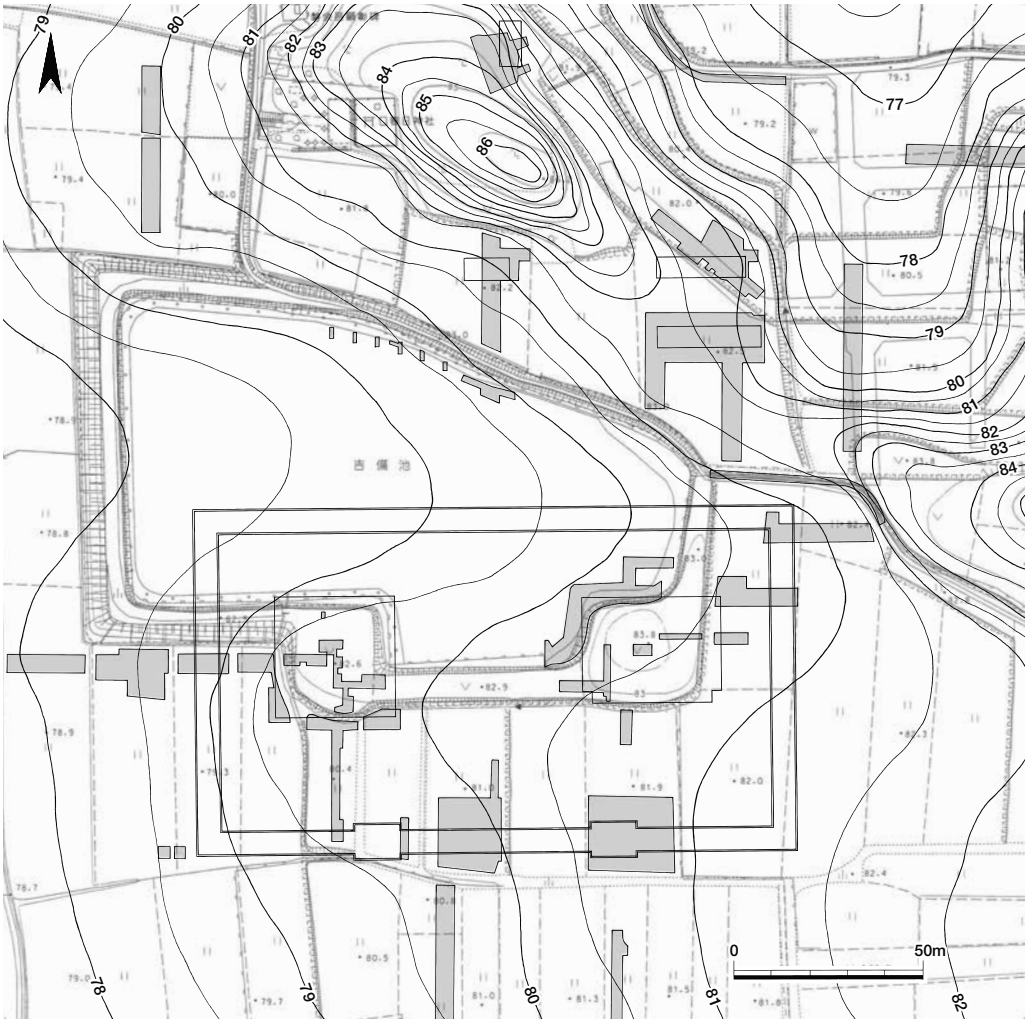


Fig. 33　吉備池廃寺周辺の旧地形復元　1:2000

らなる整地を重ねた状況を確認した。ともに吉備池廃寺の創建にかかわるものと判断してよく、前者の整地土に含まれる飛鳥Ⅰの土器は、その年代の上限を示すものといえる。また、後者の整地土の広がりは東西50m以上に及び、さらに西方へと続いている。小丘陵南辺の後背湿地が、広い範囲にわたって整地された状況がうかがえよう。

以上のほか、切土もおこなわれた。たとえば、伽藍北方に残る小丘陵の南辺は、東西方向に近い直線的な形状を呈しており、人為的に切り崩されたことが明らかである。これ以外にも、同様の残丘が南東方向へ連続していたと考えられるが、その多くも削平を受けたものと推定される。伽藍の造営にさいしては、こうした丘陵を削って平坦面を確保するとともに、その土を用いて谷地形や低湿地を整地する、といった作業がおこなわれたのであろう。吉備池廃寺の整地土や金堂・塔の版築土の主体をなす黄褐色～橙褐色系統の山土は、こうした伽藍近辺の丘陵の切り崩しによって調達されたものとみて誤りないと思う。

丘陵の切土

1）西宮克彦「地質」『桜井市史』下巻、桜井市役所、1979年。堀井甚一郎「地形」『同上』。

2）山川 均「奈良盆地における条里制の展開とその特質」『条里制研究』第9号、条里制研究会、1993年。山川 均「中世集落と耕地開発」『中世集落と灌漑』大和古中近研究会、1999年。

2　遺構各説

A　金堂SB100とその周辺（PLAN 3，PL.4～7）

遺存状況と基本層序　吉備池東南部の池側に張り出した土壇とその周囲で、金堂基壇の掘込地業SX101と版築土を確認した。基壇の縁辺部は削平されているが、掘込地業は、基壇西北部にあたる池底でも明瞭に遺存している。また、土壇の中央部は耕作土が堆積し、その大半は基壇土をすき込むことによって形成された土とみられる。このため、土壇上の礎石やその据え付けおよび抜き取り痕跡、根石などに関しては、調査区が限られたこともあって、明確にしえなかった。一方、土壇東側の水田では、基壇東縁の掘込地業ラインを明瞭に検出しただけでなく、基壇外に広がる砂利敷SX103を検出し、遺存状況は比較的良好である。ただし、基壇外装に関する遺構はどの調査区でも確認できず、またそれにかかわる遺物も出土しなかった。なお、土壇上および土壇の周囲には後代の素掘小溝が掘られており、吉備池の堤坊はこの素掘小溝を埋めた上に築かれている。したがって、吉備池築造以前の段階で、少なくとも基壇西辺は、ほぼ現状のように削られていたらしい。

土壇の周囲は、池内堆積土や耕作土をとり除くと基壇基底部の土層が現れる。基底部の土層は場所によって一定しないが、地山（自然堆積土）である暗青灰色微砂（西辺・南辺）、暗灰褐色～青灰色砂礫（北辺）または灰黒色粘土（東辺）の上に、少量の土器片や有機物を含む暗褐色砂質土がのるのを基本とする。この暗褐色砂質土は人工的な整地によるものではなく、自然に堆積した状態を示し、金堂の基壇土はこれをベースとしている。

なお、西辺では、このベース上に薄く青灰色微砂をおき、北辺では地山を掘り上げた暗灰褐色砂質土ほかの整地土を積んでいる。さらに東辺では、造営時の整地と考えられる灰褐色～黄褐色～暗橙褐色粘質土（厚さ３～20㎝）、砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土（厚さ３～10㎝）がのり、金堂廃絶後の整地層である灰色粘土（厚さ３～15㎝）がその上を覆う。ただし、第105次調査東区における砂利敷SX103の遺存状況は、第81-14次調査にくらべて劣悪であった。砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土上面の標高は、80.8～80.9mである。

基壇上は、耕作土（厚さ50～70㎝）下に基壇土の再堆積である黄橙褐色粘質土（厚さ２～10㎝）が部分的に存在し、その下が基壇版築土である橙褐色砂質土となる。基壇土上面の標高は、確認できる最も高い部分で、82.6mほどである。なお、金堂周辺の調査では、火災の痕跡はいっさい認められない。

火災痕なし

金堂基壇とその掘込地業（PL.6，Fig.34･35･37･38）　金堂基壇の掘込地業SX101は、西北隅を含む北辺西半と西辺北半、西南隅、東辺中央部、東北隅で確認した。いずれも先述したベースとなる暗褐色砂質土もしくは整地土の上面から、若干の法面をもって約0.9～1.1mほど掘り込み、版築による基壇土を積み上げている。これには地山に由来する青灰色微砂も含まれるが、大半は黄灰色～橙褐色の山土である。掘込地業と基壇版築土との間に整地層は介在しないので、掘込地業から基壇版築までは一連の作業工程によるものとみられる。版築の各層の厚さは２～15㎝で５㎝前後のものが多く、掘込地業部分の版築層は、西辺で16層程度を数える。掘込地業

掘込地業と一連の版築

の底から現存基壇上面までの版築層は、北辺で46層ある。また、基壇西辺部の掘込地業では、最下部に径10～20㎝ほどの礫を多数まじえていた。こうした礫は東辺や北辺では確認できなかったが、掘込地業の底における基礎地業とみられる。なお、掘込地業の底面は、確認できる範囲ではほぼ平坦だが、その標高は、東辺が79.9m、西南隅は79.6m、西北隅では79.3mであり、周囲の旧地形と同様、西北部がもっとも低くなる。

掘込地業外の版築

基壇版築土は、基壇の西辺と北辺では掘込地業の範囲を越えて広がっている。これらに関しては、旧地形が低い西辺と北辺にのみ整地土を積み、掘込地業の外側をさらに浅く掘り込んだ可能性も想定されるが、実際には、版築土の下に整地土はほとんど存在しない。整地土を完全に除去したとすれば、整地自体が無意味となるので、上記の版築土は周辺部の掘込地業ではなく、一定の高さをもつ基壇土の一部と理解しておく。なお、掘込地業とそれより上の版築層との境界は、掘込地業の壁面が垂直に近い西辺では明瞭だが（Fig.34）、北辺では掘込地業の上端付近がゆるい法面となるため（Fig.35）、厳密な掘込地業の開始位置は判然としない。

基壇が南に張り出す

一方、土壇西南の東西トレンチでは、掘込地業の西辺がいったん東へ屈折して約2.6mのび、さらになだらかに南に折れている。このトレンチに接続する土壇上南北トレンチの南端部では、掘込地業は確認していないものの、基壇版築土が明らかに土壇外の旧地表面より高く残っており、たんに掘込地業が張り出すのではなく、ある程度の高さをもった基壇が南に張り出していることは確実である。土壇南側のトレンチでは掘込地業を検出していないことから、この張り出しの南北長は最小2.5m、最大5.6mとなる。また、東西幅は、張り出しの西端から最低でも4.3mを確認できる。なお、この基壇の張り出し部分については、遺構保存を第一としたため、断面観察をおこなっていない。反対側の東南隅および南辺全体がどのような形状となるかも不明である。

このように、掘込地業および基壇の一部が張り出すという例はほとんどなく、その解釈が問題となる。階段などによる複雑な出入りをもつ形状や、長方形基壇の隅を欠いた形など、いくつかの案を想定することができるが、まず階段案について検討しよう。

発掘調査によると、階段は地山から削り出すか、基壇本体の版築を終えたのちに継ぎ足す例がほとんどである。したがって、この案では、階段部分を含めた掘込地業をおこなう理由をさ

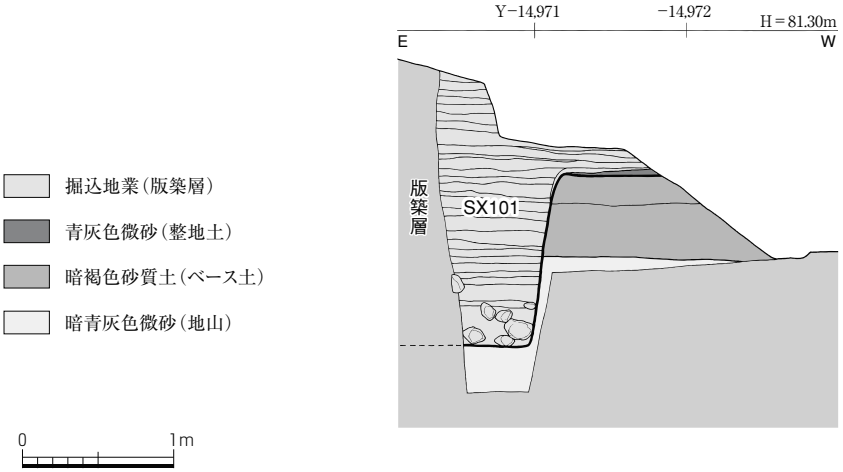


Fig. 34　金堂基壇掘込地業の断面図（基壇西辺）1:50

らに求めなければならないが、そうした必要性は稀薄である[1)]。また階段とすれば、南面だけでなく、北面や西面にも同様の施工が必要となろうが、それは認められない。加えて、階段は建物の柱筋とそろえ、対応する建物部分の柱間を扉とするのが一般的である。そして、現存建築および文献史料から柱間装置の知られる古代建築では、中心堂宇の正面端間を扉とする例はごく少ない[2)]。ところが、後述するように、吉備池廃寺金堂の場合、基壇端をどこに求めるのか、また建物規模をどの程度に想定するかという問題はあるけれども、この張り出し位置に対応する柱間は、建物の東西両端間以外に見出せないのである。以上の点から、この張り出しは階段にともなうものとは考えにくい。

張り出しは階段でない

一方、隅欠きの基壇と考えた場合、通常の長方形平面とは違った不整形な基壇となるが、これが建物の上部構造によるものとすると、正面に孫廂もしくは向拝をもつか、屋根の隅のみを欠く形態を想定せざるをえない。孫廂をもち、同様に基壇が張り出す例としては、平安後期の毛越寺講堂（岩手県平泉町）があり[3)]、また現存する当麻寺本堂（北葛城郡当麻町）は、平安時代初期に、当初の四面廂つき主屋の正面に孫廂を付加している[4)]。しかし、後述する出土遺物からも７世紀中葉に創建されたことが確実な吉備池廃寺金堂に孫庇をつけ、そのための掘込地業を施したとは、建築史の観点からも想定しがたい。向拝案についても同様である。さらに、『年中行事絵巻』に見えるような土廂の場合は、基壇下に柱を立てており、そこまで基壇を張り出させてはいない。

孫廂や向拝でもない

ちなみに、たとえ孫廂や向拝案を認めたとしても、建物本体の棟の位置は張り出しを除いた部分で考えて差しつかえなく、張り出しは金堂心の位置とは無関係である。このほか、隅だけを欠くやや複雑な屋根を想定した場合は、正面にあたる南面のみ隅を欠いた理由が不明であり、やはり７世紀の金堂建築には想定しにくい。

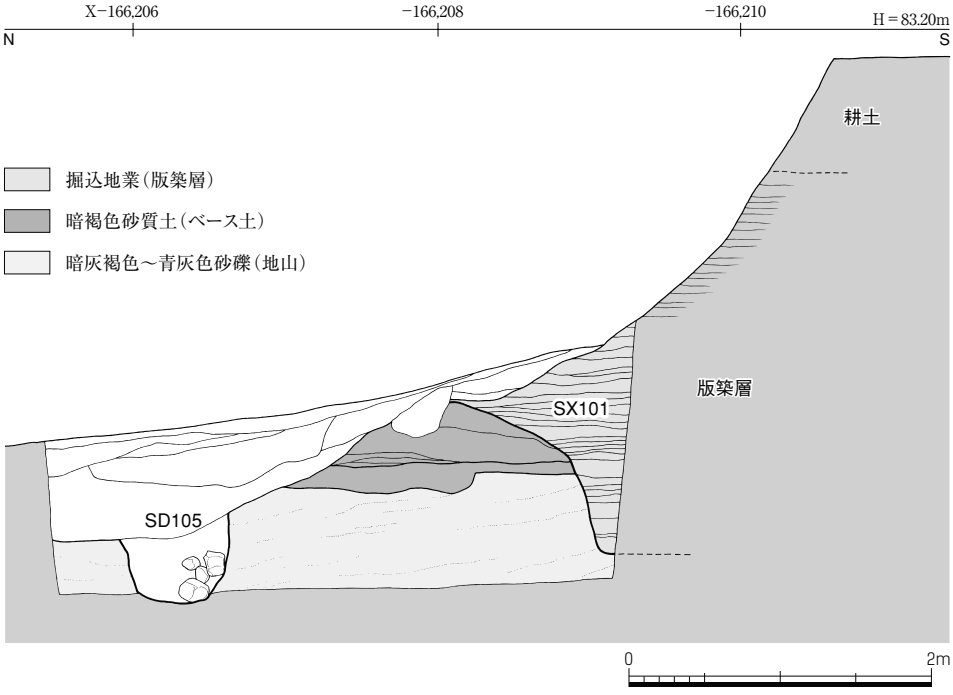


Fig. 35　金堂基壇と外周の溝の断面図（基壇北辺）1:50

以上のように、金堂基壇の張り出しについては、全容は明らかでないものの、階段もしくは基壇の隅欠きとみるには無理がある。そこで、現時点では、長方形基壇の前面に張り出しをもつ形状とみて、この張り出し部分には屋根がかからない、すなわち雨が当たる基壇を想定しておきたい。そして、こうした張り出しを設けた理由は、金堂正面における基壇上面の面積の確保にあったと考える。傍証として、現代の事例ではあるが、平城京薬師寺の再建金堂で、仮設ながらも正面基壇前面に壇を設けている事実を挙げておこう。これは、壁面をもつ裳階柱筋からの基壇の出が小さいためで、裳階の扉を外開きとすることにも関係しているらしい。今のところ、上記以外に、この張り出しを合理的に解釈できる案は見出せていない。

基壇の規模　以上、基壇の掘込地業の範囲は、東西が36.0～36.3m[5)]と確定し、南北は、南辺に問題があるものの、建物の上部構造に関係する掘込地業は24.0～24.4mと考えられる[6)]。現存する土壇の立ち上がりからみて、基壇の規模が掘込地業の範囲を下回ることはない。

なお、西辺および北辺部で掘込地業の範囲を越えて広がる基壇土（Fig.34・35）は、後に述べる塔SB150の周囲に広がる整地とは違い、明らかに版築を施している。先述のように、これは掘込地業ではなく、地上に立ちあがる基壇の一部と判断してよい。ただし、東辺はほぼ掘込地業と基壇端の位置を合わせており（Fig.37）、後述する基壇外周の溝SD104・105・250との間隔からみても、基壇規模が掘込地業の範囲を大きく上回るとは考えられない。現状で確認できる掘込地業外の版築土の広がりは0.6m程度であり、建物の上部構造に関係する基壇の規模は東西37m×南北25mほど、張り出し部を含めた基壇南北長は28mほどとみるのが妥当だろう。この場合、基壇心は、掘込地業心より若干北西方向に寄ることになる[7)]。

基壇規模は37×25m

基壇上面は削平されているため、本来の基壇高については知ることができない。基壇上面には礎石の据え付けおよび抜き取りに関する痕跡がほとんどなく[8)]、削平されたとみられるが、掘込地業底面から版築土上面までの高さは、現状で2.5～2.7mに達する。礎石の大きさを勘案すれば、本来の基壇は、掘込地業底面から３m以上、地表面からも２m以上の[9)]、ひじょうに高いものであったと想像される。

基壇高は2m以上

基壇外装　基壇外装に関しては、加工痕をもつ石材のみならず、凝灰岩片やその粉末さえまったく出土していない[10)]。したがって、凝灰岩を用いた通常の壇正積基壇を想定することは困難である[11)]。また、掘込地業SX101の底や後述する基壇外周の溝SD104・105・250に詰め込まれたような河原石を用いた乱石積基壇も、基壇の高さと石の大きさを勘案すれば、考えがたいだろう。石積みの基底部がまったく残らない点も不審である。

とすれば、候補となりうるのは、木製の基壇外装である。吉備池廃寺と造営時期が近接する山田寺金堂が切石の壇正積基壇をもつ点と比較して、やや特異な感は否めないが、これ以外に、上記のような痕跡をとどめない基壇外装のありかたは想定しがたいと思う。

木製基壇か

木製の基壇外装とした場合、切石の壇正積基壇の石材を木におきかえたような構造、すなわち地覆材（土台）に束（柱）を立てて、比較的厚い横板材を束のあいだに落とし込む構造を想定することができる[12)]。実際、木製の基壇外装をもつ建物は、各地で検出例がある。それらは、今のところ、板材や角材もしくはその痕跡を確認したもの、あるいは基壇の束柱やその掘形を検出したものに限られており[13)]、壇正積の木製基壇を検出した例はないけれども、そうした構造は痕跡を残しにくいため、不明なケースも多いと想像される。なお、木製の基壇外装の場合も、

７世紀代の寺院中枢部の建築として、二重基壇を想定することが可能だろう。

ちなみに、縦挽きの鋸がない古代にあっては、素性のよい巨木をくさびで割ることにより得られる厚板は、地覆材や葛材に想定される大型の角材とともに、かなりの貴重品であったはずである。事実、吉備池廃寺とほぼ同時期に造営された皇極朝の飛鳥板蓋宮（643~655）は、高価な厚板で屋根を葺いたことを宮殿の美称としており、天皇（大王）の宮殿にふさわしい材料として尊ばれたことがうかがえる。したがって、当時、石材以上に高貴な仕様として、木材を用いた基壇外装が採用された可能性は充分に想定できよう。[14)]

掘込地業の排水溝 SD102（PL.6，Fig.36）　掘込地業の西北隅に掘られた素掘りの溝。西北隅か北西へ2.3mのび、後述する基壇外周の溝（SD104・105）に接続する。幅50～60㎝、検出面からの深さは、掘込地業の肩で約70㎝ある。底面はほぼ水平をなし、掘込地業の底より10～15㎝ほど低い。溝底の標高は79.2mである。掘込地業と同時に施工されたらしく、溝の下部には掘込地業から連続する拳大～人頭大の礫を多く含み、また上部は、掘込地業部分の版築施工後に一時に埋めたてた様相を呈する。掘込地業の内部にたまる水を抜くため、地形的に最も低い場所に設けた排水溝と推定される。

最も低い場所に設置

基壇外周の溝SD104・105・250（PL.5・7，Fig.35・37）　掘込地業の外側に平行してめぐる素掘りの溝。基壇西辺の溝をSD104、北辺をSD105、東辺をSD250とする。掘込地業の肩から溝肩の距離は、SD104(西)で2.8m、SD105(北)では1.5～2.2m、SD250(東)は3.4mと異なる。

溝の幅は0.7～1.4mを測り、検出面からの深さは0.5～1.1mで東方が深い。底部には人頭大ほどの自然礫を雑然と積み、黄灰色の粘土を含む灰色～暗灰色の粘質土ないし砂質土で一時に埋め立てている。第81-14次調査では、近世の攪乱により時期を明確にできず、また土壇東側の調査区では砂利敷SX103を保護したため、SD250の延長部を検出できなかった。しかし、第105次調査で、これらが砂利敷SX103を含む淡黄灰色砂質土の下に位置すること、埋土中に７世紀前半の土師器杯Ｃなどを含むものの、それより新しい遺物がみられないこと、造営時の整

人為的に埋め立て

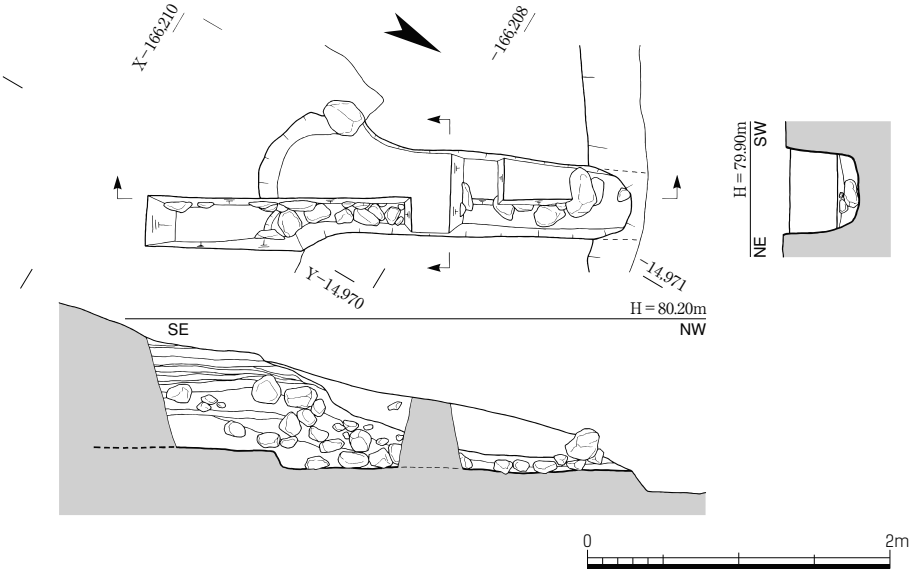


Fig. 36　掘込地業の排水溝SD102　1:50

地に顕著な山土を含む埋土であることが確認され、寺院造営にともなう溝であることが明らか になっている。溝底の標高は、東北隅（SD105とSD250の交点）で79.5m、西北隅（SD104とSD105の交点）で79.0m、西辺南方で80.0mを測り、掘込地業と同様、北西へ向かって低く傾斜する。この西北隅における溝底は、掘込地業の排水溝SD102の底よりも低く、掘込地業内および基壇周囲における水を集め、排水する機能を果たしていたとみてよい[15]。

造営時の溝

なお、こうした溝は基壇の南辺にもめぐっていたと考えられるが、第81−14次調査の土壇南側トレンチでは検出していない。この段階では近世に掘られた礫の廃棄溝と解釈していた[16]こともあり、掘り下げが不充分だった可能性が高い。また、西北隅（SD104とSD105の交点）からさらに西方へ排水する溝の存在が想定されるが、第81−14次調査区外にあたり、詳細は不明である。おそらく、塔基壇の北辺を西流し、後述する第95次調査西区のSD215に接続して、南西方向へ排水したのであろう。

西方へ排水

砂利敷SX103（PL.7，Fig.37）　第81−14次調査の土壇東側のトレンチで検出した径３～５㎝の砂利敷。第105次調査東区では、攪乱のため、礫の疎らな散布を確認したにとどまり、第81−14次でもそのほかのトレンチでは削平されていた。造営時の整地土の上に敷かれ、廃絶後に灰色粘土で覆われている。回廊内の舗装と考えられる。

回廊内舗装

掘立柱列SA251・252（PL.7）　第105次調査東区南トレンチの金堂SB100東北隅で検出した。基壇外周の溝SD105・250の外側に、平行して逆Ｌ字形にめぐる柱穴５基からなる。南北柱列をSA251、東西柱列をSA252とする。

外周の溝肩からの距離は、SA251が0.9～1.2m、SA252が約1.4mを測り、柱間寸法は1.8～3.1mと不揃いである。掘形は一辺が0.6～1.0mの隅丸方形で、ほとんどが金堂SB100の基壇側にのびる抜取穴をもつ。検出面からの深さは45㎝前後、掘形の埋土は黄色の山土を多量に含む粘質土である。SA251南端の柱掘形から拳大の礫や創建瓦を含む瓦の小片、SA251とSA252の交点にあたる隅の柱穴からは、７世紀の土師器杯Ｃが出土した。性格については不明だが、

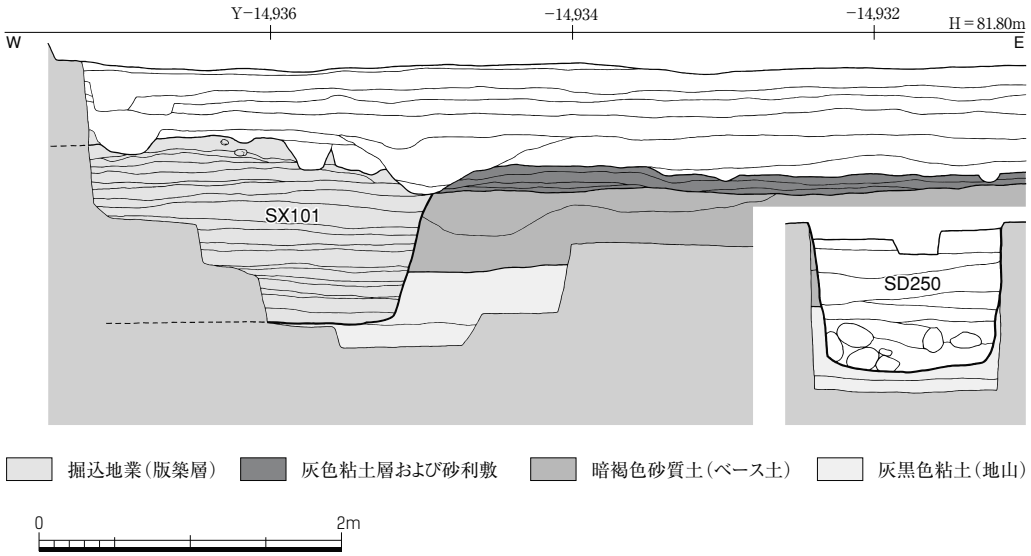


Fig. 37　金堂基壇東辺の土層図　1:50
（第81−14次と第105次の成果を合成）

SD105・250または金堂の基壇や、建物の造営・解体などに関連する遺構と推定される。なお、第81−14次調査では、外周の溝SD104・105の外側は調査区外となる部分が多く、同様の柱列は明瞭なかたちでは検出されていないが、次に述べる金堂土壇西側の柱穴のいくつかも、同じ性格の遺構となるかもしれない。

金堂基壇周囲の掘立柱穴　第81−14次調査の金堂土壇西側の調査区南端部と土壇北側の調査区で検出した掘立柱穴。基壇外周の溝SD104・105よりも外側に位置する。これらは、単体もしくは部分的に重複して検出されており、いずれも詳細は不明だが、建物もしくは塀の一部と想定した。藤原京期の遺構のほか、上記のように、金堂基壇東北隅で検出した掘立柱穴列SA251・252と同様の性格をもつ掘立柱穴もあると考えられるが、特定できない。また先述のごとく、金堂の基壇外装を木製と想定すれば、その階段に関連する遺構を含む可能性もある。

土壇西側の調査区南端部にあるSB106は、東西に約1.8m離れて並ぶ柱穴２基。西と南に続く建物の東北隅と推定した。掘形は一辺が80㎝前後の不整方形で、検出面からの深さ60〜70㎝を測る。抜取穴から推定される柱径は20㎝程度である。柱掘形には、基壇土もしくは整地土に由来すると考えられる橙褐色の山土が混じる。柱穴からは７世紀前半の土師器甕、須恵器杯Ｇ蓋などが出土した。

埋土に山土

SB107も東西に並ぶ柱穴２基。SB106に重複し、それより新しい。柱穴の間隔は約1.6mで、東と南に続く建物の西北隅と推定した。掘形は一辺が65〜85㎝の不整方形で、検出面からの深さは、西の柱穴が70㎝、東の柱穴は45㎝程度である。抜取穴から推定される柱径は20㎝程度で、柱掘形と抜取穴のいずれにも、基壇土もしくは整地土に由来するとみられる橙褐色の山土が混じる。遺物は出土しなかった。

SB108は、SB106・107の北にあって、東西にならぶ柱穴２基。柱穴の間隔は2.3m程度で、西と南に続く建物の東北隅と推定した。ただ、東側の柱穴はごく浅く、柱穴でない可能性もある。西の柱掘形は一辺60〜70㎝の方形で、柱径は約15㎝。これらの柱掘形には橙褐色の山土は含まれず、柱抜取穴からは飛鳥Ⅰの土師器杯Ｃが出土した。

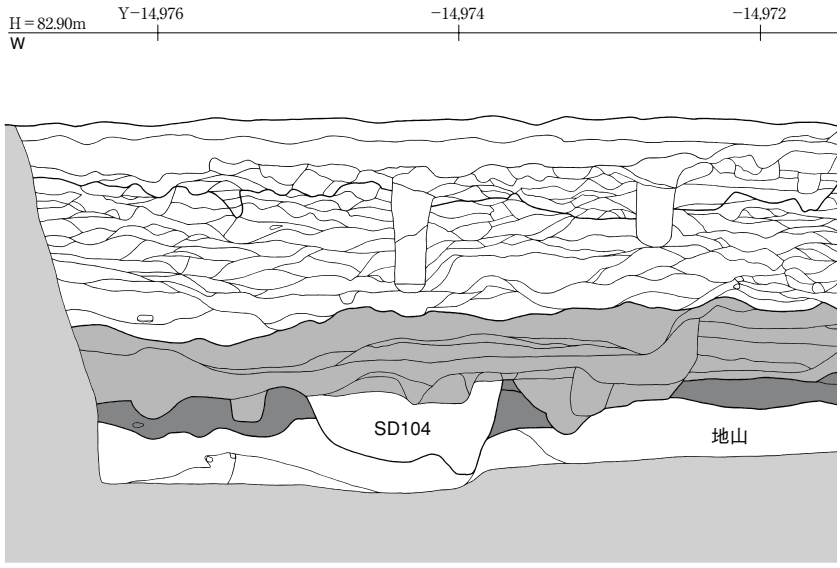


Fig. 38　金堂基壇掘込地業と吉備池堤防の断面　1:50

SB109は、金堂土壇の西南隅付近にある柱穴１基で、南と西にのびる建物の東北隅柱と推定した。柱掘形は一辺約70㎝の方形をなし、西側に抜取穴がのびる。柱掘形には基壇土もしくは整地土に由来するとみられる橙褐色の山土が混じる。遺物は出土しなかった。

以上のように、金堂西辺にあるSB106・107・109の柱穴掘形には、基壇土に似た橙褐色の山土を多量に含み、金堂造営開始後のものと推定される。この一帯は、寺の廃絶後はやがて藤原京域に含まれ、京の条坊が施工されているので、そうした建物の可能性があるだろう。一方、SB108柱穴には山土がまったく含まれず、出土遺物の年代観とあわせて、寺院造営に先行するものと想定される。柱穴の重複関係からみて、SB106よりSB107が新しく、SB108もこれらと重なる位置にあるため、都合３時期にわたる重複があったことになる。

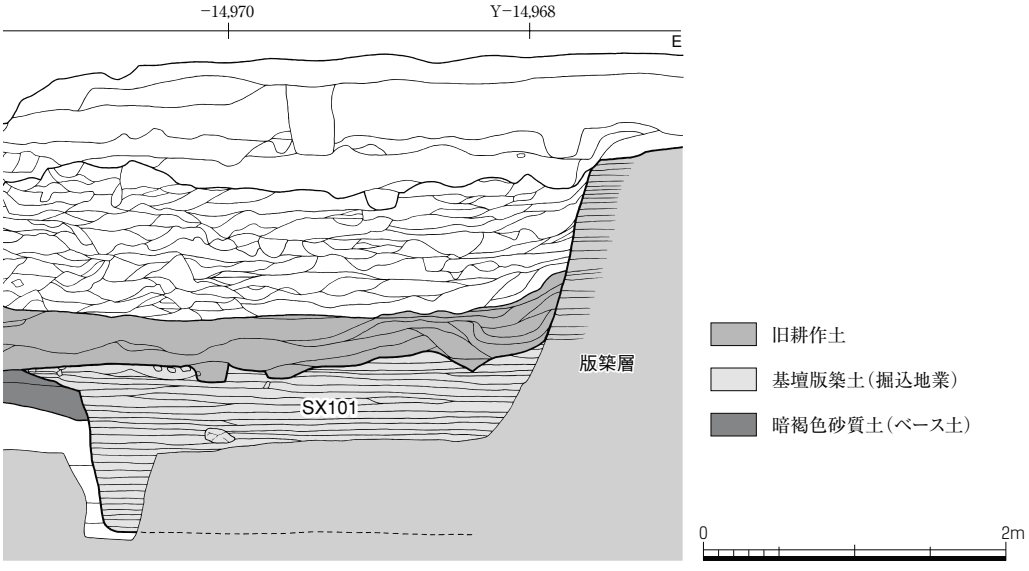
柱穴は３時期分

一方、金堂土壇北側の調査区には、外周の溝SD105と重なる位置にSA110が、さらにその北方のＬ字形をなす池内トレンチ東端付近にSB111がある。SD105と重複するSA110は、東西にならぶ柱穴２基で、柱穴の間隔は約4.6m、柱掘形の一辺50～90㎝を測る。

SB111は、北と東にのびる建物の西南隅柱と推定した柱穴１基。柱掘形は一辺0.7～1.0mで、検出面から10㎝程度しか残っていない。断面では、北端部の南北幅20㎝ほどが柱掘形底よりも30㎝ほど落ち込んでおり、柱痕跡になる可能性がある。柱掘形には黄褐色の山土が混じり、西方のSB106・107・109などと同様の性格が想定される。

吉備池堤防（Fig.38）　金堂SB100と塔SB150の土壇をつなぐ堤防。第81-14次調査土壇西南部の東西トレンチでの断面観察によれば、金堂基壇西南隅を削平した旧耕作土上に、厚さ0.6～1.0mにおよぶ築堤をおこなっており、その下から素掘小溝を検出している。築堤土の断面には、作業単位を示す土塊の痕跡が残る。現在確認できる金堂基壇とのあいだに大きな不連続面を認めることができないことから、築堤や池の開削にあたって、金堂基壇をあらたに破壊することはなかったらしい。ちなみに、塔の土壇上東トレンチの断面の状況からみると、塔基壇も築堤時に大きな削平を受けてはいないようである。なお、築堤土中には、古代～中世の土器とともに近世陶器が含まれるので、吉備池が近世の築造にかかることは確実である。

近世に築堤



B　塔SB150とその周辺（PLAN 4，PL. 8～11）

遺存状況と基本層序　吉備池の南辺やや西寄りにある池に張り出した土壇が、版築を施した塔基壇であることを確認した。ただ、基壇の北および東北部はすでに護岸工事が終了しており、また土壇上では果樹栽培がおこなわれていたため、調査区は非常に限られたものとなった。

土壇上の基本層序は、耕作土の下に赤橙色～暗赤橙色の基壇攪乱土（厚さ20～60㎝）があり、それを除去すると基壇版築土が現れる。版築土の遺存状況はおおむね良好である。ただし、礎石はまったく遺存せず、礎石の据付穴や抜取穴も検出できなかった。礎石下の根石も残っていないことから、基壇の上部はかなり削平を受けているとみられる。

土壇の中心から東方に設定した調査区（土壇上東トレンチ）では、一部を残して基壇が大きく削られ、素掘小溝の面を埋めて吉備池の堤防が築かれた状況を確認できる。さらに、その堤防を南北に横断する断面Ｖ字形の溝が掘られているが、この溝には掘り直しが認められるので、水路として、しばらくのあいだ存続したらしい（Fig. 39）。

土壇の南側～西側の水田面は、土壇上面から2.3～2.8m下にあり、土壇南側の調査区では、土壇に沿って弧状をなす素掘小溝を検出した。これらが、基壇の立ち上がりを避けた結果だとすると、その時点で、円弧の内側には基壇の立ち上がりが残っていたことになる。なお、塔基壇周辺においても、基壇造成後に火災があったことを示す痕跡はまったく認められない。

火災痕なし

塔基壇（PL. 10，Fig. 39～41）　塔の基壇土は、花崗岩の風化土に由来する赤橙色粘質土を基調とし、これに赤褐色～黄白色シルトや茶灰色粘土などがまじる土を、版築で突き固めている。版築層は厚さ３～15㎝程度で、確認できるだけで30層におよぶ。金堂と違って掘込地業はおこなわず、旧地表面とみられる暗青灰色粘質土上に、厚さ５～25㎝ほどの明黄褐色の山土による整地をしたのちに版築を重ねている。この山土による整地は基壇外にも広がるが、暗青灰色粘質土上面は北西に向かって下がっているものの、少なくとも基壇内では、整地土が西でとくに厚くなるようすは認められない。また、後述するように、土壇上東トレンチでは版築最下層に

整地後に版築

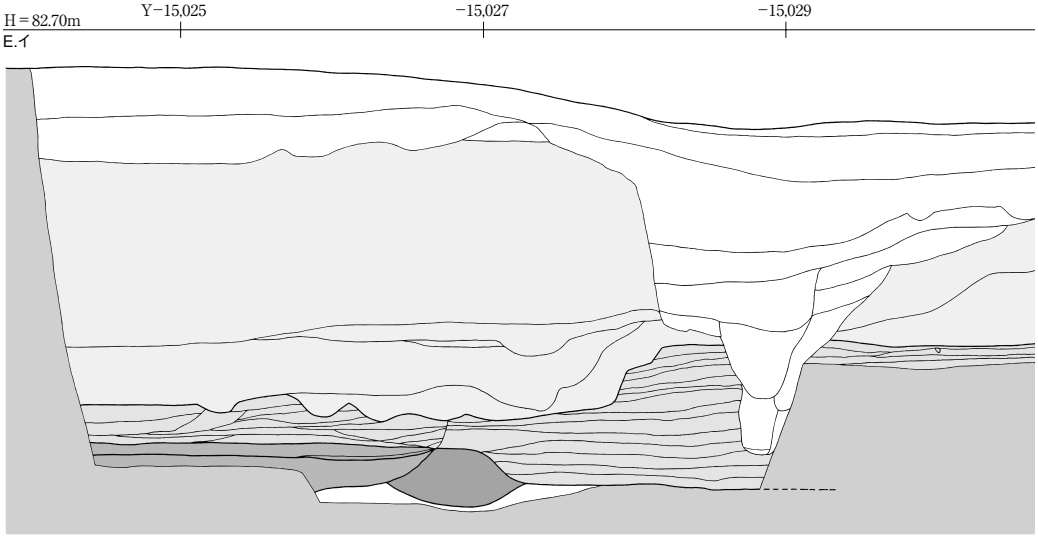


Fig. 39　塔基壇東辺の断面図（土壇上東トレンチ）1:50

整地土が存在しない部分もある。版築前の完全な不陸調整がこの整地によって達成されているとは言えないだろう。ただし、土壇南側の調査区の断面では、地形が西に低くなるにつれて整地も厚くなっている状況が観察できる。基壇築成に先立って整地をおこなったのち、一部整地土を掘り込んだものと考えておく。

版築の不連続

土壇上東トレンチは、先述したように、基壇が大きく破壊を受けているが、その底部で版築が不連続となる部分がある。基壇内方となる西側は、地山をやや掘り込んでおり、明黄褐色の山土による整地土が認められない。版築はほぼ水平に積まれ、版築土も赤橙色粘質土を基調とする他の部分とほぼ共通する。これに対し、基壇外方となる東側には、明黄褐色の山土による整地をおこなったうえで版築を施している。この部分の版築はやや粗く、版築土も黄灰色～黄褐色を基調とする粘質土で、基壇内方とは異なる。そして、両者の境界部分の底部には、灰茶色粘質土の塊が人為的におかれていた。以上のような版築の不連続面が生じた理由は不明だが、

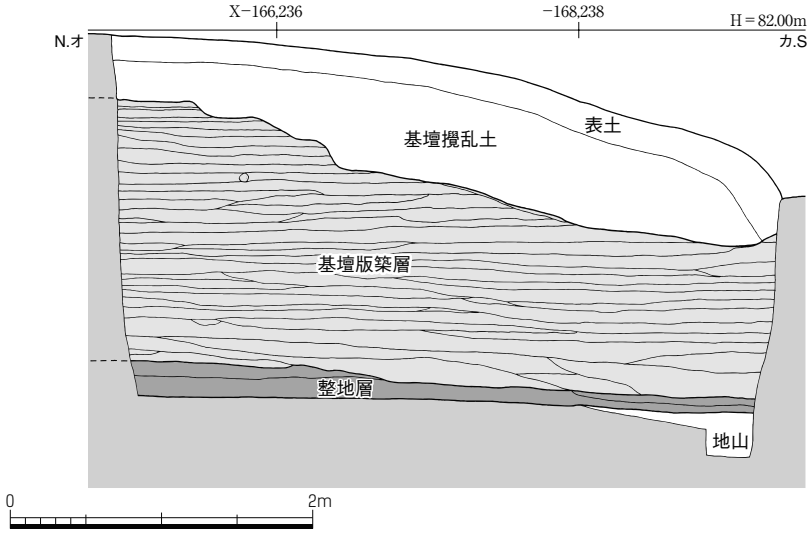
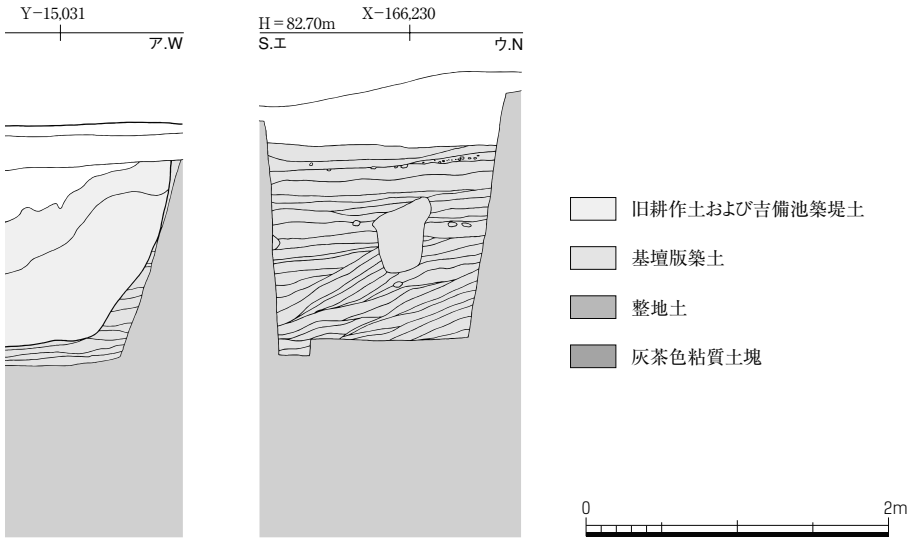


Fig. 40　塔基壇南辺の断面図（土壇上中央トレンチ）1:50（断面の位置はFig.42のオ―カ）



（断面の位置はFig.42のア―イ，ウ―エ）

あるいは版築の作業単位を隔てるものと解釈できるかもしれない。

基壇下の整地土上面の標高は79.5～80.0m、基壇土上面の標高は81.7～81.8mを測り、現存する基壇高は最大約2.3mある。版築土は、土壇の中心から南にのばした調査区（土壇上中央トレンチ）南端でも確認できるので、少なくとも基壇の南辺は現土壇の端までおよんでいたことが確実である。現状で確認できる基壇範囲は東西25.9m、南北26.7mであり[17]、東端および北端については、吉備池の護岸が施工されているため、不明とせざるをえない。

なお、基壇版築土からは７世紀前半頃とみられる土器の細片が出土している。

心礎抜取穴SX151（PL. 9，Fig. 41・42）　土壇上のほぼ中央部で、基壇を掘り込んだ巨大な穴を検出した。現存する版築土上面からの深さは40～50㎝を測り、底近くには拳大～人頭大の河原石を多量に残す。底面の標高は81.2～81.4mである。穴の平面規模は、北端および東端が調査区外となるため明確でないが、確認できる範囲で東西5.4m、南北6.7mに達する。こうした規模と土壇上の位置からみて、塔の心礎抜取穴であることは間違いなく、河原石は心礎下部の根石と判断される。埋土は赤橙色～赤褐色の粘質土で、攪乱土に覆われているが、埋土自体が比較的きれいなことから、抜き取られた年代はかなり遡る可能性が高い。この中から、７世紀後半の須恵器杯Ｂ蓋と甕などが出土した。

心礎抜取穴
6.7×5.4m

基壇の築成（PL. 10，Fig. 40・41）　土壇中心部から西側にのばした調査区（土壇上西トレンチ）の断面で観察できる基壇の版築層は、大きくＡ～Ｄの４ブロックにまとめられ、Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄの順に積み上げた工程を復元することができる。

基壇築成は４工程

Ａブロックの版築は、基壇内方ではほぼ水平に積むものの、西側の縁辺部では西へ向かって低く傾斜し、20°前後の勾配となる。この水平部分の上面（標高81.3～81.4m）には小礫を突き固めており、それは少なくとも心礎抜取穴まで続いている。

Ｂブロックは、Ａブロック西縁部の傾斜面上にのり、Ａブロックの水平部上面に天端をそろえ、版築層の上面をいったんほぼ水平にする。この上面には、小礫は認められない。

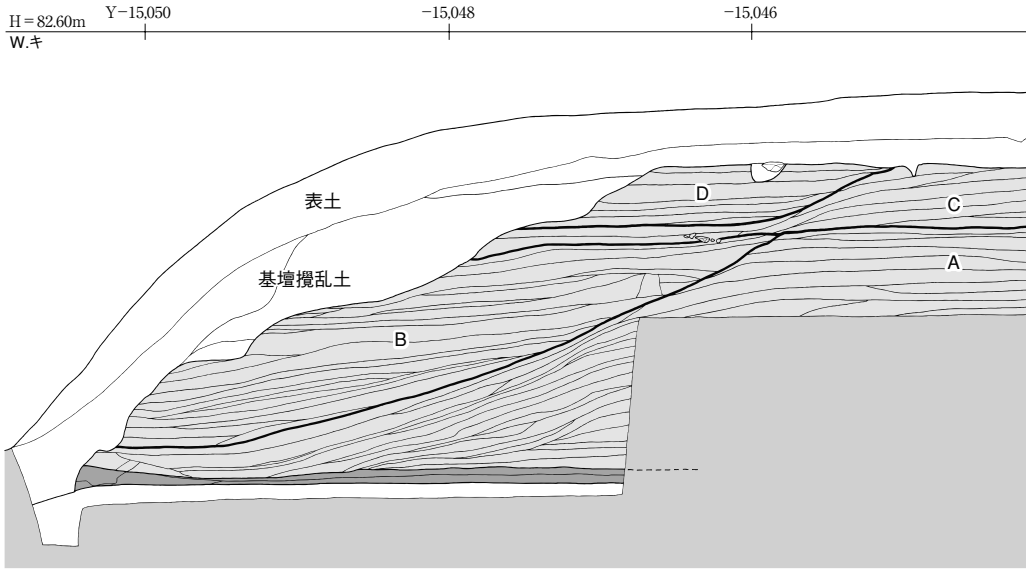


Fig. 41　塔基壇西辺の断面図（土壇上西トレンチ）1:50

Ｃブロックは、Ａブロックの小礫上およびＢブロックの上面の一部にのり、基壇内方では水平に版築するものの、西端部はやはり西へ向かって低く傾斜させる。Ｃブロック中には、心礎の根石とほぼ同大の石を含んでいる。

Ｄブロックは、Ｂブロック上とＣブロックの傾斜面上にのる水平の版築層である。おそらくＣブロック上面と天端をそろえて、基壇土の築成を完成させたものと考えられる。

Ａブロックのような傾斜面は、少なくとも基壇南辺では認められず、通常の水平な版築状況を示している[18]。それとの比較からも、西辺のＡブロックが、傾斜面をつくる意図のもとに版築をおこなっていることは明瞭である。そして、これにつづくＡブロック上面の小礫層の高さは、心礎抜取穴の底面すなわち心礎下面の高さに近く、両者が密接な関係にあったこともうかがえる。以上の点から、こうした傾斜面は、心礎を引き上げるためのものとみて誤りないだろう。同様の例は、尼寺廃寺（香芝市）の塔基壇でも確認されており[19]、巨大な心礎を引き上げる必要のあった塔基壇に特有のものと推定される。

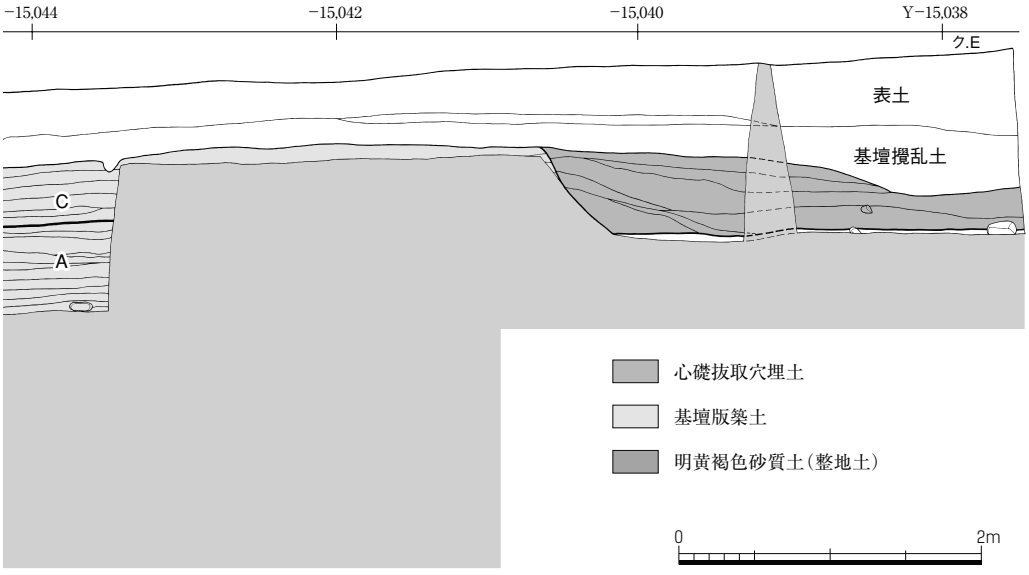
心礎引き上げ用の斜面

なお、心礎抜取穴内やその周囲では、心礎の据え付けにかかわる痕跡はまったく認められなかった。基壇築成の途中で心礎を引き上げて据えるという工法のため、あえて据付穴を掘る必要はなかったものと考えられる。

心礎の据付痕跡なし

基壇の規模と外装（Fig.42）　版築の範囲、心礎抜取穴の規模のいずれも明確でないため、基壇全体の規模に関しては推定の域を出ない。先述したように、版築を確認できる範囲は、少なくとも東西25.9m、南北26.7mあり、南辺の状況からみて、基壇の南北長がこれより広くなることは確実である。一方、東西長に関しては、これ以上の情報がない。基壇西辺の版築層Ａブロックの西端は、版築もやや乱れており、基壇の縁辺部とみることも不可能ではないが、その上にのるＢブロックがどこまで広がるかは不明である。

そこで、現状の金堂土壇と掘込地業の関係を検討すると、隅部分では大きく基壇が削られているものの、東辺中央部では２ｍほど、西辺および北辺中央部では１ｍ前後、掘込地業より小



（断面の位置はFig.42のキー）

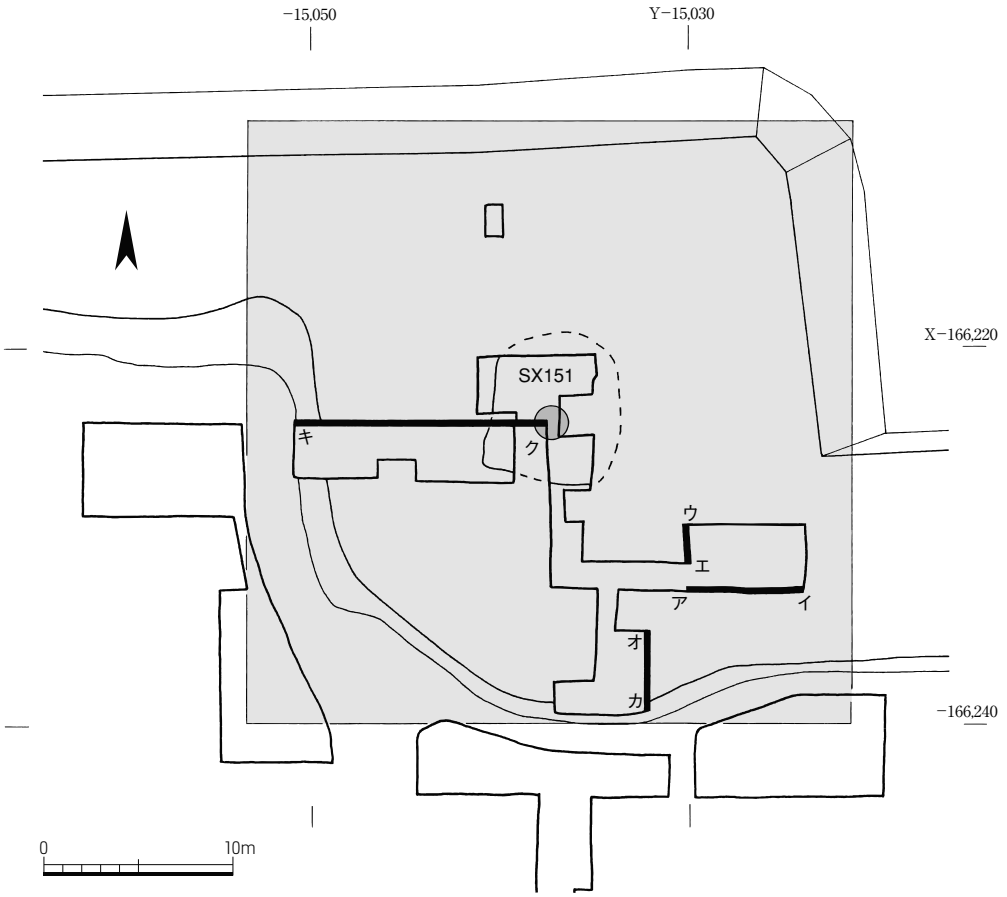


Fig. 42　**塔の調査区と基壇規模**（○は推定塔心）　1:400
（カタカナはFig. 39〜41の断面位置）

さくなっている程度にすぎない。塔の場合も、東辺を除けば同様の可能性があるだろう。

一方、確認できる版築の範囲から塔の南北の中心を求めると、その位置は心礎抜取穴の南端付近となる。この場合、心礎はかなり小さいものとなってしまう。しかし、文武朝大官大寺の塔心礎抜取穴は南北5.6m、東西5.4mの規模をもち、復元される塔の中心と心礎抜取穴の中心はおおむね一致している[20]。したがって、塔の中心と心礎抜取穴の関係を適当な位置に定めることにより、基壇規模を推定するのが妥当であろう。

心礎抜取穴の全容も不明だが、現状ですでに塔の四天柱を含むほどの大きさであり、現状よりさほど大きくなるとは考えられない。そこで、塔心の座標をX=-166,224.0、Y=-15,037.4と推定すると、確認した基壇版築南限までの距離は15.3mとなり、南辺が１m弱ほど削られていると仮定した場合、塔基壇の規模は、一辺32mほどに復元される。北または東に心礎が抜かれているとみた場合でも、一辺30mを下回ることはないだろう。

基壇は一辺32ｍほど

基壇高については、先述したように、現存する基壇高が最大2.3mあり、心礎や礎石の大きさを考慮すれば、これより高くなることは確実である。厚さ1.2mを測る尼寺廃寺の塔心礎を参考に、その頂部付近まで基壇を積み上げていたとみると、基壇高は約2.8mと推定でき、金堂より高い基壇であった可能性がある。

基壇高は2.8ｍ

また、塔基壇の規模を上記のごとく復元すると、土壇南西および南東の調査区に基壇の隅が含まれることになる。金堂同様、基壇の隅部分は大きく削平を受けていると考えてよい[21]。

ちなみに、基壇版築や基壇外装の痕跡はまったく見出せなかった。凝灰岩片のような基壇外装に関わる遺物も皆無で、河原石さえ出土しないことから、金堂同様、痕跡を残しにくい木製の基壇外装を想定すべきだろう。

木製基壇か

小石敷SX155（PL.11）　土壇南側の調査区からさらに南に延びる調査区（南トレンチ）で検出した拳大の小石を敷く遺構で、南北６ｍほどの間に比較的密に敷いている。この面の標高は79.7mである。断面の観察によれば、旧地表面上に施された明黄褐色粘質土（整地土）の上に位置しており、金堂東方の砂利敷SX103とはやや様相が異なるものの、回廊内の舗装の可能性がある。ただし東西幅３ｍの調査区内でも西半に集中し、東半および南方にはほとんどない。また、塔周囲におけるその他の調査区では検出していないなど、疑問な点もある。

回廊内の舗装か

C　中門SB320とその周辺（PLAN 5，PL.12～14）

遺存状況と基本層序　中門基壇の遺存状況はきわめて悪く、石組雨落溝の一部とその石組みの抜取溝、雨落溝を構成する側石の抜取痕跡などから、かろうじて中門の遺構と判断できた。

付近の土層の基本層序は、上から、① 近現代の耕作土、② 中近世もしくはそれ以前からの耕作土である黄褐色～青灰色砂質土（厚さ20～25㎝）、③ 遺物包含層である灰褐色粘質土（厚さ20～30㎝）、④ 遺構検出時のベースである暗灰褐色砂質土（厚さ15～20㎝）、地山である黄灰褐色細砂となる。このうち、④と地山は、古い流路に由来するとみられる比較的締まりのない土層である[22)]。耕作にともなう素掘小溝は、②～④上面から切り込んでおり、南北方向のものが多いが、中門基壇より南では東西方向が主体となる。こうした状況は、第95次調査南区でも同様である。遺構のほとんどは、④の上面で検出した。遺構検出面の標高は80.7mほどであり、金堂基壇東方の砂利敷SX103よりわずかに低い。周囲の旧地形は、調査区東壁にかかる吉備池廃寺以後の斜行溝SD323の方向が示すように、東北東が高く、西南西に向かって低くなる。

中門基壇（PL.13･14，Fig.43）　中門基壇の存在を示すものとしては、調査区の西南隅付近で検出した、南北方向の石組溝がある。次項で述べる南面回廊南雨落溝SD161に接続するもので、第111次調査南区の西端にもその側石の一部が残る。石組溝は内法幅約30㎝、深さ約15㎝で、底石はなく、10～30㎝大の玉石を側石としている。黄灰色粘質土で人為的に埋められており、流水を示す砂礫の堆積は認められなかった。遺物もほとんど出土していない。石組溝の掘形は、幅約85㎝、検出面からの深さ約15㎝を測り、抜けた側石の痕跡が残る。

南北石組溝

この石組溝は、南でやや東に振れながら長さ約2.1mのびてとぎれるが、それに接続して、幅約1.0m、検出面からの深さ6～10㎝の素掘溝が東にのびている。この溝は、やがて北に折れたのち、クランク状に折れてさらに東へのび、全体で長方形をなす南への張り出しを形成する。この底にも側石の痕跡が残る。以上の石組溝をはじめとする溝をSD321とする。

また、SD321の北には、これとほぼ対称となるかたちで、SD322により区画された北への張り出しが存在する。SD322も、幅1.0m前後、検出面からの深さ５～10㎝の素掘溝である。SD322についても、SD321と同様に、10～20㎝の側石の抜けた痕跡が認められた。

したがって、上記のSD321とSD322で囲まれる部分が中門SB320の基壇であり、これらの溝は中門の石組雨落溝もしくはその抜取溝と考えられる。

中門の基壇そのものは、基壇外装を含めてまったく遺存せず、掘込地業もない。基壇の上面

掘込地業なし

は、斜行溝SD323や後述する藤原宮期の東西溝SD180などで破壊され、基壇土や礎石の痕跡は明瞭には確認できなかった。階段の存在を示す痕跡も認められない。ただ、建物内部とその北側のSD322を覆う土には、明黄褐色の粘土ブロックが混じっており、これは基壇土に由来する可能性がある。また、東南隅柱に比定できる位置には、礎石の据え付けもしくは抜き取りに関わるとみられる土質の違いSX335があるが、きわめて痕跡的である。

基壇の規模と外装　中門基壇は削平されているため、基壇高についても不明だが、礎石の据え付けや抜き取りの痕跡が失われていることから、最低でも礎石の厚さ程度はあったとみられる。30～50㎝程度だろうか。また、階段の痕跡が認められないことから、基壇内に設ける切り込み階段か、階段がなくても上れる程度の基壇高を想定せざるをえない。

基壇外装については、それに関わる切石や凝灰岩片などがまったく出土しないことから、乱石積ないし木製の基壇外装が考えられよう。ただし、乱石積の場合、雨落溝の基壇内方にあたる側石を基底石としたとすると、溝内外の側石で大きさが変わらないのが不審である。また、雨落溝内側に基底石をおいたのであれば、その痕跡が残っていない点が問題となる。よって、中門に関しても、金堂や塔と同じく、木製の基壇外装の可能性が高いと判断しておきたい。この場合、中門の基壇規模は、東西12.0m×南北9.8mほどと推定される[23]。

基壇規模は12.0×9.8m

土坑SK326・327　第111次調査南区の北壁にかかる２つの土坑。相互の間隔は約2.7mあり、いずれも検出面から0.9～1.2mと深い。埋土の最上部には、吉備池廃寺所用の軒丸瓦などが廃棄されていた。一対の幢竿支柱掘形となる可能性もあるが、位置的にみて金堂中軸線より西に寄っており、また中門中軸線を折り返した西側には同様の遺構がない。出土遺物には、上記の軒瓦のほか、土師器小片や須恵器甕片があるが、年代は特定できない。

東西溝SD180（PL.13・15，Fig.45）　第111次調査南区および第95次調査南区で検出した素掘りの東西溝。藤原京の三条大路[24]北側溝に相当する。南面回廊南雨落溝SD162に接する位置にあり、中門および南面回廊基壇上を横断する。詳細は次項（55頁）を参照されたい。

藤原京三条大路北側溝

東西塀SA325　第111次調査南区で検出した掘立柱東西塀。次項で述べる第95次調査南区の東西塀SA182の延長にあたり、中門SB320基壇上を直線的に横断する。柱間寸法は約1.8～2.1mで、2.0mほどの部分が多い。柱掘形は、一辺が40～55㎝のやや不整な方形をなし、径15～20㎝の柱痕跡には、基壇土に由来すると思われる黄色～黄褐色の粘質土が入る。掘形の深さは、検出面から30～40㎝である。

この掘立柱塀の時期や性格は明らかでないが、第95次調査南区で検出した掘立柱東西棟建物SB190（次項）にとりつくとみて、一連の施設と考えておく。東西溝SD180心からの距

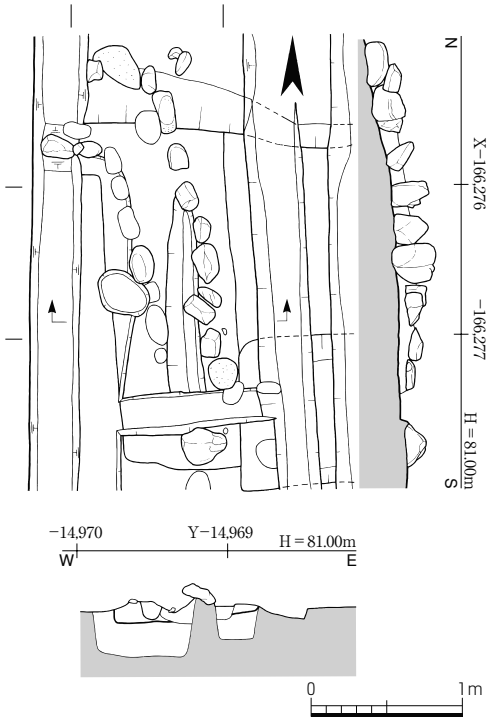


Fig. 43　中門SB320の石組雨落溝　1：50

離は4.1m前後を測り、藤原京左京三条十坊西南坪の南辺を遮蔽する塀となる可能性がある。

井戸SE330　第111次調査南区中央付近で検出した井戸。井戸枠が抜き取られた様相を呈し、掘形については明確でない。抜取穴の径は約2.2mを測る。周囲からの湧水が激しく、検出面から約1.5m下に砂層があることを確認して、掘り下げを断念した。抜取穴中には、中門もしくは回廊の雨落溝所用と思われる拳大～人頭大の河原石が廃棄されていた。出土遺物には、板材や飛鳥Vの土器などがあり、藤原宮期の井戸と考えられる。

このほか、SE330の南には、SD180の肩を破壊するかたちで、性格および年代不明の土坑SK328（径1.9～2.4mの不整円形、検出面からの深さ55㎝前後）がある。また、調査区東南隅には近代以降の野井戸SE329（径約2.0m）がある。

D　南面回廊SC160とその周辺（PLAN 6，PL.15・16）

回廊全体の遺存状況　南面回廊・西面回廊・東面回廊を確認したが、いずれも吉備池堤防外側の水田にあり、かなり削平を受けている。そのため、回廊自体の基壇土および基壇外装、礎石の据付穴や抜取穴などを明瞭なかたちで検出することはできなかった。このうち南面回廊は、後世の耕作による削平のほか、棟通りのやや南に重複して掘られた藤原宮期の東西溝SD180によって、基壇上面が大きく破壊されている。また、東方の第111次調査南区や東面回廊を確認した第105次調査東区は、西方にくらべて地形が高く、水田化による遺構の削平が著しい。

調査では、まず、側石をもつ東西方向の雨落溝SD161と石組抜取溝SD162が約6mの間隔で平行することを確認し、南面回廊SC160の位置と規模が明らかとなった。そして、西面および東面回廊に関しては、ほぼ想定どおりの位置で部分的に石組みをともなう南北溝やその抜取溝を検出し、回廊の雨落溝と認定した。北面回廊に関わる遺構は確認していない。

基本層序　南面回廊は、第89次調査南トレンチと東南トレンチ、第95次調査南区、第111次調査南区で検出した。調査区の基本層序は、上から近現代の耕作土、旧耕作土となる暗黄褐色～淡灰色粘質土、吉備池廃寺廃絶後の整地土である暗黄灰色～茶灰褐色粘質土、吉備池廃寺創建時の整地土である黄褐色山土混じりの暗茶褐色～暗灰褐色粘質土、地山と考えられる黄灰褐色～灰褐色の砂となる。旧地表面は、現状と同じく、おおむね西下がりの傾斜である。現在の水田面が段差をもつため、上部の厚さは一定しないが、整地土の厚さはいずれも10～20㎝ほどである。遺構面の標高は、東から、第111次調査区で80.7m、第95次調査南区が80.0m前後、第89次調査区は79.6～79.9m、第95次調査西南区が78.8mであった。

南面回廊基壇（PL.15・16，Fig.45）　第89次調査南トレンチで側石の抜取痕跡をもつ東西溝を、同東南トレンチで、この溝の東延長部とともに、その約6m南を平行する自然石の側石をもつ東西溝を検出した。溝の位置や方位、両溝の間隔などから、この溝間が南面回廊SC160の基壇であり、平行する2条の溝は南雨落溝SD161と北雨落溝の石組抜取溝SD162と判断した。さらに、その東方に設定した第95次調査南区では、両溝の延長部を検出し、さらに東方の第111次調査南区では、これらの溝が中門SB320の南北両側溝SD321・322に接続し、その東へも痕跡的ながら連続することを確認した。これらの所見を総合すると、南北雨落溝（雨落溝の石組抜取溝）間の心々間距離は6.2～6.6mとなる。いずれの調査区でも回廊の掘込地業は検出されず、削平のため、回廊の基壇土もまったく残っていない。

雨落溝間は6.2～6.6m

第89・95次調査区では、北雨落溝の石組抜取溝SD162のすぐ南で、明黄褐色～暗黄褐色粘質土を埋土とする、幅15㎝ほどの帯状遺構SX183を検出した。これは、第95次調査の断面観察によれば、SD162によって破壊されており、第89次調査区では、SD162と重複関係はないものの、きわめて浅くしか残らない。また、東方の第111次調査区では、遺構検出面が全体に大きく削平されているため、SX183を確認できなかった。このSX183をSC160の基壇外装の抜取痕跡とすれば、基壇外装は雨落溝の側石のすぐ内側に設けられたことになる。その場合、南雨落溝SD161の北側にも同様の痕跡が想定されるが、藤原宮期の東西溝SD180で破壊され、不明である。以上から、回廊の基壇幅については、5.4m前後と復元できる。

基壇外装の抜取痕跡か

なお、第89・95・111次調査区では、回廊基壇上で直径0.9～1.5mほどの土質の違い（SX185およびSX324）を認めている。いずれもきわめて痕跡的だが、これらは北側柱列の礎石抜取穴や据付穴の可能性が指摘されてきた（『年報1998－Ⅱ』、『年報1999－Ⅱ』、『紀要2001』）。ちなみに、南側柱列の想定位置は、藤原宮期の東西溝SD180によって完全に破壊されている[25]。SX185の穴どうしの間隔は約３m、SX324ではそれより若干長い3.3m程度である。

しかし、これらを礎石に関わる痕跡とした場合、北雨落溝推定心との距離は２m前後、回廊梁行の柱間寸法は2.2～2.6mとなり、梁行に比べて軒の出が長大に過ぎる。南面回廊の礎石は、SX185、SX324の中心よりかなり外側に位置したとみて間違いないだろう。また、第95次調査で検出したSX185の柱間寸法を東へ延長させると、中門SB320にとりつく部分の柱配置が、第111次調査区のSX324とは対称にならない可能性が大きい。したがって、上記の土質の違いSX185、SX324は、礎石にともなう痕跡とは認めがたい。

基壇幅5.4mの単廊

以上、南面回廊SC160は、基壇幅5.4mほどの単廊と考えられる。基壇高については不明だが、礎石の痕跡が残らないことから、中門と同様、高さ30～50㎝程度と推定しておく。

基壇外装については、明黄褐色～暗黄褐色粘質土を埋土とする幅15㎝ほどの帯状遺構SX183を、その抜取溝とみることができる。この場合、SX183は石を抜いたような様相を示さず、また切石や凝灰岩片も確認できないことから、金堂や塔と同様に、回廊も木製の基壇外装であった可能性が想定されよう。

南雨落溝SD161（PL.16，Fig.44・45）　南面回廊の南雨落溝は、幅約1.0m、深さ50㎝ほどの掘形を掘り、拳大～人頭大の自然石を側石としてならべる。底石はない。溝幅は内法30～55㎝、溝の深さは30㎝程度である。第95次調査南区では東西17mにわたってよく残るが、部分的に側

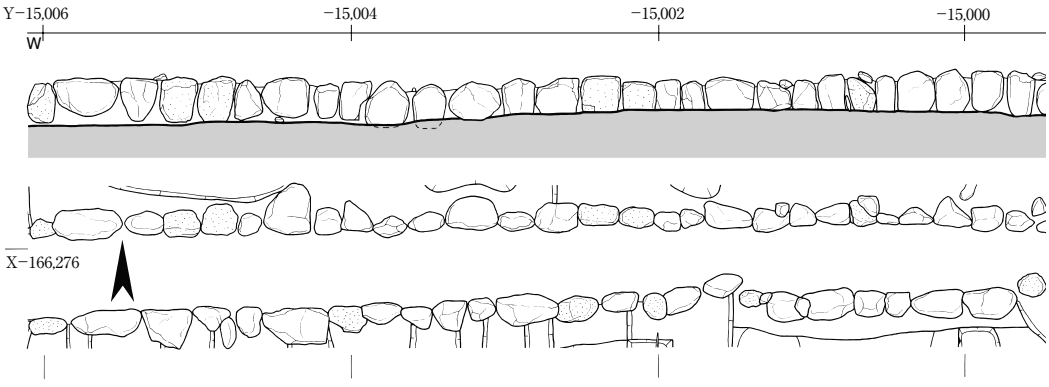


Fig. 44　南面回廊石組雨落溝SD161　1:50

石が溝内に落ち込んでいた。第89次調査東南トレンチでも、約２m幅で同様の石組みを検出している。側石は、風化の激しいものが砂塊となって残った部分もある。

溝底の標高は、第111次調査南区の西端（Y=−14,970）で80.4m、第95次調査南区の東端（Y=−14,993）が79.8m、同西端（Y=−15,009）では79.6m、第89次調査区（Y=−15,020）は79.5mである。したがって、西流したことが明らかだが、現状では東方の削平が大きく、中門SB320の東では痕跡的に残るにすぎない。溝の埋土には、流水による堆積土がなく、人為的に埋め立てられた様相を呈しており、基壇土に由来すると考えられる黄灰色の粘質土がまじる。なお北側石に沿って藤原宮期の東西溝SD180が通るため、溝の掘形の北肩は削られている。

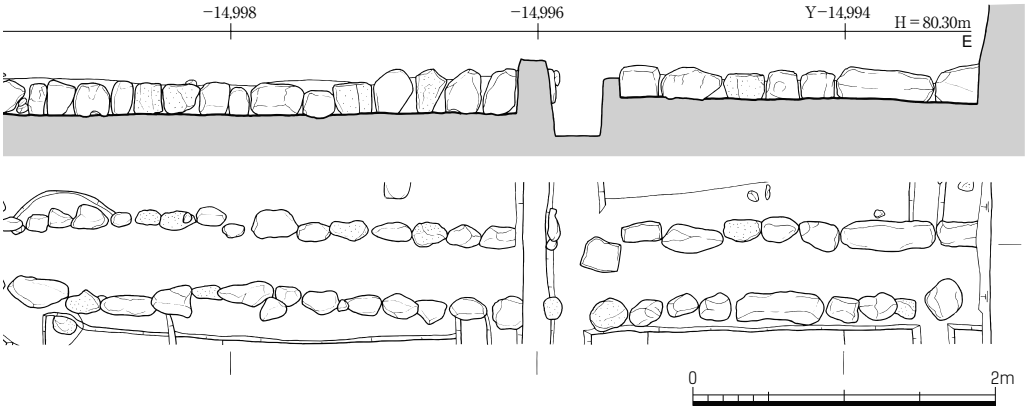
また、第95次調査西南区において、南面回廊南雨落溝と西面回廊西雨落溝の交点の検出を試みたものの、回廊関係の遺構は検出できなかった。検出面および南面回廊南雨落溝底の標高からみて、後世に完全に削平されたとは考えにくいが[26]、この調査区で検出した東西溝SD240は、南面回廊南雨落溝SD161の延長想定位置より１～２m北に寄っており、埋土の状況や出土遺物もSD161と異なる。なお、南面回廊南雨落溝が、西面回廊西雨落溝を越えて、標高の低い西方へと続いていたことは充分に想定される。

北雨落溝の石組抜取溝SD162（PL.16，Fig.45）　幅1.1～1.9m、検出面からの深さ10～15㎝の浅い素掘溝で、底には抜き取られた側石の痕跡がある。雨落溝の石組抜取溝であろう。この痕跡から復元できる側石の大きさや溝幅などは、南雨落溝SD161とほぼ同じである。

掘立柱塀SA181（PL.16，Fig.45）　第95次調査南区で検出した掘立柱東西塀。南面回廊南雨落溝SD161のすぐ南を平行し、SD161の掘形よりも古い。柱間寸法は約1.8～2.2mである。柱掘形は一辺40～60㎝のやや不整な方形で、黄色の山土が混じる。深さは20～30㎝である。第89・111次調査区では確認していない。第89次調査区は掘り下げが充分でなかった可能性もあるが、第111次調査区では削平されたと判断してよい。性格不明だが、掘形埋土の状況からみて、吉備池廃寺創建にかかわる遺構と考えられる。南面回廊建立以前の一時的な遮蔽施設か。

創建期の遮蔽施設

東西溝SD180（PL.13・15，Fig.45）　第95次調査南区および第111次調査南区で検出した素掘りの東西溝。南面回廊南雨落溝SD161に接する位置にあり、中門および南面回廊基壇上を横断する。幅1.7～2.7m[27]、検出面からの深さは60㎝程度である。溝底の標高は、第111次調査南区東端で80.5m、約62m西方の第95次調査南区西端では79.3mであり、西流したことは間違いない。溝の上層は、黄色土混じりの黄褐色～灰褐色砂質土で埋め立てられた様相を呈する。中層以下



は、礫混じりの灰色系の砂を主体とする流水堆積を示し、溝底付近は、遺物を比較的多く含む砂層となる。軒瓦を含む瓦片のほか、上層から飛鳥Ⅴ、中層から飛鳥Ⅳ、下層から飛鳥Ⅲ～Ⅳの土器が出土した。藤原宮期の溝であることは確実であり、その位置と遺構の状況から、三条大路の北側溝と判断される。

藤原京三条大路北側溝

もっとも吉備池廃寺周辺における藤原京の条坊遺構の検出例は乏しく、とりわけ東西方向の大路や条間路の検出例はほとんどない。上記の推定の妥当性については「第Ⅴ章5 藤原京条坊と寺地」で考察するが、第111次調査南区の南方でおこなった「橋本冠名遺跡」の調査や桜井市第12次調査では、条坊側溝に相当する東西溝を検出していない[28)]。

掘立柱建物SB190（PL.16）　第95次調査南区の東端で検出した、南北にならぶ掘立柱穴3基。東西棟掘立柱建物の西妻に相当するとみられる。中央の柱穴は、南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162より新しく、掘立柱東西塀SA182・325が接続する一連の施設と考えられる。柱間寸法は1.9m前後で、柱掘形は一辺0.85～1.1m、検出面から30～50㎝の深さをもつ。柱掘形には、基壇土に由来するとみられる黄色粘土塊が入る。

この建物については、SD162より新しく、かつ正方位をとることから、藤原宮期と考えておく。東西塀SA182・325に開く門となる可能性を想定しうるだろう。この掘立柱列の位置が、左京三条十坊西南坪の中心に近いこともその傍証となる[29)]。

東西塀SA182（PL.16，Fig.45）　第95次調査南区で検出した掘立柱東西塀。南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と重複する位置にあり、第111次調査南区で検出した中門SB320の基壇上

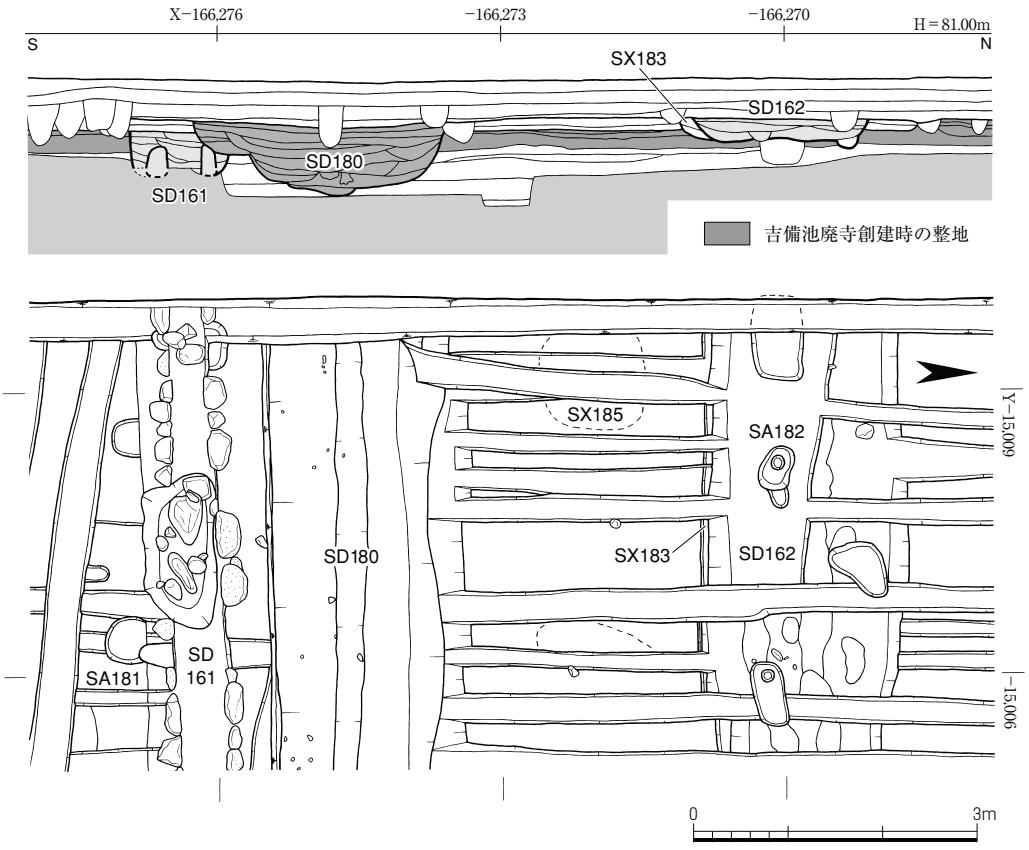


Fig. 45　南面回廊SC160付近の土層図と平面図　1:80

を横断する東西塀SA325の延長にあたる。『年報1999－Ⅱ』では南面回廊造営時の足場とみたが、SA325が回廊部分と中門部分の別にかかわらず、直線的にそれらの基壇上を横断することから、藤原宮期の遺構と解釈するのが妥当と考える。上記の東西棟掘立柱建物SB190にとりつく塀であろう。柱穴の寸法など詳細については、SA325の記載を参照されたい。

土坑SK193　第95次調査南区の北端近くにある土坑。南北長1.1m、深さ約10㎝で、東の調査区外へのびる。瓦片数点のほか、瓦器や土師器の甕、弥生時代の壺の破片などが出土した。

土坑SK186　第95次調査南区の中央部で検出した長さ４m以上、幅1.1mの南北に細長い土坑。南面回廊南雨落溝SD161より古く、吉備池廃寺創建以前の遺構である。埋土には、古墳時代の土師器、須恵器の甕を含む。性格不明。

創建以前の遺構

土坑SK187～189　第95次調査南区の浅い土坑。長辺1.1～2.5m、短辺70～90㎝の長方形平面をもち、長軸が正方位にほぼ合う。埋土には小礫が多く含まれる。SK188・189からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。いずれも藤原宮期の遺構とみられるが、性格は明らかでない。

E　西面回廊SC200とその周辺（PLAN 7，PL.17～19）

基本層序　西面回廊は、塔土壇の西側に設けた第95次調査西区東側のトレンチで検出した。調査区の基本層序は、上から、① 現耕作土、② 旧耕作土である淡灰褐色粘質土～茶灰褐色砂質土（厚さ10～20㎝）、③ 遺物包含層である灰褐色粘質土（厚さ10～15㎝）、④ 回廊雨落溝造営時のベースである黄色粘土混じり青灰色粘質土～暗灰褐色砂質土（厚さ10㎝前後）、⑤ 灰褐色粘土（厚さ10㎝前後）、地山である暗灰褐色粘土となる。素掘小溝の多くは③層上面、西面回廊SC200にともなう遺構や斜行溝SD215、土坑SK217・218などは④層上面で検出した。西区東側のトレンチから西には、整地土と考えられる黄灰褐色砂質土があって、斜行溝SD215を覆っている。この整地土は、南北溝SD201付近から西へ広がるものとみられる。西区東側のトレンチにおける遺構面の標高は78.9m前後。周囲の旧地形は西～西南西に向かって低くなる。

西面回廊の石組抜取溝SD201（PL.18，Fig.46）　幅1.1～1.4m、検出面からの深さ20～30㎝を測る素掘りの南北溝。後世の素掘小溝により大きく破壊されている。溝下面の標高は78.6～78.7mである。南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と異なり、石の抜取痕跡自体は明瞭でないが、溝底に灰褐色粘土が点々とつづき、石組みの存在をうかがわせる。

石の抜取痕跡SX202（Fig.46）　SD201の西約６mの位置で検出した４個の石の抜取痕跡。後述する伽藍内の排水暗渠SD215の埋土上面にある。当初の位置ではなく、転倒などによる石の移動後に抜き取られたものとみられる。

土質の差SX203（PL.18）　南面回廊におけるSX185やSX324と同様、SD201の心から２mほど西で、径約1.4mの土質の違いSX203を１箇所検出した。しかし、これも非常に痕跡的である。

西面回廊の復元（PL.17・18，Fig.46）　西面回廊SC200については、当初、南北溝SD201を東雨落溝の石組抜取溝、土質の差SX203を礎石の抜取痕跡、石の抜取痕跡SX202を西雨落溝関連遺構と理解した。つまり、SD201とSX202の間に西面回廊を想定したのである（『年報1999－Ⅱ』）。しかしながら、SX203に関しては、南面回廊の場合と同様、回廊の梁行と軒の出のバランスを欠くため、礎石の抜取痕跡とはみなしがたい。また、石の抜取痕跡SX202は二次的な移動後の痕跡であって、南北溝を形成する石にともなうものか確証がない。よって、西面回廊の遺構と

して確定的なのは南北溝SD201のみということになる。

そこで、あらためて西面回廊付近の調査区を見ると、SD201を境として、それより西側にだけ、整地土とみられる黄灰色土が広がっている状況を明瞭に認めることができる。これらは、SD201を東雨落溝ではなく西雨落溝とみて、回廊基壇をその東に想定することにより、説明がつく。すなわち、西面回廊を含む内側（東側）は、外側（西側）にくらべてやや高いため、後代に整地土が削平され、地形的に低い外側（西側）は整地土が遺存したと解釈できるのである。南面回廊でも、回廊外側（南側）の石組雨落溝が良好に遺存するのに対し、内側（北側）の雨落溝の石がまったく残っていないのは、このように、回廊で囲まれた内側が回廊の外側よりやや高かったことを示しているのであろう。

回廊内は外より高い

西面回廊西雨落溝

上記の理由から、SD201を回廊の外側、つまり西雨落溝の石組抜取溝と理解することにした[30]い。西面回廊の基壇は、回廊内側の整地土と同様、削平されたものと考える。ちなみに、藤原京の東九坊大路がこの位置で検出できないのも、同じ理由による可能性がある。

以上、西面回廊については、西雨落溝の石組抜取溝SD201を検出したのみで、回廊基壇自体や基壇外装については不明とせざるをえない。南面回廊同様の仕様と推定しておく。

斜行溝SD215・210（PL. 19，Fig. 47）　SD215は、第95次調査西区東側のトレンチ西端部から中央のトレンチ内を西南西へ横断する素掘溝。検出面からの深さ60㎝前後の溝だが、近世の井戸SE220付近を境に、東西で様相が異なる。

伽藍の中心寄りにあたるSE220以東では、掘形は幅が1.2～1.4mで断面はＶ字形に近く、深さ70㎝ほど掘り込んだうえで、中央に人頭大の河原石を積み上げている。埋土は黄色もしくは灰色の粘土で、一時に埋めた様相を呈する。遺物は出土しなかった。

一方、SE220以西では、幅が２m前後となり、断面は方形に近くなるが、河原石は入れていない。さらにその底には幅90㎝、深さ15㎝ほどの長方形断面の素掘溝SD210を掘る。SD210の埋土は、流水による自然堆積を示す暗灰色～灰色細砂で、SD215とは様相を異にする。SD215検出面からSD210底までの深さは60㎝前後である。なお、この部分のSD215の上部は、次に述べる斜行溝SD225によって破壊されている。

SD210は、SE220以東ではSD215河原石積みのため確認できなかったが、溝底の標高からみて、東方へは続かないだろう。SD210とSD215が一連の遺構か、それとも時期差もしくは工程差であるのかは明らかにしえなかった。ただ、SE220付近を境に、伽藍の内外で様相が異なるのは、伽藍内をより重視した施工がおこなわれたことを示している可能性がある。

伽藍内を重視した施工

このSD215東半部の様相は、金堂基壇外周の溝SD104・105・250と類似しており、同様に

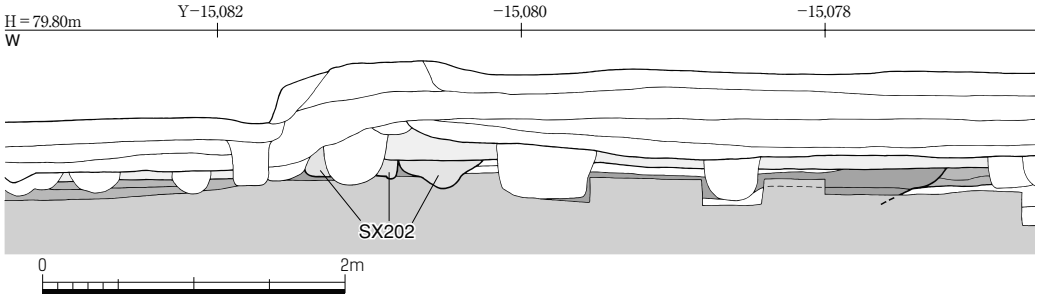


Fig. 46　西面回廊SC200付近の土層図　1:50

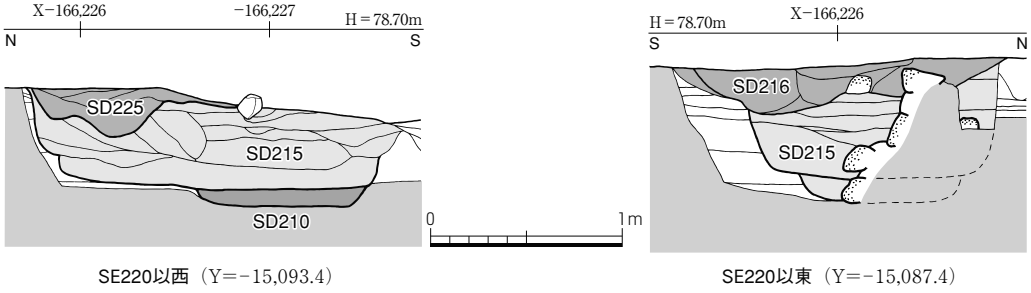


Fig. 47　斜行溝SD215・210の断面図　1:40

暗渠として機能したとみてよい。旧地形は西～西南西に向かって低くなっているため、回廊で囲まれた内部の水を排水する目的でつくられたものと推定される。なお、SD215を東方へのばすと塔基壇の北縁部にあたる。これがさらに東方へのび、金堂基壇周囲の溝SD104・105へ接続していたことは充分に考えられるだろう。

斜行溝SD225（Fig. 47）　第95次調査西区中央のトレンチにある近世井戸SE220付近から、西南西方向に流れる素掘溝。幅２ｍ前後、検出面からの深さは25㎝程度である。SD215と重複し、その上部を破壊する。溝の東端部は、藤原宮期とみられる土坑SK221と近世の井戸SE220の掘形で破壊されている。埋土には砂質土が堆積し、SD215に特徴的な黄色粘土がなく、河原石も含まない。下層から、飛鳥Ⅰの須恵器杯Hや弥生時代の壺の破片が出土した。性格については不明だが、SD215と一連のものである可能性も否定できない。

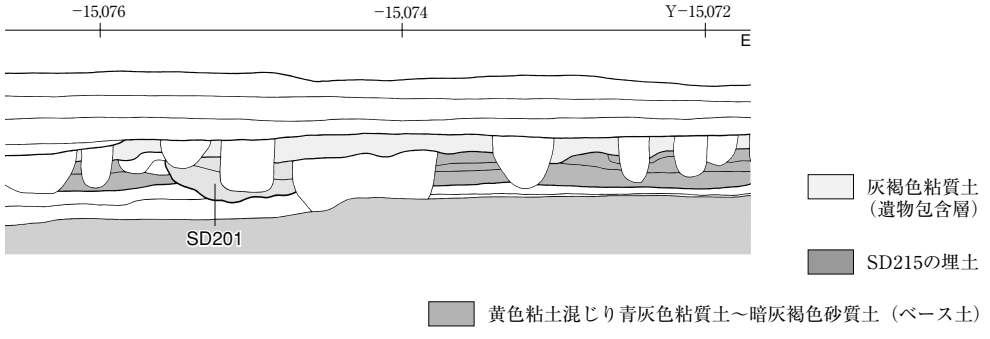
土坑SK216～218　いずれも第95次調査西区中央のトレンチで検出した土坑。調査区中央付近のSK216は、伽藍内の排水暗渠SD215の埋土である黄色粘土上から掘りこみ、東西2.4m、南北1.2mの長方形をなす。この埋土にも黄色の山土を含んでいる。断面は、東西両辺部が浅く中央部が深い逆凸字形で、検出面からの深さ約1.1mを測る。

SK216の北３mに位置し、調査区北壁にかかるSK217は、東西約２m、南北1.7m以上の円形土坑である。西辺部には、長さ30㎝、幅５㎝の板２枚が長手方向を上下にして打ち込まれていた。検出面からの深さは約1.2m。藤原宮期の東西溝SD219より古い。

SK217の西５mの位置にあるSK218も、大部分が調査区北壁にかかる、東西4.5m以上、南北0.6m以上の土坑。掘り下げをおこなわなかったため、深さは不明である。これも、藤原宮期の東西溝SD219より古い。

寺院廃絶期の土坑

これらの土坑は、埋土の状況が類似しており、同様な性格が想定される。SD215より新しく、藤原宮期の東西溝SD219より古いことから、吉備池廃寺の廃絶にかかわる土坑と推定しておく。



SK216から７世紀の土師器杯Ｃと甕、SK217からは弥生時代の甕の破片が出土した。

土坑SK242　第95次調査西南区で検出した東西溝SD240の下層にある土坑。径２ｍ以上の円形をなし、調査区の壁面で確認できる深さは約40㎝である。回廊の外をめぐる雨落溝の西南隅想定位置に近いが、性格は明らかでない。藤原宮期の東西溝SD240よりも古いことから、吉備池廃寺にともなうものと判断した。遺物は出土していない。

南北塀SA204　第95次調査西区東側のトレンチで検出した、南北にならぶ掘立柱穴２基。間隔は1.6m程度である。北側の柱穴は南北に長い長方形で、検出面からの深さ約15㎝。南側の柱穴は径45～50㎝ほどの隅丸方形で、深さ約25㎝。柱間寸法からみて、さらに調査区外の南および北側に延びる可能性がある。いずれも、柱掘形には回廊基壇土に由来すると思われる多量の黄色粘土を含んでいる。藤原宮期の遺構と考えておく。

藤原宮期の遺構

東西溝SD219　第95次調査西区中央のトレンチ北縁部を横断する藤原宮期の素掘りの東西溝。幅50～90㎝、検出面からの深さは10～15㎝である。７世紀後半の土器が出土している。三条大路北側溝とみられる藤原宮期の東西溝SD180から約51m北に位置し、三条大路心からの距離は56mほどとなる。性格不明だが、宅地内の区画溝か。

土坑SK221　第95次調査西区中央のトレンチ内、近世井戸SE220の西に位置する土坑。SE220の掘形で一部破壊されている。断面はＶ字形をなし、完掘していないため深さは不明だが、検出面から50㎝以上を測る。上部から若干の瓦が出土。斜行溝SD225によく似た埋土をもつ。

東西溝SD226（PL.19）　第95次調査西区中央のトレンチ西端から西側のトレンチ、さらに西方の調査区外へと続く藤原宮期の素掘りの東西溝。幅は東端部で約2.0m、検出面からの深さ20㎝前後で、西流する。溝底の標高は、西端部で77.7mである。飛鳥Ⅴの須恵器杯Ｂなどのほか、判読不明の木簡、長さ1.3m×幅25㎝ほどの板材、獣骨などが出土した。溝の東端は護岸を施していたらしく、杭５本ほどを検出した。出土した板材もこの護岸にともなう可能性がある。この溝は、三条大路北側溝とみられる藤原宮期の東西溝SD180から約47m北に位置し、三条大路心からの距離は52mほどとなる。一方、溝の東端は、「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」での東九坊大路心推定位置から約50m西にあたる。藤原京の宅地内の区画溝であろう。

東西塀SA227（PL.19）　第95次調査西区中央のトレンチ西端部から西側のトレンチにかけて検出した東西方向の掘立柱穴４基。東西溝SD226北肩の40～70㎝北を平行する。柱間寸法は2.1m等間で、１基は畦畔のため未検出だが、４間分に相当する。柱穴は径60㎝前後で円形に近く、柱痕跡の径は15㎝程度、検出面からの深さは25～55㎝を測る。遺物は出土していないが、SD226と同時期と考えておく。

近世の井戸SE220（PL.19）　第95次調査西区中央のトレンチで検出した。一辺1.2mほどの方形をなす木製井戸枠をもつ。四隅には一辺12㎝ほどの角柱を立て、あいだに径６㎝前後の丸太を渡し、厚さ約１㎝の縦板を張る。掘形は一辺が3.5m前後の隅丸方形ないし円形で、SD215およびSD210を破壊する。掘り下げはおこなわなかった。

東西溝SD240（PL.19）　第95次調査西南区で検出した素掘りの東西溝。幅約80㎝、検出面からの深さ約10㎝を測る。西端における溝底の標高は約78.7mであり、地形から西流するとみてよい。埋土には流水堆積による砂礫を多く含み、藤原宮期の土器が少量出土することから、藤原宮期の遺構と推定される。

この第95次調査西南区は、回廊の西南隅想定位置にあたり、南面回廊南雨落溝SD161の確認を意図して調査をおこなった。ここで検出したSD240は、SD161の想定位置より１～２m北にあるが、調査区内で西面回廊雨落溝に関連する南北溝は確認していない。地形から、SD240が西面回廊雨落溝位置をこえて西に延びていたことは確実とみられる。なお、藤原宮期の東西溝SD180は、方位の振れを考慮すると、ほぼSD240と同位置を通っていたと推定される。SD240は、埋土に砂礫を多く含む点でSD161とは状況を異にしており、藤原宮期の遺物が出土する点とあわせて、SD180の一部に該当する可能性が高いだろう。

東西塀SA241（PL.19）　第95次調査西南区で検出した東西にならぶ掘立柱穴３基。中間の柱穴が抜け、また若干柱筋がずれるが、柱間寸法を1.9m前後とする東西塀と推定される。柱掘形は、径45～85㎝の不整円形で、東端のものはごく浅い。SD180もしくはSD240に関連するとみて、藤原宮期と考えておく。

F　東面回廊SC300とその周辺（PLAN 8，PL.20・21）

遺存状況と基本層序　東面回廊は、金堂基壇東方に設定した第105次調査東区南トレンチで検出した。金堂掘込地業東端より約13m東で確認した南北溝SD305が、東面回廊西雨落溝の石組抜取溝にあたるものと推定する。基壇土や基壇外装、礎石の据付痕跡・抜取痕跡などはまったく遺存せず、東雨落溝も削平されているとみられる。

調査区の基本層序は金堂東辺とほぼ共通しており、上から、① 耕土・旧耕土（厚さ70～100㎝）、② 金堂廃絶後の整地層である灰色粘土（厚さ10～20㎝）、③ 遺物包含層である、鉄分の沈着が顕著な灰褐色～褐色粘質土（厚さ10～20㎝）、④ 吉備池廃寺創建時の整地とみられる橙黄色粘質土混じりの褐色～黄灰色粘質土（厚さ20㎝前後）、⑤ 金堂基壇構築のベースとなる、有機物と砂混じりの暗灰色～灰黒色粘質土（厚さ20㎝以上）、地山である灰黒色粘土～砂となる。東面回廊の遺構は、④層の上面で検出した。遺構面の標高は80.5m前後である。

西雨落溝の石組抜取溝SD305（PL.21，Fig.48）　幅1.1～1.4m、検出面からの深さ25～30㎝の南北溝で、わずかに２石を底部に残す。石は長径20㎝程度で、うち１石は平らな面を上に向けるものの、側石のならびを形成するほど整列しているわけではない。石の抜取痕跡も明瞭でないが、この溝には流水にともなう砂礫層がなく、黄色ないし黄灰色の山土混じりの粘質土によって一時に埋め立てられた様相を呈し、その際に投棄された瓦片や土器片を含んでいる。こうした埋土の状況は、南面回廊北雨落溝の石組抜取溝SD162と酷似しており、溝の規模や金堂との

山土で埋め立て

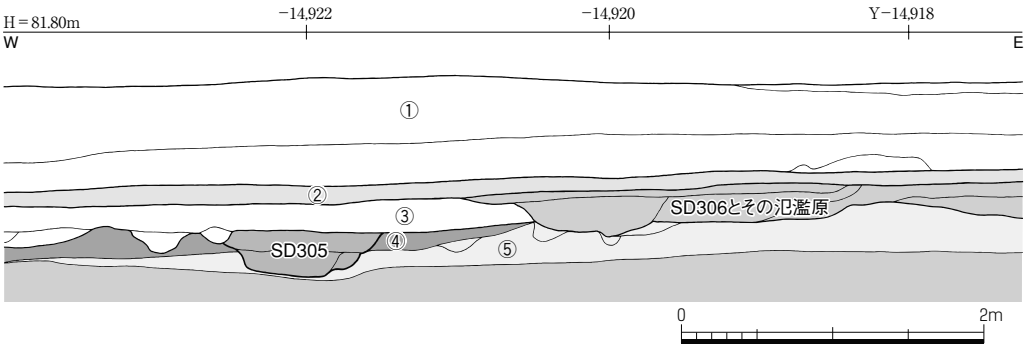


Fig. 48　東面回廊SC300付近の土層図　1:50

東面回廊西雨落溝

位置関係とあわせて、東面回廊西雨落溝の石組抜取溝と解釈するのが妥当だろう。

なお、この溝は、旧地形からみて、北流したものと推定されるが、第105次調査東区北トレンチでは、平安～鎌倉時代の溝SD306・307によって削平され、SD305の延長を確認することはできなかった。また、西雨落溝SD305に対応する東雨落溝の遺構も残っていない。したがって、周辺の地形が東へ向かって高くなる点を勘案すれば、東面回廊内外の標高はほとんど同じか、むしろ地形を反映して回廊外の方が高かった可能性があるだろう。

以上、東面回廊についても、西面回廊同様に不明な部分が多いものの、南面回廊とほぼ同じ仕様の基壇を有していたと考えられる。

平安～鎌倉時代の溝SD306・307　第105次調査東区で検出した、寺院廃絶後に東面回廊SC300上に掘られた素掘溝。南北溝SD306とそれから西へ分岐する東西溝SD307がある。SD306は、東区北トレンチでは幅2.6～2.9m、検出面からの深さ約20㎝を測る。SD307は幅1.6～2.2m、深さ30㎝ほどで、SD306にくらべて若干深い。東区南トレンチでは、SD306の下層遺構を確認する目的で掘り下げたため、遺構としては残っていない。SD306溝底の標高は80.6m前後で、旧地形からみて北流したものと考えられる。SD306・307いずれの埋土中にも、多数の礫とともに、吉備池廃寺創建瓦や瓦器椀などが含まれていた。後述する井戸SE312・313より新しく、12～13世紀頃の溝と推定される。

井戸SE311　第105次調査東区北トレンチ東南隅で検出した井戸。径40㎝ほどの曲物の井戸枠を備えていたとみられるが、井戸枠は抜き取られている。掘形は径約1.4mの円形で、検出面からの深さは約1.0mを測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土しており、この頃のものと考えられる。次に述べるSE312・313の機能を継承し、SD306・307と共存する井戸であろう。

平安～鎌倉時代の井戸

井戸SE312　第105次調査東区北トレンチの西端部で検出した井戸。SD307と重なる位置にあり、それより古い。曲物の井戸枠を二重にめぐらす。内側の曲物は径約30㎝、外側の曲物は径約40㎝を測り、いずれも高さ25㎝ほどが残存する。掘形は径約70㎝の円形である。11世紀代の瓦器椀などが出土したことから、その頃の遺構と考えられる。

井戸SE313　第105次調査東区北トレンチ、SE312の北方３mに位置する井戸。これも曲物の井戸枠を二重にめぐらしている。内側の曲物は径約30㎝、外側が径約40㎝とSE312とほぼ同規模である。遺構検出面から85㎝ほど掘り下げたが、底は未確認。外側の曲物は高さ35㎝、内側の曲物は高さ25㎝以上が遺存する。掘形は径1.3mで円形に近い。10～11世紀の黒色土器などが出土しており、この頃の井戸と考えられる。

G　僧房とその周辺（PLAN 9・10，PL.22～29）

遺存状況と基本層序　僧房は、金堂や塔、中門、回廊などとは異なり、比較的地盤のよい小丘陵の縁辺部に立地している。第111次調査北区および桜井市第９次調査区は、小丘陵に続く高燥な地形の頂部付近にあり、平坦面ないし北東へ向かってやや下る緩傾斜面をなす。

僧房SB340付近の基本層序は、上から、① 近現代の耕作土である暗茶灰色粘質土、②旧耕作土である黄褐色粘質土（厚さ30～40㎝）、③ 中世の瓦器を含む暗褐色粘質土（厚さ25～30㎝）、④８世紀の遺物を含む明茶色粘質土（厚さ10～25㎝）とつづき、その下が、花崗岩の風化した明黄灰色～明黄褐色シルトの地山となる。③層上面では、耕作にともなう素掘小溝を多数確認し、

さらには④層上面でも、それと方向を違える素掘小溝[31)]のほか、掘立柱建物SB345を検出した。僧房SB340は、後述するように建物内部を掘りくぼめているが、その最下部にあたる柱掘形検出面（地山上面）の標高は80.8～81.0m、SB340周囲の地山上面の標高は81.2m程度である[32)]。また、この北にある僧房SB400の遺構面の標高は80.9～81.4mであった。

なお、第111次調査北区の南半は、素掘小溝さえまったくなく、ある時期に削平されたか、当初より耕作に向かない地形であったと推定されるが、そこで確認した東西溝SD350付近の遺構面は標高81.3～81.4mである。その程度であれば、ゆるやかな北流れ面として耕作に適さないことはないとみられるので、少なくともこの部分は、ある時期（土層などからみて近世以降か）に、素掘小溝が消失する程度の削平を受けている可能性が高い。　大きく削平

一方、第105次調査中央区で検出した僧房SB260は、背後の小丘陵南縁を削って造成した平坦面に建てられており、近辺は南下がりの地形となる。このSB260付近の基本層序は、上から、①′耕作土、②′瓦器を含む灰褐色土（厚さ10～20㎝）、③′瓦器を含む暗灰茶色土（厚さ25～30㎝）、④′藤原宮期～平安時代初めまでの土器を含む暗橙黄色混じり灰色砂質土（厚さ10～20㎝）とつづき、その下が、地山である風化礫を含む橙黄色砂質土～シルトとなる。全体としては、SB340付近とほぼ同様の土層といえる。この地山上面で、飛鳥時代の僧房SB260と土坑SK261などを検出した。また、②′の下面では中世の大溝SD266などを、④′上面ではSB260周囲の小柱穴や小溝などを検出している。SB260付近の地山面は標高80.8～81.0m、中央区南端付近の地山面は80.3m前後である。

創建期の整地（PL. 29, Fig. 49）　僧房SB260の南方にあたる第105次池内調査区では、前節でも述べたように、吉備池廃寺創建にともなう整地を確認した。池内調査区の基本層序は、上から、Ⓐ池内堆積土、Ⓑ赤褐色砂質土と暗灰色～黄灰色砂質土が互層をなす整地土、Ⓒ吉備池廃寺創建に関わる整地土である灰色～灰黒色粘質土、Ⓓ古墳時代の遺物包含層である灰黒色粘質土～砂礫、Ⓔ黄灰色～橙黄灰色粘質土などの山土からなる地山崩落土、地山である花崗岩風化礫が斑状をなす橙黄褐色シルトとなる。

Ⓑ層は、池内調査区のうち、東端のトレンチ中央部から西から２番目のトレンチまで認められる。西端のトレンチでは攪乱を受けているが、その状況からみて、この位置までのびていたことが確実である。こうした広汎な広がりをもつことから、回廊や講堂などの基壇土そのものとは考えられず、吉備池廃寺にかかわる整地土である可能性が高い。

地山上面の標高は、池内東端のトレンチ北辺付近で79.8mであり、北方に位置する第105次調査中央区南端にくらべて約50㎝低い。地山は、ここからさらに西および南へ落ち込む様相を呈し、そこにⒹ、Ⓔ層が堆積している。なお、Ⓒ層下層には、一部に黄白色粘土と青灰色砂の

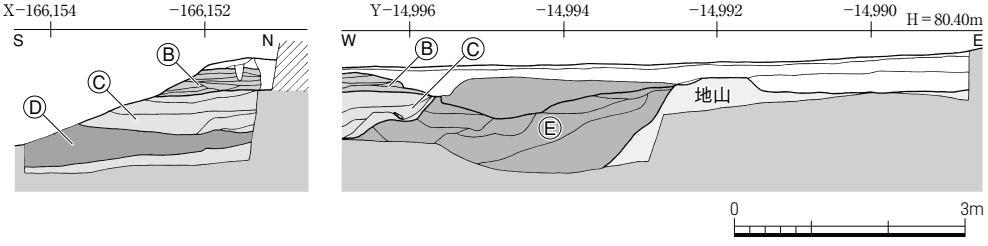


Fig. 49　吉備池廃寺創建期の整地　1:100

整地以前は低湿地

互層からなる水成堆積層が認められ、整地以前は流路ないしは低湿地だったと推定される。ⓒ層には飛鳥Ⅰの遺物が含まれ、吉備池廃寺創建にともなう整地土と考えられる。

僧房SB340（PL. 22～24，Fig. 50）　第111次調査北区で検出した桁行11間×梁行２間の東西棟掘立柱建物。建物の全長は桁行28.0m×梁行5.4mほどで、柱間寸法は桁行が約2.5m、梁行は約2.7mである。柱掘形は、一辺約1.5～2.0mの隅丸方形で、埋土は、地山ブロックを含む黄褐色系の粘質土が層状をなしている。東南隅の柱穴掘形には炭が混じるほか、抜取穴に焼土が混じるものがある。柱掘形の深さは個々で若干異なるが、検出面から1.1～1.5mである。東西の妻柱は、側柱にくらべて平面がやや小さく、さらに東妻柱は検出面からの深さが約1.0mと浅い。柱のほとんどは抜き取られているが、柱痕跡からみて柱径は30～35㎝と考えられる。間仕切りや廂の柱穴はない。

南側柱列東から２基めの柱掘形からは、時期は特定できないものの、比較的多量の土器片が出土した。ただし、わずかながら吉備池廃寺創建軒瓦も含んでおり、建物が建てられた時期は、伽藍中心部の瓦葺建物よりやや遅れるとみられる。抜取穴には、７世紀後半とみられる土師器の杯が含まれ、柱が抜き取られた年代を示唆している。

SB340の外側には、平行して素掘溝がめぐる。北側柱の北にある東西溝をSD341、南側柱の南にある東西溝をSD342、西妻の西側にある南北溝をSD343とする。いずれも溝幅は40～60㎝、検出面からの深さは20～40㎝ほどである。SD342は、僧房SB340の西南端で直角に折れて南北溝SD343となり、途中でSD341が合流してさらに調査区北外方へのびる。これらの溝は、建物の外側を囲うようにめぐることから、雨落溝と判断される。SB340の推定柱位置から溝心までの距離は1.2m前後を測り、これがこの建物の軒の出であろう。なお、東妻の東側にも同様の溝があるかどうかは確認できない。

雨落溝

軒の出は1.2m前後

SB340の西妻、とりわけ西南隅付近で溝がＬ字形に折れる部分には、溝の埋土である淡黄色粘質土が溝外の南西方向に広がっており、溝の水が氾濫した状況を呈する。SD343は北流し、北方へ排水したと考えられるが、屈曲点付近であふれたものであろう。また、断面の観察では、ほぼ同位置で１度もしくは２度にわたる溝の造り替えが認められる部分があり、建物はある程

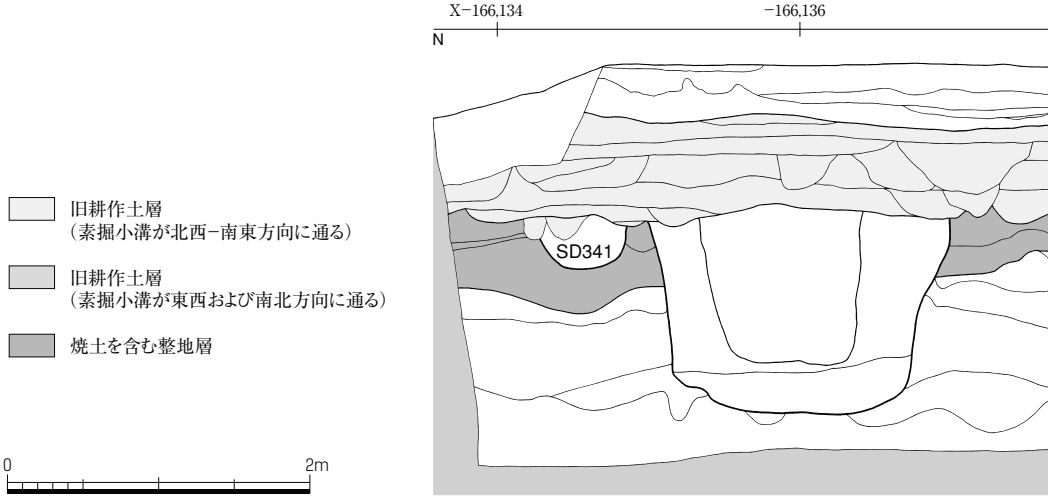


Fig. 50　僧房SB340東妻の柱穴断面図　1:50

度の期間存続したらしい。ちなみに、これらの溝から、吉備池廃寺創建期の軒瓦を含む瓦片が比較的多く出土しているが、この建物が掘立柱で、柱径も比較的小さいことを勘案すると、これらの瓦は本来、別の建物で使われていた可能性が高い。

柱掘形の検出は、建物の東部を除き、地山上面でおこなった。溝で囲まれた内部は、周囲より地山上面の標高が低く、地山によく似た整地土で覆われている。整地土の上面では抜取穴の輪郭がようやくわかる程度で、掘形の輪郭をつかむことはできなかった。掘形埋土も整地土とよく似た土質だが、雨落溝より内側となる部分の地山を掘りくぼめたのち、掘形を掘って柱をたて、整地を施しているようである。整地土中に遺物がほとんど認められないことから、建物内部を低くして使用したのではないらしい。この整地土は締まりがなく軟質で、建物外周の雨落溝は、これを切り込んでつくられている。

建物内部を掘り下げ

一方、建物の東端付近は、地山が北東へ向かって急激に落ちこみ、整地をおこなったうえで柱掘形を掘っている。こちらの整地土には、数カ所の焼土溜を含み、焼土溜SX357には飛鳥Ⅰの高杯Cのほか、スサ入りの焼土が混じる。次に述べる、SB340の北側にあるSB400の柱掘形や抜取穴にも焼土が含まれているが、これらは、第Ⅳ章３で後述するように(146頁)、寺院造営に先行して冶金関係の工房が存在したことに関連するのであろう。SB340の南東隅と北西隅の柱掘形によって破壊されている別の柱穴もしくは土坑は、それに関わる可能性が高い。

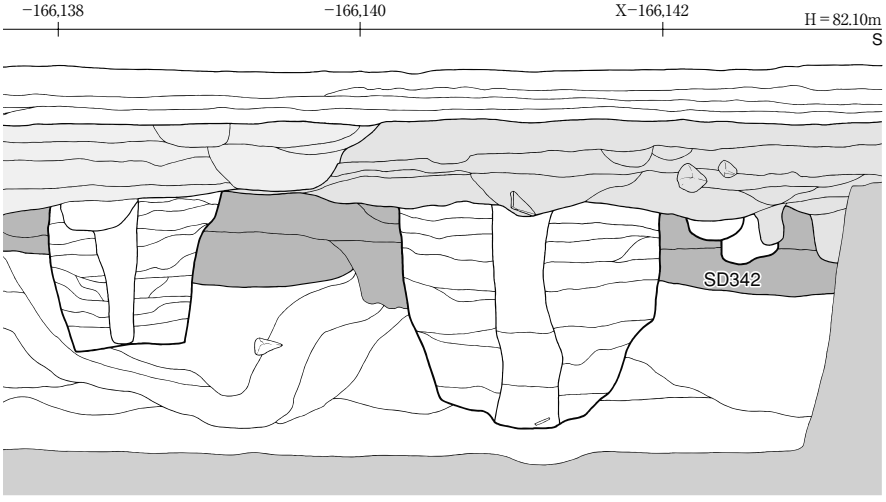
焼　　土

以上、SB340やSB400のような、伽藍後方にあってしかも東西に細長い建物は、僧房と考えるのが至当である。吉備池廃寺の僧房であることは間違いないだろう。

僧房SB400(PL.25・26，Fig.51)　桜井市第９次調査で検出した、桁行６間以上×梁行１間の東西棟掘立柱建物。建物の東端部を検出しているが、東の妻柱はない[33]。北側柱列７基、南側柱列４基の柱穴を確認し、柱間寸法は桁行が約2.7m、梁行が約5.4mである。先述のSB340の西側の南北溝SD343がそのまま北へのび、この建物の西を通ると考えると、SB400は桁行９間で、SB340と西妻をほぼそろえることになる。

西　妻　を　そ　ろ　え　る

柱掘形は南北に長い略長方形で、長辺２ｍを越える大型のもの。最も大きい北側柱列東から３基めの柱穴は、南北2.9m、東西1.5m、深さ1.3mを測る。ほとんどの柱穴に、南へ柱を抜い



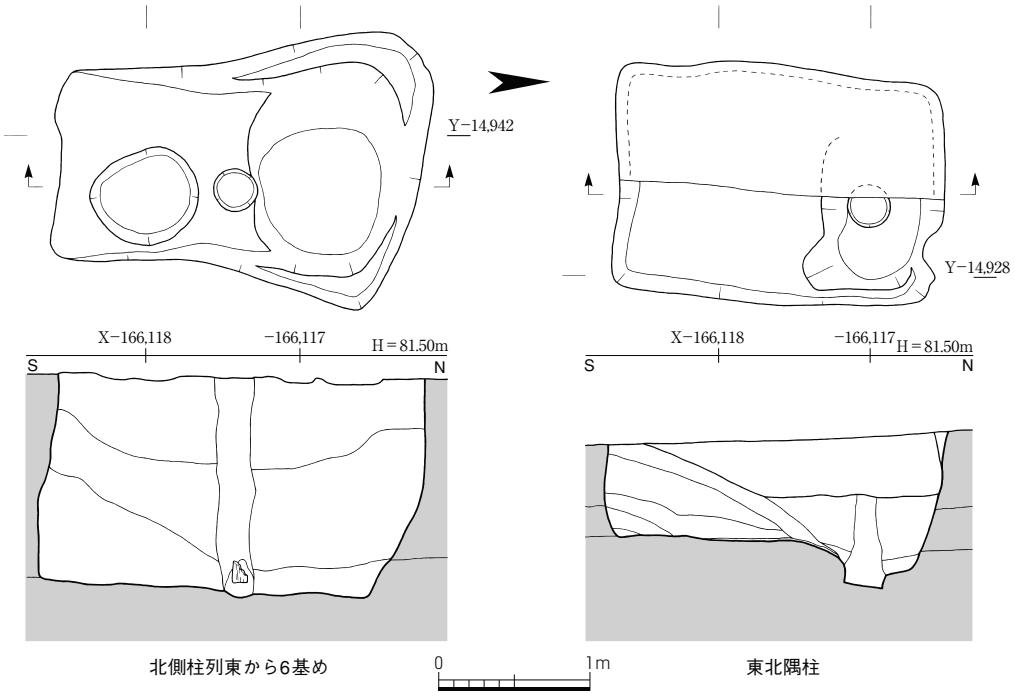


Fig. 51　僧房SB400柱穴断面図　1:50

たとみられる深い抜取穴があり、柱は掘形の北側に寄せて据えられていたことがわかる。ただ、北側柱列東から６基めには抜取穴がなく、柱痕跡が明瞭に残り、最下部に約20㎝の柱根が遺存していた。また北側柱列東から３基めの柱穴は、抜取穴をもつものの、底部に直径約30㎝の柱痕跡と腐蝕の進んだ柱根が遺存する。このほか、北側柱列の東から１～２基めと４基め、南側柱列東から４基めの底部近くには、粘土に置換した直径約30㎝の柱痕跡が残る。これらによって柱径および柱間寸法を把握することができた。

当初、巨大な柱掘形に対して柱径が小さいため、別にあった主柱が抜き取られ、添柱が遺存した可能性も想定したが、柱掘形と抜取穴の断面にそうした痕跡はまったく認められない。柱痕跡や柱根から復元される柱間寸法も整っており、柱径は30㎝程度とみて間違いない。なお、柱掘形には７世紀中頃までの遺物が、柱抜取穴には７世紀後半の遺物が含まれており、この建物の存続期間の一端がうかがえる。

SB400の東端以東では、北東の谷へむかう地山の落ち込みと、それを埋め立てた整地土を確認した。SB400東端の柱掘形は、この整地土上から掘り込まれており、整地は建物を建てる際
焼土や炭粒　におこわれたものらしい。また、SB400の柱掘形および抜取穴には、明瞭な焼土や炭粒が含まれている。こうした様相は上記のSB340と同様であり、第111次調査で確認した整地土中の焼土が、柱掘形の掘削時に入ったものと推定される。

僧房SB260（PL. 28，Fig. 52）　第105次調査中央区で東端を確認した、桁行３間以上×梁行２間の東西棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに約３ｍである。間仕切りや廂に相当する柱穴はない。柱掘形は一辺1.5m前後の隅丸方形で、検出面からの深さ1.1m前後を測る。柱は抜き取られた様相を示す。掘形・抜取穴とも、埋土中から遺物はほとんど出土しなかった。北側柱列東から３基めの柱穴は、後述する中世の大溝SD266・267によって大きく破壊され、遺存しない。この位置はSD266・267が交錯する部分にあたり、検出面から溝の底面までの深さは

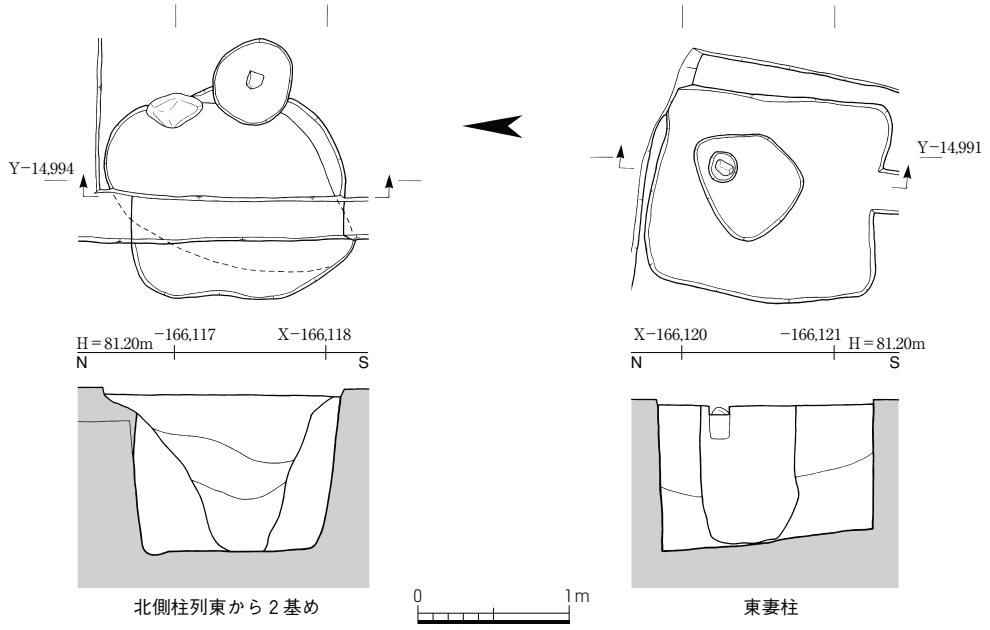


Fig. 52　僧房SB260柱穴断面図　1:50

85㎝程度である。したがって、ここの柱掘形はやや浅かったらしい。

SB260の東妻は、SB400の東妻から62.5m西にあるが、大型の柱掘形をもつこの２つの建物は、北側柱筋をそろえているとみられ、同時期の建物と考えられる。ともに、全長については明らかでないものの、僧房と推定してよいだろう。

土坑SK261　第105次調査中央区で検出した土坑。地山上で西辺部を検出したが、大部分は東の調査区外に広がる。直径2.5m以上、検出面からの深さ30㎝以上である。橙黄灰色砂質土を埋土としており、７世紀前半の土器が出土した。検出した層位と出土遺物からみて、吉備池廃寺創建期の土坑と推定される。

創建期の土坑

東西溝SD350（PL. 24，Fig. 53）　第111次調査北区の東南部で検出した素掘りの東西溝。幅1.0m前後、検出面からの深さ約40㎝を測る。底から20㎝ほどは流水による砂の堆積が認められ（下層）、それより上は、茶灰色の粘質土により一時に埋められた様相を呈する。この上層部分から奈良時代の土師器杯Ｃ小片と甕把手が出土した。一方、下層には明らかに奈良時代以降に下る遺物は含まれず、溝自体が比較的長いあいだ存続した可能性がある。「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」で検討するように、藤原京三条条間路の南側溝と考えられるが、これと対になる北側溝は検出できなかった。

三条条間路南側溝

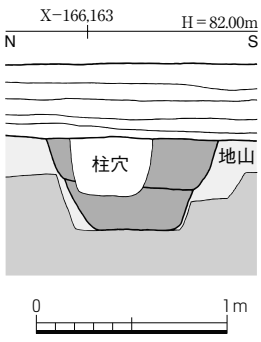


Fig. 53　SD350断面図　1:40

なお、SD350から三条大路北側溝と推定される東西溝SD180心までの距離は、110.7ｍを測る。三条条間路心から三条大路心までの距離は、原則的には375大尺[34]（大宝令大尺、以下同じ）＝約133mであり、過去の調査成果から、三条条間路の側溝心々間距離は20大尺＝約７ｍ、三条大路は25大尺＝約９ｍとみてよい。したがって、三条条間路南側溝心と三条大路北側溝心の間隔は、本来、352.5（375−20/2−25/2）大

尺＝約125mとなるはずだが、SD180とSD350の間隔は、それより14mほど狭いことになる。

掘立柱建物SB345　第111次調査北区で検出した、桁行４間×梁行１間の東西棟掘立柱建物。僧房SB340に重複し、それより新しい。柱間寸法は、桁行が1.8m前後、梁行は3.1mを測るが、東西の妻柱を確認していない。梁行の柱間は２間分の長さがあるので、妻柱の掘形がごく浅いため削平されたか、僧房SB400と同じく明確な妻柱の掘形をもたない建物であろう。柱掘形は50～70㎝の方形で、深さは検出面から約30㎝を測る。黄褐色の柱痕跡を残す柱穴があり、柱径は15～20㎝である。土師器杯、甕のほか、須恵器甕が出土した。年代を特定できないが、奈良時代に降るものではない。比較的整った柱掘形をもち、藤原京の方位に合致することから、藤原宮期の遺構と推定される。

藤原宮期の遺構

掘立柱建物SB346　第111次調査北区で検出した、方２間の南北棟掘立柱建物。中心の柱がなく、総柱建物ではない。僧房SB340の東端付近に重複し、それより新しい。柱間寸法は、桁行（南北方向）が2.1m弱、梁行（東西方向）が1.5m弱を測り、北でやや西に振れる。柱掘形は一辺60～90㎝、検出面からの深さ30～50㎝程度で、抜取穴のほか、掘形の一部にも焼土や炭を含む。柱掘形から飛鳥Ⅴの須恵器が出土しており、藤原宮期の遺構と考えられる。

掘立柱建物SB347　第111次調査北区の西南付近で検出した、桁行３間×梁行２間の南北棟掘立柱建物。建物の西側柱列にあたる柱穴４基を検出し、北妻柱と東北隅柱は調査区中央部の南壁にかかる。方位は、北で西に振れる。柱間寸法は、桁行が約1.4m、梁行が約1.9mである。柱掘形は、一辺50～80㎝、検出面における深さ30～40㎝を測る。出土遺物がなく、時期不明だが、柱穴の形状が比較的しっかりとしていることから、藤原宮期の遺構とみておく。

井戸SE355　第111次調査北区東部の南壁にかかる井戸。直径2.8m以上で、掘形は抜取穴に破壊されている。この北側には、井戸の中心に向けてやや低く傾斜する石敷があり、西方にも浅い掘り込みがあることから、当初は周囲を石敷としていた可能性が大きい。井戸の縁辺部に人頭大の河原石をならべ、そのまわりに拳大の礫を敷いたものであろう。平城Ⅲの土器が出土しており、８世紀中頃の井戸と考えられる。

奈良時代の井戸

井戸SE360　第111次調査北区の北壁にかかる井戸。井戸枠は抜き取られ、掘形は抜取穴によって破壊されている。検出面における抜取穴の径は約1.4mを測り、埋土は中央が下がる層状の堆積を示す。また、検出面から1.4m下の底面には直径35㎝、深さ20㎝ほどの円形のくぼみがある。この部分は柱痕跡状の淡黄色シルトで、底部の曲物が抜き取られず、痕跡として残ったらしい。出土遺物は少ないが、８世紀中頃の井戸と推定される。

井戸SE356　第111次調査北区の北壁にかかる井戸。掘形の直径3.5m以上の比較的大きなものだが、井戸枠などは抜き取られている。10世紀頃の羽釜などが出土しており、この頃の井戸と考えられる。平面的な掘り下げは断念した。

平安時代の井戸

このほか、第111次調査北区や第105次調査中央区北トレンチでは、径50㎝程度もしくはそれ以下の不整円形をなす柱穴を多数検出した。もっとも、建物としてまとまるものは少ない。柱穴からの出土遺物もわずかで、時期を特定できないものが多いが、埋土に黒褐色粘質土が入る柱穴は中世の遺構とみられる。

南北塀SA401　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の東に位置する掘立柱南北塀。調査区の制約から中間部分を確認していないが、６間分、計４基の柱穴を検出した。方位は北で東

に振れる。柱間寸法は約1.8m、柱掘形は50～70㎝の隅丸方形で、検出面からの深さ60～70㎝を測る。柱径は約20㎝と推定され、柱穴の底に板状の榛原石や平瓦を敷いたものがある。南方の第111次調査区では延長部分を確認していない。

区画溝SD402　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400に重複する素掘りの南北溝。検出面における幅約60㎝、深さ約１ｍを測る。溝の壁面は垂直に近く立ち上がり、底面は幅35㎝で平坦をなす。南は調査区外へのび、北側はSB400北側柱筋付近でとぎれる。埋土は暗灰褐色土で大きく３層に分かれるが、流水による堆積は認められない。藤原宮期の区画溝と推定されるものの、南方の第111次調査区では延長部分を検出していない。

藤原宮期の区画溝

区画溝SD403　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の南方にある素掘りの東西溝。検出面における幅約40㎝、深さ約20㎝を測る。遺物の出土が少なく、厳密な時期の比定は困難だが、先述したSD402と直交することから、同時期の東西方向の区画溝と想定した。

土坑SK404　桜井市第９次調査で検出した、僧房SB400の南側柱に重複する長方形土坑。南北3.2m以上、東西約0.7mを測る。深さは約50㎝で、埋土の上部には灰や炭・焼土塊を多量に含み、藤原宮期の須恵器・土師器などが出土した。

南北塀SA405　桜井市第９次調査で検出した、区画溝SD402心の西約１ｍに位置する掘立柱南北塀。３間分を検出し、南方の調査区外へと続く。柱間寸法は1.5～1.8m。柱掘形は一辺50～80㎝の方形で、検出面からの深さは35～50㎝である。北端で次に述べる東西塀SA406に接続すると解釈したが、さらにその北方へも不規則な柱間寸法でのびる可能性がある。埋土からは藤原宮期の土器が出土した。

東西塀SA406　桜井市第９次調査で検出した掘立柱東西塀。３間分を検出し、西方の調査区外へ続く。柱間寸法は1.5～1.7m。柱掘形は一辺65～80㎝の方形で、検出面からの深さは35～50㎝である。先述した南北塀SA405に接続すると考えられるが、南北溝SD402をまたいで、さらにその東へものびる可能性がある。藤原宮期の土器のほか、鉄釘などが出土した。以上、SA405・406は、SD402やSD403と併存する藤原宮期の区画施設の可能性がある。

中世の大溝SD266・267　第105次調査中央区の北寄りにあり、僧房SB260の北側柱を破壊する。上層の南北溝をSD266とし、その下層にある東西溝をSD267としたが、SD266の南端とSD267の東端は、平面的にほぼ同じ位置となる。

南北溝SD266は、地山上面で幅2.8m、深さ40㎝を測るが、上層にある灰褐色土（63頁の②′層）の下面から掘りこまれており、本来は、幅3.5m以上、深さ70㎝以上の規模となる。底近くに灰色粘土が薄く堆積するのが特徴で、14～15世紀とみられる白磁椀などが出土している。

東西溝SD267はSD266の下層にあり、SD266底面での幅は2.2m前後、そこからの深さは25㎝ほどだが、地山上面からの深さは約85㎝となる。やはり底に灰色粘土が堆積しており、SD266と類似した性格が想定される。出土遺物もSD266とほぼ共通し、14世紀の瓦器椀や14～15世紀の白磁椀、青磁椀などがある。

東西溝SD268　第105次調査中央区の南寄りにある素掘りの東西溝。検出した地山上面での幅は1.6m前後で、東で南に振れる。検出面から約60㎝まで確認したところで掘り下げを断念した。掘形は断面Ｖ字形をなし、瓦小片や小石が出土したが、時期を特定できる遺物はない。

H　北外周部の遺構（PLAN 11・12，PL.30・31）

遺存状況と基本層序　桜井市第11次調査区と第105次調査西区が該当する。桜井市第11次調査区は、金堂の北約140mの小丘陵上に位置し、調査区の東端部分は大きく削平を受けているものの、それ以西では、6世紀末～藤原宮期以前の遺構を比較的良好な状態で検出した。一方、第105次調査西区は、この小丘陵の西方に位置する。この部分は南下がりの地形のため、北半は地山面が浅く、中世以後の遺構しか認められなかったが、南半では、包含層下で奈良時代末～中世の溝や流路を検出した。

桜井市第11次調査区の基本層序は、上から、表土（厚さ約10㎝）、粗砂を多く含む暗灰褐色粘質土（厚さ約20㎝）、地山のブロックを含む暗灰色～暗褐色の粘質土（厚さ約10㎝）とつづき、その下が、地山である黄灰色の花崗岩風化土となる。遺構のほとんどは、この地山面で検出した。丘陵地のため、地山面の標高は、もっとも高い調査区西南隅付近で約84.0m、最も低い東北隅付近が82.8mであり、ここから東は近世に削平されている。

また、第105次調査西区の基本層序は、上から、盛土・耕作土（厚さ約40㎝）、暗青灰褐色土（厚さ約20㎝）、黄灰色～橙黄褐色粘質土（厚さ約30㎝）、地山である橙黄褐色の花崗岩風化土となる。ただ、北半部は耕作土・床土（厚さ約30㎝）直下がほぼ地山となっていた。地山面の標高は79.5m前後である。

以下、遺構について、桜井市第11次調査区、第105次調査西区の順に記述する。

切り通しSX421（PL.31）　桜井市第11次調査区の中央部にある東西方向の切り通しで、北側を切り下げている。段差は、次に述べる南北溝SD422の溝底との間で約70㎝、その他の部分では50㎝前後ある。後述する掘立柱建物SB420やSD422などを設けるため、北側の地山を切り下げ、平坦にしたものとみられる。

南北溝SD422（PL.31）　桜井市第11次調査区中央部から北にのびる素掘りの南北溝。南端は切り通しSX421で止まり、北は調査区外へと続く。幅は最も広い部分で3.0m程度、検出面からの深さ30～40㎝であるが、南にむかうにつれて西側の肩が乱れ、溝幅が狭くなる。埋土には地山ブロックを多く含み、人為的に埋められた様相を呈する。

掘立柱建物SB420　SD422の東に接する南北棟掘立柱建物で、建物の西南隅を含む部分を検出した。桁行3間以上×梁行2間以上で、柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.3mとみられる。東側柱列は削平によって失われており、北は調査区外へのびる。柱掘形は一辺55～90㎝の方形で、検出面からの深さは、35～90㎝である。北から2基めの柱穴には、径15㎝ほどの柱痕跡を残している。

吉備池廃寺関連の遺構

以上のSX421、SD422、SB420は、金堂・塔・僧房・回廊とほぼ同一の方位を示し、吉備池廃寺に関連する施設と推定される。

竪穴住居SB426（PL.31）　桜井市第11次調査区の西北隅で検出した方形の竪穴住居である。南北約3.5m×東西2.5m以上で、西の調査区外に続く。検出面から30㎝ほど地山を掘り下げ、南側に竈を設けている。方位は北で約20°西に振れる。東側の出入口とみられる場所では、径10㎝ほどの杭跡を2本確認した。竈の内部からは甑や高杯・杯などの破片が出土しており、6世紀末～7世紀初め頃の遺構とみられる。埋土は、地山のブロックを多量に含む比較的きれいな暗

灰褐色土で、自然堆積ではなく、人工的に埋められたことがうかがえる。

掘立柱建物SB425　桜井市第11次調査区の西北隅で検出した、桁行３間×梁行２間の東西棟掘立柱建物。竪穴住居SB426に重複し、それより新しい。東北隅の柱穴２基は調査区外となる。柱間寸法は、桁行が約1.6m、梁行は約1.5mである。建物の主軸は東で約20°北へ振れており、竪穴住居SB426と共通する。柱掘形は径35～70㎝で円形に近く、検出面からの深さ40～65㎝を測る。SB426より時期が降るものの、大きな時期差はないとみられる。

掘立柱建物SB423（PL.31）　桜井市第11次調査区の南寄りで検出した、桁行３間×梁行３間の総柱の南北棟掘立柱建物。全長は、桁行が6.3m、梁行4.2m、柱間寸法は、桁行が約2.1m、梁行は約1.4mを測る。建物の主軸は北で約15°東に振れ、東北隅の柱穴は切り通しSX421によって削平されている。柱掘形の多くは一辺約50～80㎝の方形を呈し、検出面からの深さは50～70㎝である。ただ、西側柱筋の柱掘形４基は南北に長い長方形で、長辺0.9～1.4m、短辺0.7～0.9mと大きく、検出面からの深さも、西南隅柱で約1.0mと深い。南側柱列西から３基めの柱穴には柱痕跡があり、柱径は約12㎝と復元される。

掘立柱塀SA424　桜井市第11次調査区の西南隅、SB423の西にある掘立柱塀で、直角に折れる。SB423同様、北で約15°東に振れる方位をもつ。東西・南北とも１間分を検出し、柱間寸法は、東西方向が1.3m、南北方向は1.9 mである。掘立柱建物となる可能性もあるが、柱掘形が小さく、併存するとみられるSB423との距離が１mしか離れていないことから、塀と考えておく。柱掘形は径50㎝前後の円形～隅丸方形で、検出面からの深さは40～65㎝である。

上記の掘立柱建物SB423と掘立柱塀SA424は、吉備池廃寺の時期とみられる南北溝SD422よりも古く、吉備池廃寺の直前にあたる時期の遺構と推定される。

吉備池廃寺直前の遺構

流路SD291～293　いずれも、第105次調査西区の南端付近で検出した自然流路である。

SD291は調査区東南隅から北北西へ向かう流路で、後述するSD287付近までのびて西方の調査区外へ続く。流路の東肩は比較的明瞭なものの、西肩は不明瞭で、ある程度の幅をもっていたらしい。青灰褐色砂～細砂を埋土としており、検出面からの深さ60㎝前後を測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土した。

SD292は、調査区西南隅から蛇行して北にのびる流路で、西方の調査区外へ続く。幅は明らかでないが、灰褐色砂～細砂の埋土をもち、検出面からの深さ40㎝程度を測る。12～13世紀の瓦器椀などが出土し、やはりその頃の遺構と推定される。

SD293は、SD291・292の下層にある円弧状の流路。検出面における幅1.4～2.3m、深さ40㎝程度で、橙灰褐色粘質土を埋土とする。９世紀の土師器皿などが出土しており、奈良時代末～平安時代初頭頃の溝とみられる。

素掘溝SD285～287　第105次調査西区の中央部付近で検出したコの字形の素掘溝で、西の調査区外へつづく。北側の東西溝をSD285、東側の南北溝をSD286、南側の東西溝をSD287とする。次に述べる素掘溝SD288～290より新しく、埋土がこれらを覆っている。SD285～287は幅1.0～2.0m、検出面からの深さ30㎝程度を測る。黄褐色～灰褐色の粘質土を埋土とし、14～15世紀頃の羽釜、12～13世紀の瓦器椀などが出土した。14～15世紀の遺構とみられる。

素掘溝SD288～290　第105次調査西区の中央部付近で検出したL字形の素掘溝。幅60～80㎝、深さ40㎝以上で、いずれも暗灰色粘質土を埋土とする。SD289・290には遺物がみられないが、

SD288から14世紀の瓦器椀などが出土しており、いずれも14～15世紀の溝と推定される。これらの溝が埋没したのち、ほぼ同じ位置にSD285～287が掘られている。

Ⅰ　南外周部の遺構（PLAN 12，PL.32）

基本層序　中門SB320の南方で実施した桜井市第12次調査が該当する。調査区の基本層序は、上から、現代の盛土（厚さ0.8～1.0m）、耕土・床土（厚さ25～30㎝）があり、その下が遺物包含層である暗灰色粘土（厚さ15～30㎝）となる。これには飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が含まれ、次に述べるSD441・442を覆っている。この下に、地山である暗褐色粘土が広がる。遺構面の標高は80.5～80.7mである。

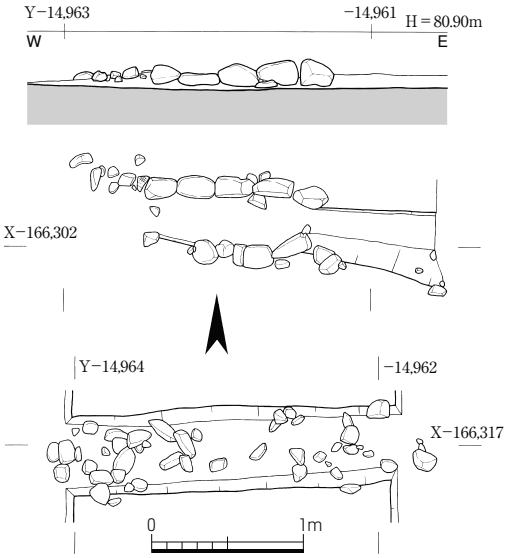


Fig. 54　SD441（上）とSD442（下）　1:50

東西石組溝SD441（PL.32，Fig.54）　調査区の北端付近で検出した東西方向の石組溝。拳大～人頭大の河原石を南北の側石として並べている。石組みの遺存状況は悪く、長さ1.7mにわたって確認したが、それより東と西には残っていない。溝の幅は内法で約30㎝、深さは15㎝程度である。いずれも南面回廊の南雨落溝SD161にくらべて小さい。北の側石はほぼ当初の位置にあるものの、南の側石で原位置に残るものは少なく、東端部の側石はともに内側に倒れ込んでいた。これらの側石も、SD161の側石と比較すると若干小振りである。溝は、この上部を覆う暗灰色粘土で埋まっており、須恵器の細片が出土した。

SD161より小規模

東西溝SD442（PL.32，Fig.54・55）　調査区の中央部で検出した東西溝。調査区を横断してさらに東と西へ続く。溝の幅は55㎝前後、深さは15㎝程度である。溝のなかには、側石が落ち込んだものとみられる拳大の河原石が散らばっていた。SD441と同じく暗灰色粘土を埋土とし、ごく少量の瓦が出土している。

ベースの高まりSX443（Fig.55）　SD441とSD442のあいだの中ほどにあるベースの高まり。南北幅3.6m、高さ20㎝程度の高まりで、不整形ではあるが、暗灰色粘土によって覆われ、古い段階から高まりとして存在していたことが確認できる。

以上の遺構については、中門SB320の南方に位置すること、SD441とSD442が対になる可能性が高いことから、これらを南北の雨落溝および基壇の名残とみて、この位置に吉備池廃寺の南門を想定することも不可能でない。桜井市教育委員会による当該地区の調査概報はその立場

南門か

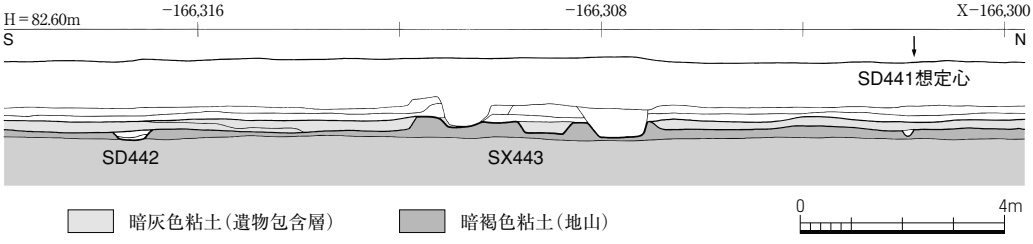


Fig. 55　東西溝SD441・442間の土層図　1:150

をとる[35]。しかし、そうした場合、SD441とSD442の心々間距離は約15.2mに達するので、中門の規模（南北の雨落溝心々間距離で約10.4m）をはるかに凌ぐものとなってしまう。溝の規模がそれにふさわしいものか疑問もあり、ベースの高まりが基壇土を構成するものかどうかも明らかでない。調査面積が限られ、遺構がきわめて断片的である点とあわせて、現状でこれらを南門の遺構と断定するのは困難であろう。本書における上記遺構の解釈については、「第Ⅴ章２ 伽藍配置の復元」を参照されたい。

1） 加えて、階段位置と建物の柱間は密接に関わると考えられるから、この場合、掘込地業段階で建物の柱位置まで考慮した高度な計画的施工がおこなわれたと想定しなければならない。

2） 山田寺講堂（桜井市山田）が正面端間を片開扉とするが、きわめてめずらしい。

3） 藤島亥治郎編『平泉 −毛越寺と観自在王院の研究−』東京大学出版会、1961年。

4） 奈良県教育委員会『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』1960年。

5） 西辺における掘込地業の座標はY=−14,970.9～971.2、東辺の座標はY=−14,934.9ほどである。なお、東辺には40㎝四方ほどの張り出し部分があるが、掘り込み時に壁が崩れた部分にも版築を施したものと解釈しておく。

6） 掘込地業の北辺の座標はX=−166,208.4～208.8、西南隅部における南辺の座標はX=−166,232.8と計測でき、本文で述べたように、この東側ではさらに南方へ張り出す。南方への張り出しを掘込地業と認めても、掘込地業の南北幅は最大約30.0mとなる。

7） 掘込地業の範囲と基壇規模の関係が判明するものとしては、以下の事例がある。まず、ほぼ同規模の例としては、７世紀末～８世紀の橘寺塔（明日香村橘）、８世紀の平城宮壬生門（奈良市）、下野国分尼寺金堂（栃木県国分寺町）、相模国分寺講堂（神奈川県海老名市）がある。一方、基壇より広い範囲に掘込地業を施す例には、中国北魏代の永寧寺塔（河南省洛陽市）、７世紀中葉～後半の山田寺金堂・塔、７世紀後半の川原寺東門（明日香村川原）、８世紀の相模国分寺塔、筑後国分寺講堂（福岡県久留米市）、11世紀の法勝寺金堂や12世紀の尊勝寺阿弥陀堂（ともに京都市）がある。なお、このうち筑後国分寺講堂は、掘込地業と基壇の心が一致しない。また、肥前国分寺塔（佐賀県大和町）では、25.4×24.9mの掘込地業を検出しており、塔としては日本最大級の掘込地業となるが、これも基壇範囲を越えて掘込地業を施した可能性がある。逆に、掘込地業の範囲を越えて基壇を築く例としては、８世紀の武蔵国分寺金堂・塔（東京都国分寺市）、下総国分尼寺金堂（千葉県市川市）、美濃国分寺塔（岐阜県大垣市）、伊予国分寺塔（愛媛県今治市）がある。

　壬生門：奈文研『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1981年。橘寺：奈良県立橿原考古学研究所『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集、1999年。諸国国分寺：角田文衛編『新修国分寺の研究』第２巻～第７巻、吉川弘文館、1987年～1997年。永寧寺：奈文研『北魏洛陽永寧寺』奈文研史料第47冊、1998年。山田寺：奈文研『山田寺発掘調査報告』奈文研学報第63冊、2002年。川原寺東門：『藤原概報 4』1974年。尊勝寺・法勝寺：古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店、1994年。

8） 土壇上南北トレンチの北端で礎石抜取穴の可能性を残す落ち込みを検出したが、土壇の保存を第一として断面観察をおこなっていないため、明確でない。ただし、この位置に金堂建物の柱が立つと想定した場合、身舎の妻柱に相当することになり、同じトレンチ内の南方にも柱が立つはずだが、そうした痕跡は確認されていない。

9） 現存基壇上面の標高が82.6m、後述する基壇東方の砂利敷SX103の上面は80.8～80.9mである。

10） 金堂および中門の南方でおこなった「橋本冠名遺跡」の調査では、わずかに凝灰岩片が出土しているが（前園実知雄「橋本冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、1985年）、金堂基壇に大量に使用されていたとは考えがたい。

11） 基壇高が大きいことから、凝灰岩壇正積を想定すると羽目石が大きくなり、それにともなって地覆石も大きくなる。たとえば、古墳の事例であるが、高松塚古墳（明日香村平田）の石槨の南壁は、137×113㎝の平面に対して、厚さが45～49㎝あり（奈良県教育委員会・明日香村『壁画古墳高松塚調査中間報告』1973年）、同程度の羽目石を想定した場合、地覆石は羽目石以上の大きさをもつはずである。しかし、このような大きな石材が抜き取られた痕跡はまったくない。したがって、下成基壇

が小さい二重以上の基壇を想定せざるをえないが、その場合も、凝灰岩片を含めて、基壇外装の痕跡がすべて失われた理由は説明しがたい。

12）石製の基壇外装は、基壇土との間に裏込土を入れて石材を固定する必要があるが、木製の基壇外装では、しっかりとした版築基壇を築いていさえすれば、裏込土の必要性は乏しい。なお、このように木製の基壇外装を想定した場合、後述する基壇周辺の掘立柱穴SB106～109、SA110は、基壇にとりつく階段関連の遺構となる可能性もあるだろう。

13）板材の痕跡を検出した例として、7世紀末の横滝山廃寺金堂（新潟県寺泊町）、8世紀中頃に創建された近江国庁の政庁東側区画にある礎石建物（滋賀県大津市）、8世紀後半創建の小食土（やさしど）廃寺（金堂？）（千葉市）がある。また、束柱が遺存した例として、12世紀の毛越寺南大門・廊・講堂（岩手県平泉町）、13世紀の永福寺二階堂・薬師堂・阿弥陀堂（神奈川県鎌倉市）があり、7世紀中頃の前期難波宮（大阪市）における内裏中心部の建物周囲の小柱穴についてもその可能性が指摘されている。このほか、三河国分寺塔（愛知県豊川市）では、掘込地業の外縁部に角材を約10°ほど内傾させて立てならべ、基壇外装としていた。

横滝山廃寺：寺泊町教育委員会『横滝山廃寺跡発掘調査概報 －第3次調査－』1984年。同『横滝山廃寺跡発掘調査概報 －第4次調査－』1985年。上野邦一「木造基壇外装を持つ建物の一事例 －新潟県三島郡寺泊町の横滝山廃寺－」『日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集』日本建築学会、1984年。小食土廃寺：千葉県教育委員会『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』1986年。近江国庁：滋賀県教育委員会『平成10年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』2000年、35～43頁。毛越寺：藤島亥治郎編『平泉』前掲註3）。永福寺：鎌倉市教育委員会『永福寺跡 －遺構編－』2001年。前期難波宮：植木 久「前期難波宮遺構にみる建築的特色 －いわゆる“小柱穴”遺構を中心に－」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、大阪市文化財協会、1999年。三河国分寺：豊川市教育委員会『三河国分寺跡』1989年。

14）前期難波宮は、白雉3年（652）に完成した孝徳朝の難波長柄豊碕宮とみてよいが、その主要建物が木製の基壇外装を備えていたとすれば、この点も傍証となる。飛鳥板蓋宮とあわせて、7世紀中葉の宮殿建築が、屋根や基壇外装に厚板を含む木材を多用した可能性は高いと考える。

15）地下水位が掘込地業の底面より高くなった場合に湧水を集中させ、掘込地業部分に水が浸入するのをおさえる機能をもつ溝であろう。底に礫を入れるのは、暗渠としての機能をもたせたためと考えてよい。ただし、基壇基底部や基壇自体の高さをそろえる目的で、この溝に水を張って垂直方向の基準とした可能性も想定しうる。これと同様の溝はしばしば検出されており、山田寺では基壇周囲の排水溝と推定されている。基壇からやや離れて設けられ、周囲の整地以前に埋められるため、基壇周囲の整地土下層で検出されることが多く、調査の手がおよばないことも少なくないと思われる。なお、基壇外装や礎石を水平に据えるため、建物の四隅に立てる柱などの痕跡はとくに確認できなかった。中国宋代の水平を測る技術については、田中 淡「『営造法式』自序看詳總釋部分校補譯注（上）」（『東方学報』第72冊、京都大学人文科学研究所、2000年）の「定平」の項を参照。

16）瓦器1点と近世陶器2点が出土したが、いずれも小片であり、上部の攪乱土ないし時期の下る遺構からの混入とみなされる。

17）東西方向に関しては、版築を確認できる西限の座標がY=−15,050.2、東限はY=−15,024.3である。一方、南北方向は、南限がX=−166,239.3となるものの、北限については確認できない。土壇上中央トレンチ北方に設けた小調査区で基壇土が認められることから、これを基壇内として、その北壁の座標X=−166,212.6を、確認できる基壇の北限とみておく。

18）ただし、土壇上東トレンチ内で観察できる版築層は、北から南へ下がる傾斜面をなしている（Fig. 39）。これは、心礎の南東方にあたるものの、基壇縁辺部からは遠く、しかも東西方向でなく南北方向への傾斜であるため、何に由来するのか明らかでない。基壇西辺部におけるA・Cブロックとは異なる性格と考えておく。あるいは版築の作業単位の差によるものだろうか。

19）香芝市教育委員会『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5』1996年。

20）『藤原概報 9』1979年、43～52頁。

21）高句麗清岩里廃寺（平安南道平壌市）にみられるような八角形の基壇を想定すれば、調査区内に基壇がかからないことになるが、現在の土壇の形状を見るかぎり、その可能性は乏しいだろう。

22）調査区には、東壁にかかる斜行溝SD323のほか、遺構としては明確でないものの、調査区東北隅から南西へ斜行する流路状の砂礫などがあり、吉備池廃寺廃絶後も洪水の影響を受けやすい地形であったらしい。中門や南面回廊の基壇は、そのような後世の流路や氾濫によって削平されたものとみられ

る。このため、ベース土と遺物包含層の区別も明瞭とはいえなかった。

23）SD321およびSD322の底で確認できる側石痕跡の座標から、基壇東縁がY=−14,957.4～957.7、西縁がY=−14,969.0～969.4となり、東縁・西縁の雨落溝が若干振れることから、最大をとって東西幅12.0mとした。また基壇南縁がX=−166,277.1～277.2、基壇北縁がX=−166.267.2～267.4となることから、南北幅は9.8mと推定した。

24）条坊の数詞呼称は、京域や京極の位置をどうとるかによって異なることになるが、本書では、混乱を避けるため、便宜的に岸説およびその延長呼称を用いる。

25）第89次調査では、藤原宮期の東西溝SD180を認識していない。また、『年報1998−Ⅱ』では、回廊礎石抜取穴らしいくぼみをSD180想定位置にも認めているが、誤認である可能性が大きい。

26）水平距離に対する高低差の比は、むしろ第111次調査南区と第95次調査南区の間の方が大きい。

27）第111次調査南区では溝埋土と地山の区別が難しく、とくに南辺を掘りすぎた感があり、本来は、幅2.0±0.3m程度の溝と推定される。

28）三条大路南側溝の位置は、第111次調査南区の南端（X=−166,281）より南となる。「橋本冠名遺跡」（前掲註10））の調査区北端の正確な座標は不明だが、SD180溝心から９m南に南側溝心を想定したとしても、溝の南端がかかる程度で、溝としての確認は難しいと思われる。一方、桜井市第12次調査区の北端は、X=−166,297.1と第111次調査区南端から16m南にあり（桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年、13～16頁）、南側溝の検出は望めない。

29）この建物を桁行３間（柱間寸法３m）の八脚門とすれば、その中心はこれより約4.5m東に想定できる。一方、「第Ⅴ章５ 藤原京条坊と寺地」の復元では、この掘立柱列の位置は、左京三条十坊西南坪の中心より約13m西となるが、前提となる条件に限界があり、坪の中心に近いとみて問題ない。

30）伽藍配置を含めた検討でも、SD201は西雨落溝とみるのが妥当なことが判明している。「第Ⅴ章２伽藍配置の復元」参照。

31）第111次調査区東北部の中近世時点での旧地形は現在よりも一段低く、②層上面に相当する土層から、現在の畦畔の北縁にほぼ平行する北西−南東方向の素掘小溝を検出している。

32）ただし、SB340東端付近は地形が急激に落ち込み、整地を施したうえで柱掘形を掘っている。

33）同様に妻柱をもたない例として、桜井市脇本遺跡第６次調査でも、桁行８間×梁行１間の西廂つき南北棟掘立柱建物（６世紀後半）を検出している（桜井市文化財協会『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』1992年、21～24頁）。SB340でも東妻柱は浅く、本来、掘立柱建物の妻柱に構造的な意味は乏しいとみてよい。ただし、壁を施工するためには必要であって、ごく浅い掘形をもっていたか、土台もしくは礎石上に柱を立てていた可能性が想定される。なお、SB400の梁行は、遺構としての柱間を数えれば１間になるため、２間分の梁行寸法をもつものの、梁行１間と表記する。

34）大宝令大尺は、当時の土地測量に使われた尺度で、いわゆる高麗尺に相当する。１大尺=1.2小尺という関係にあり、実長は0.354～0.355m前後。小尺はいわゆる天平尺（唐大尺、１尺≒0.30m）である。なお、大宝令大尺・小尺をそれぞれ唐大尺・唐小尺（１尺≒0.25m）とみて、高麗尺の実在を否定する見解があるが（新井 宏『まぼろしの古代尺 −高麗尺はなかった−』吉川弘文館、1992年）、度地に関わる部分での大宝令の大尺使用規定や、和銅６年（713）2月19日の格によるその小尺への改定状況は、遺構や現存建築のうえでも数多く確認できる。したがって、それらが空文でなく実際に遵守されたこと、大宝令小尺が唐大尺であり、大宝令大尺がその1.2倍のいわゆる高麗尺であったことは動かない。井上和人「古代都城制地割再考 −藤原京・平城京を中心として−」『研究論集 Ⅶ』、奈文研学報第41冊、1984年。小澤 毅「条坊の復元」『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』奈文研、1995年。

35）桜井市教育委員会『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』前掲註28）、13～16頁。